

## 第4章 まとめ

### 第1節 検出遺構について

#### 1 沢検出遺構のまとめ

沢の自然流路内から検出された遺構は、第1号木組遺構、木道、樹皮範囲・杭跡1、板敷遺構、杭跡2、導水状遺構、クリ果皮片集中範囲である。以下にその概要を述べる。

#### (1) 遺構の形態・機能について

構築された場所やそこから想定される機能には以下のようなものがある。

- A類 第1号木組遺構 - 自然流路内に木材による枠を設け、水を貯めるもの。この上流側にも板材により段差を設けている。
- B類 導水状遺構 - 木材や杭を配置することにより水の流れを変化させるもの。
- C類 杭跡1・2 - 流路の壁に沿って打ち込まれたもの。
- D1類 木道 - 対岸をつなぐ通り道。
- D2類 板敷遺構 - 足場や作業場のなもの。対岸をつなぐ通り道の可能性あり。
- E類 樹皮範囲 - 平面的な広がりをもつもの。
- F類 クリ果皮片集中範囲 - 剥き終わったクリ果皮を廃棄した場所。

A類 水を堰き止めて流路側縁に木材を配して枠を作るということから考え合わせれば、水を貯めて使用する、あるいは一時期に一定量を確保するという意図がみられる。第1号木組遺構の導水部は、貯水部に入る水(水量・水流速度)の調整にあると考えられる。これは、丘陵から段丘崖までの距離が短いという地形のため、この流路の傾斜角度が大きく、砂や泥を巻き込みながら水が流れていると想定され、この水の流れる速度を調整するために板材による段差を設けた可能性が考えられる。このような主体的機能のほかに、水流の調整が行われることで一時的に水の流れが遮断され、水の溜まる場所として利用された可能性がある。現に、容器状の用途不明加工材(図16)や敲き具や作業台?の可能性のある板材が導水部付近で確認されている。

B類 本流と支流の合流部分の手前、支流側で検出されている。検出された大型丸木材が原位置を留めていない可能性もあるが、ここでは、検出位置に基づいて検討する。支流側の水の流れを大型丸木材で抑えることにより、支流側の水の流れをできるだけ一定にするような配慮がみられる。板材を2枚組み合わせ樋状になった遺物の検出状況は、本流の水の流れにこの板材を配することにより水の流れを分岐させる働きがあると想定される。本流の流れに直交して打ち込まれた杭列は、やや間隔が開いた状態であることから、水の流れを止めるほどの施設ではなく、上流から流れてくる枝・葉などのようなごみ類を下流側に流さないための施設の可能性が考えられる。本来は杭に枝などを組み合わせたしがらみ状遺構であった可能性が想定される。

C類 自然流路内の南北斜面際に沿って打ち込まれている杭跡で、杭跡 1・2 とともに、導水状遺構や樹皮範囲などの遺構に近接して検出されており、これらの遺構に補足的役割を持つ可能性がある。杭に使用される材は、割材や板材、転用杭などの断面規模が小さいものが使用され、D層まで打ち込まれていることが確認されている。杭跡は、土留としての機能が考えられるほか、検出されていないがD層が斜面際に沿った道であった可能性も考えられる。

D類 沢の流れに直交して検出された大型の板材や割材で、杭によって固定されている木道(D1類)と、固定されていない板敷遺構(D2類)に分かれる。木道に使用された木材には3つの特徴がある。

1 位置が固定される。2 南北の斜面对岸同士をつなぐ規模を有する。3 構成材は平坦面を持つ。これに対して板敷遺構に使用されている板材は、1 位置が固定されない。2 木道として対岸まで到達しない。3 足場として不安定な形状である。などの特徴がある。板敷遺構の設置された面はB層中であり、水の流れは A層～ B層の層理面までほとんど見られないことから、作業場・足場・木道等、様々な可能性が考えられる。

E類 河床面で、樹皮の広がり確認されたのはAN57の範囲のみである。第2章で第1号木組遺構の底板と同様の役割を、前段階で使用された木組遺構の作り替えの可能性について言及した。樹皮を敷いた木組遺構は他遺跡でも確認されており、本遺跡でもその可能性を考えることはできる。しかし、第1号木組遺構からの水の供給に関連性があることを考慮すれば、むしろ木組遺構と一体となって何かしらの場として利用された空間であった可能性の方が高いように思われる。

F類 B層中にはクリ果皮片がもともと多く含まれていたが、とくにクリ果皮片が集中する範囲は、継続的に(あるいは一時期に多量に)その場所が廃棄場になった可能性を示す。

## (2) 検出層位別にみた遺構の新旧関係と時期

層位別にみた遺構の検出は以下のとおりである。

C層検出 第1号木組遺構、木道、樹皮範囲・杭跡1、杭跡2、導水状遺構

B層検出 板敷遺構、クリ果皮集中範囲

### C層検出遺構の関連性

C層検出遺構は上流側から、導水状遺構・杭跡2、第1号木組遺構、木道、樹皮範囲・杭跡1の順である。これらは同じ層位の検出であるが、厳密に言えば、検出地点等や検出面のレベルが各々異なり、これらの同時期性についての検証も必要かと思われる。

水の流れ	上流	B	A	E	下流
		.		.	
足場?		C	D1	C	

遺構の機能・構造上の分類からみると、各々の遺構がそれぞれの地点で役割を果たし、自然流路内で一体となって機能していた可能性が考えられる。先に述べたように、導水状遺構で水の流れの方向を操作し、第1号木組遺構導水部で水量・水流調整が行われて貯水部内で水のプールが行われ、一定量以上溜まることにより排水部から排水される。排水された水は土留部や木道により土の流入を極力



避けており、きれいな水のまま樹皮範囲へと注がれる。なお、樹皮範囲より下側には遺構は構築されず、土器の捨て場になっていた可能性が高い。構築時期は、木組遺構出土遺物、C層出土遺物、放射性炭素年代から、円筒下層b式期と思われる。

#### B層出土遺構の関連性

B層検出遺構は、板敷遺構、クリ果皮片集中範囲である。板敷遺構は調査区の上流域を中心に50cmから1.8mの間隔で南北斜面をつなぐように置かれている。板敷遺構やクリ果皮片集中範囲3・4はそれぞれ検出レベルが異なり、最終的な検出状況から確認されたものである。新旧関係は、

新 52-3            52-1・2・4            クリ果皮片集中範囲4 古  
クリ果皮片集中範囲1～3

の可能性が考えられる。クリ果皮片集中範囲4は、板敷遺構の大型板材が置かれる以前にクリの果皮範囲を形成しており、これらが、絶えず形成されるような環境であったと推測される。

遺構からは、D2・F類の機能が得られ、作業足場+廃棄場という2つの機能が想定される。クリ=食料に関連する遺物として、容器としての用途も想定される舟形木製品や漆器類の出土など、板敷遺構周辺の遺物出土状況をみると、食料の盛り付けや調理に使用されたと思われる遺物と何らかの関連性を持つ可能性もある。一方土器の出土は沢の下流側AN59・60付近に集中する傾向がみられ、これらの遺構付近では土器の廃棄はあまりみられない。“土器捨て場”と異なり、作業する場としての認識が多かれ少なかれあったと考えられる。

構築時期は、B層出土遺物・放射性炭素年代から円筒下層b・c式に相当すると思われる。

#### (3) 他遺跡との比較(図166)

自然流路を利用した遺構は近年増加の傾向をみせており、佐々木氏によりこれらに関わる遺構の集成が行われている(佐々木2000)。第1号木組遺構導水部と同じような構造をもつものとして、福岡県長野小西田遺跡例の「上流側の床を保護するために上流側に柵を設け、直接水が床に当たるのを防ぐ施設を設けている。」(前田ほか2001)もの、栃木県明神前遺跡の貯水部に見られる「木組遺構の南西辺を斜めにし、排水のための溝状遺構と接する部分を狭めることにより、水位を上げ、水の流れをスムーズにする構造になっている。」(鹿沼市2002)など、構造上の共通点が見いだせる。長野県栗林遺跡では他遺跡の例を比較して、木枠遺構内に溜まった水が常時入れ替わって行く構造となるものが多いことが指摘されている((財)長野県1994)。

貯水部内に木材を敷く例は、東北地方でも秋田県柏子所遺跡例(村上ほか2003)などに見られ、これ以外にも全国各地で利用されている。栃木県寺野東遺跡ではこの敷材について「足場的なものと考えより、きれいな水を保つための行為の所産」(江原1998)との見解が示されている。敷材は、水流に対して木材の長軸が直交して敷かれている例と平行して敷かれている例が見られ、本遺跡例は後者に属するが、これらの違いがどこに起因するかを検討していく必要がある。

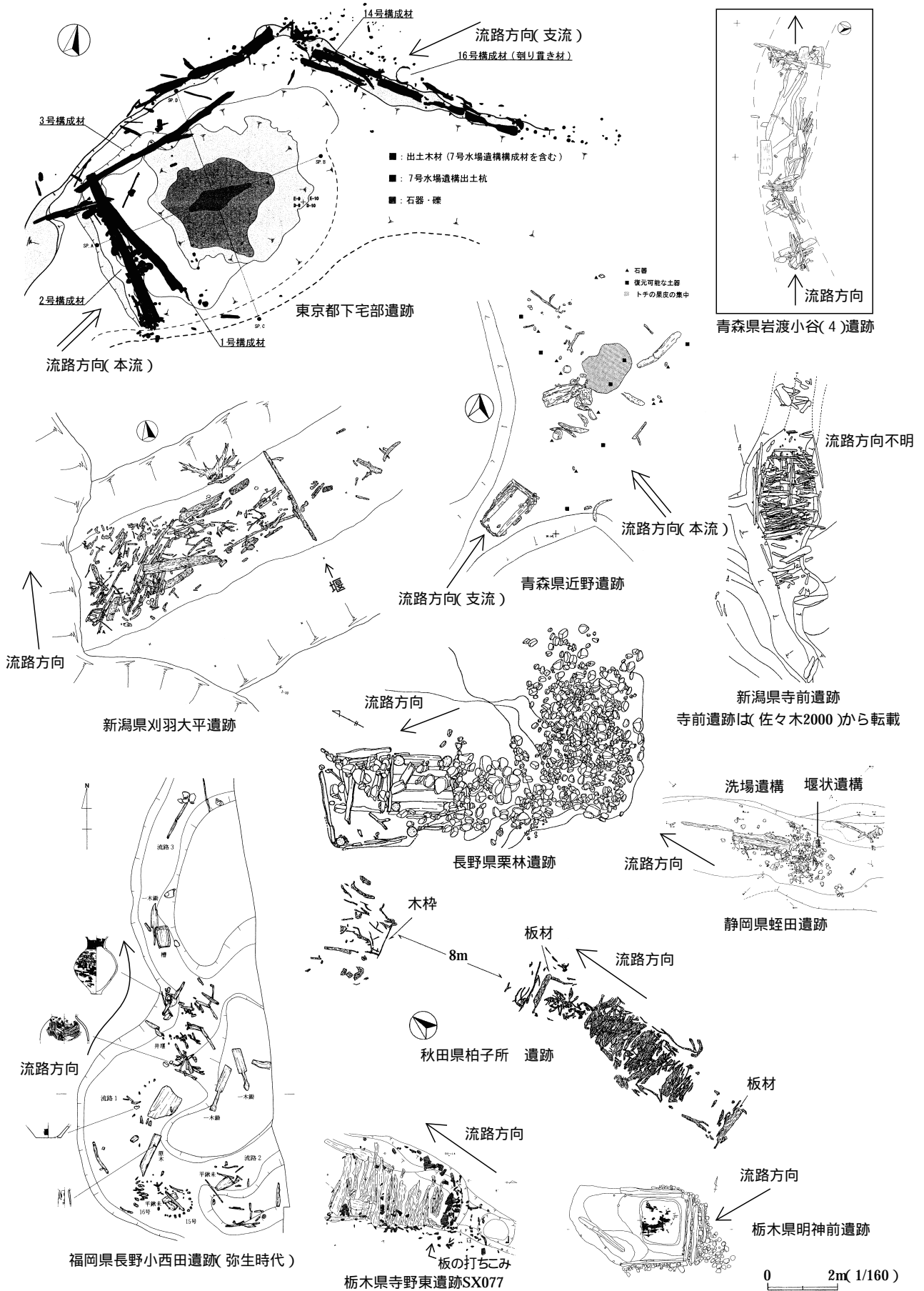


図166 他遺跡の関連遺構

堰部と同じような構造をもつものとして、新潟県刈谷大平遺跡（柏崎市1985）の堰状遺構、静岡県蛭田遺跡堰状遺構（静岡市1990）、東京都下宅部遺跡の第7号水場遺構（東村山市2000）、寺野東遺跡S X 077の主体部北側などが見られる。堰部によって水を上流側に貯める以外に、下流側で施設をもつものが、寺野東遺跡S X 077と蛭田遺跡堰状遺構の下流で見られる洗場遺構である。S X 077は最低3列の板材が打ち込まれており、主体部とこの北側を区切るものと位置づけられている。洗場遺構は「板材を敷き詰め、3方を木杭と直径20cm程の大きな礫により、固定している部分がある。」という状況である。これらは、本遺跡の堰部と堰部下流側の樹皮範囲を合わせた構造に類似している。

出土遺物の状況からは、先に挙げた長野小西田遺跡例の大型農具水漬場や明神前遺跡例の貯水部内から石斧柄末製品が出土した状況が類似している点が挙げられる。

立地で見ると、一条の小支谷を利用した本遺跡例のほかに、台地の斜面から湧出する水が集まった谷底の水流を利用した柏子所遺跡例、自然流路内に検出された刈羽大平遺跡例、詳細は不明だが、自然流路内で検出された新潟県寺前遺跡例が見られる。このほか谷本流とその小支谷に遺構が作られる青森県近野遺跡例（村上ほか2003）や寺野東遺跡例、下宅部遺跡例などがある。

#### （4）民俗例からみた例

栗林遺跡で検討されたように民俗例から第1号木組遺構の機能を想定してみる。

ドングリの水さらし トチノキの水さらし例は多く紹介されているが、地方や時代によって少しずつ異なり、多種多様にわたる。ここでは、トチノキの水さらしには触れず、ドングリの水さらし例を検討する。東北地方ではシタミと呼ぶ（コナラ・ミズナラなど）もので、外皮をとり、水にいれて皮を流し、袋にいれて絞り、上澄みを替える。上澄みを何度も変えることにより、得られる食料である。ワラビ澱粉（ネバナ）の水さらし（三浦1983、柴田1999）根を取りだし、川端で洗い、板間の上で杵により砕き、キツ・キツ（根舟）にいれゴミや汚れを除く、すだれを置いて、置き汁を通し、底に沈むのをまち、何回もこれを行う。得られたものは、近世には糊としても使用されたという。ウルシの枝まわし（河南1993）第1号木組遺構では、炭化したウルシ属の種子が出土しており、ウルシの木が木材に加工されていることや漆器が出土していることから、遺跡周辺に自生していた可能性は高い。利用された可能性を考慮して紹介する。

枝まわしは、10・11月ころ、枝を落として適当な本数に束ねたものを10～20日間（『農業全書』では5～7日）切口を下にして水に漬ける（流水でも池水でもよい）。これを取り上げて切り込みをいれると、水分があがって汁がでるようになる」とされている。これは、接着力が強く、修理用に使われたらしい。

#### （5）遺構の機能と構築時期

本遺跡の沢内に形成された遺構は水を利用した施設である。沢を流れる水を「貯める・利用する」施設であり、これを補助する機能を持った様々な施設を設けている。導水状遺構によって流水の流れを保持し、木道等により、作業に必要な通路を設け、第1号木組遺構貯水部で水を貯め、下流側の樹

皮範囲に水を流している。

他遺跡の例と比較すると、第1に想定されるのが、堅果類のアク抜きを主体とする“水さらし場遺構”である。先述したようにきれいな水を得るための様々な工夫が行われている可能性が高く、きれいな水を常時・多量にということであれば、民俗例に紹介したようなコナラ節の水さらしが想定される。しかし、佐々木氏の指摘するように（佐々木 前掲）、トチ塚などのように特定の種類の堅果類が多量に出土しない限り、人為的所作を論じるのは難しい。コナラ属はクリと違って集中範囲等は確認されていないが、細片となったコナラ属の破片が沢の堆積土各所から出土しており、わずかに利用された痕跡が認められるのみである（第3章第11節）。仮に第1号木組遺構の貯水部が単純に堅果類の水さらし場のみで使用されたとすれば、貯水部の規模や破片量からすれば非常に少ないと言わざるを得ない。

第2に想定されるのは、先に挙げたワラビ澱粉の水さらしである。これは、根菜類を掘り上げたと思われる掘り棒（第2節3木質遺物）が貯水部北側でまとまって出土したことや貯水部上面で槽が出土したことから（図18）、可能性の一つとして挙げられる。

第3に想定される機能は、貯水部内底面から石斧柄末製品が置かれたような状態で出土していることと関連する。弥生時代の例であるが、長野小西田遺跡の大形農具水漬場にみられるように木器を水漬けする施設としての機能も考えられる。これは、広葉樹の場合とくに強度を保つのに見られる事例である（山田昌久氏の御教示による。）。このほか、伐採実験等の例であるが、石斧の装着部を樹皮で縛って補強しており、石斧を使用しない間は樹皮の強度を保つために水に浸すことを行っている（渡邊晶2000）。

このほか、貯水部での水を貯める機能ばかりでなく、4列もの構造を持つ堰部は完全に貯水部とその下流側を遮断する役割が求められたと考えられ、排水部から流れる水量は常に一定であることが求められたものと思われる。これは下流側に位置する樹皮範囲との関わりが想定され、樹皮そのものを使用するために一定量の水で湿らせた可能性も考えられる（山田昌久氏のご教示による。）。

また、貯水部と堰部の上面からも樋状の用途不明加工材が出土しており（43-2・10）、この木材を使って水を流していたことが想定される。

以上のように、第1号木組遺構は機能を限定されるものでなく、堅果類の水さらし、根茎類の水さらし、木材の水漬け場、洗い場、等水の利用に関わる様々なものに利用された複合施設と考えられる。

## 2 台地検出遺構のまとめ

2カ年の調査で検出された遺構は、竪穴住居跡33軒、土坑23基、土器埋設遺構75基、焼土遺構15基、小ピット群2箇所、土器捨て場2箇所である。遺構に関しては、使用時期の可能性が高い時代の項目で述べることとする。

### （1）竪穴住居跡（図167）

縄文時代前期の竪穴住居跡31軒について述べる。

平面形 円形・隅丸方形のように炉から壁面までの距離がほぼ等しいものが合わせて14軒、楕円形・隅丸長方形のように壁の長さが異なるものが合わせて16軒、台形のもの1軒である。県内で検出された前期の住居跡で最も多いのは楕円形であり、円形住居跡の占める割合が高い。また、津軽地方には円形が多く、南部地方には大木式土器文化の影響と思われる方形の住居跡が多い傾向がある。

平面形の分類( 推定のものも含む。)

1 類 円形のもの	1・4A・4B・5・7・14C・18・23・25・26・28・29	12軒
2 類 隅丸方形のもの	10・11	2軒
3 類 楕円形のもの	2A・2B・14A・14B・21・22・27	7軒
4 類 隅丸長方形のもの	3・6・8・12・13・16・17・19・24	9軒
5 類 台形のもの	20	1軒

規模 2 m以上 5 m未満の小型住居跡が全体の半数を占める。5 m以上 7 m未満の住居跡も全体の四分の一程度を占める。10mを超える大型住居跡が1軒検出されている。

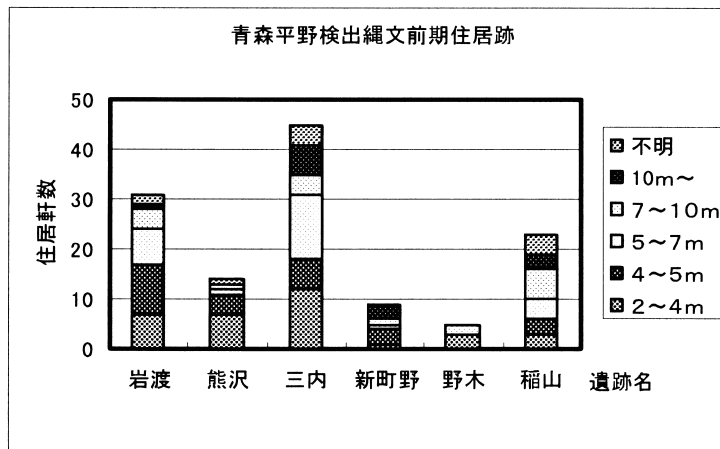
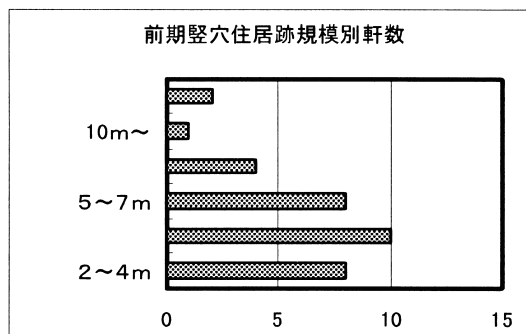
縄文時代前期の遺跡を規模別に見ると、発掘調査の面積や立地、帰属時期などの違いがあるが、青森平野の他遺跡に比べて、2～5 mの小

型住居跡の割合が高い。とくに、竪穴住居跡の検出数に比して10mを超える大型住居跡が少ないのが特徴である。

主柱穴配置 住居跡中央に位置する炉やピットを中心に 1本柱、2本柱、3本柱、4本柱、5本柱、6本柱が見られた。中でも半数以上を占め最も多い

のが4本柱やその可能性が高いものである。ついで2本柱、1本柱と続く。4本柱の主柱穴配列を持った住居跡は縄文時代前期の各時期に見られるが、柱の本数は住居の規模によって決定する側面もあり、一概にいえないが、4本柱が住居の規模に関わらず、主体となるのは円筒下層d式期からとなる傾向がある。2本柱の主柱穴配置も円筒下層d式期にも見られるが、多く検出される傾向にあるのは円筒下層b式期である。

炉 住居跡中央に位置する地床炉である。浅い掘りこみを持つものやピット状に掘りこむもの、土坑状に大きく掘り込むもの等が見られる。焼土・炭化粒が検出されない掘り込みもあるが、位置関係から炉として捉えている。



住居内出土遺物 竪穴住居跡内の出土遺物から、帰属時期を確定できるものを分類した。

A 床面、貼床出土、床面直上出土土器で型式の把握できるもの

円筒下層 b 式に相当するもの - 第 5・6・8・22・29号住居跡

円筒下層 c 式に相当するもの - 第11・13・25号住居跡

円筒下層 d 式に相当するもの - 第 4 A・14 A・16号住居跡

B 破片資料や堆積土出土遺物から把握できるもの

円筒下層 d 式かこれ以前（遺物包含層下） - 第21・23・26・27号住居跡

（拡張） - 第 4 B・14 B・14 C

（重複） - 第17・18・19・20・24号住居跡

下層 b～d 式土器が出土する住居跡 - 第1号住居跡

下層 b～d 式、中期の土器も出土する住居跡 - 第 2 A・2 B・3・7号住居跡

C 出土遺物から判断できないもの - 第10・12・28号住居跡

住居跡中央のピットと接する溝跡 第13・14・29号住居跡で確認されている。いずれも沢際のやや上流側に立地しているのが共通している。14・29号住居跡の住居外へと連続する溝は斜面の等高線に対して直交しており、沢への排水施設として捉えることは可能である。とくに第29号住居跡は第1号木組遺構と同時期に存在した可能性が高く、この溝を排水としても、木組遺構に影響のない場所に立地している。類似した例は稲山遺跡第7号住居跡でも検出されている。遺跡内で最も低い斜面地に立地し、斜面の等高線に直交した溝が住居中央のピットに続いている。しかし本遺跡第13号住居跡と同様、住居外に延びる溝が確認されていないため、別の機能も想定される。

重複関係 住居跡の重複（拡張除く）第13 第14号住居跡、第24 第27号住居跡、第16 第17・20号住居跡、土器埋設遺構と重複 - 第12・26号住居跡 焼土遺構と重複 - 第28号住居跡

帰属時期 以上のような属性から竪穴住居跡の帰属時期を大きく ～ に分けた。拡張前住居跡は拡張後住居跡と連続しているため、同列に扱った。

南側斜面 北側斜面

期（円筒下層 b 式期相当・これに近い時期）

23・29・（24）

5・6・8

期（円筒下層 c 式期相当・これに近い時期）

25・26・27

11・13（12・17・20）

期（円筒下層 d 式期相当・これに近い時期）

16・19・1814 A・14 B・14 C、4 A・4 B、2 A・2 B

1、3、7、21・22、

期 小型住居跡が沢の両側に点在していた状態と考えられる。三内丸山遺跡でも、平面形は楕円形または隅丸長方形、支柱穴は炉を挟んで2または4基、炉は地床炉、浅い掘りこみで使用されたもの

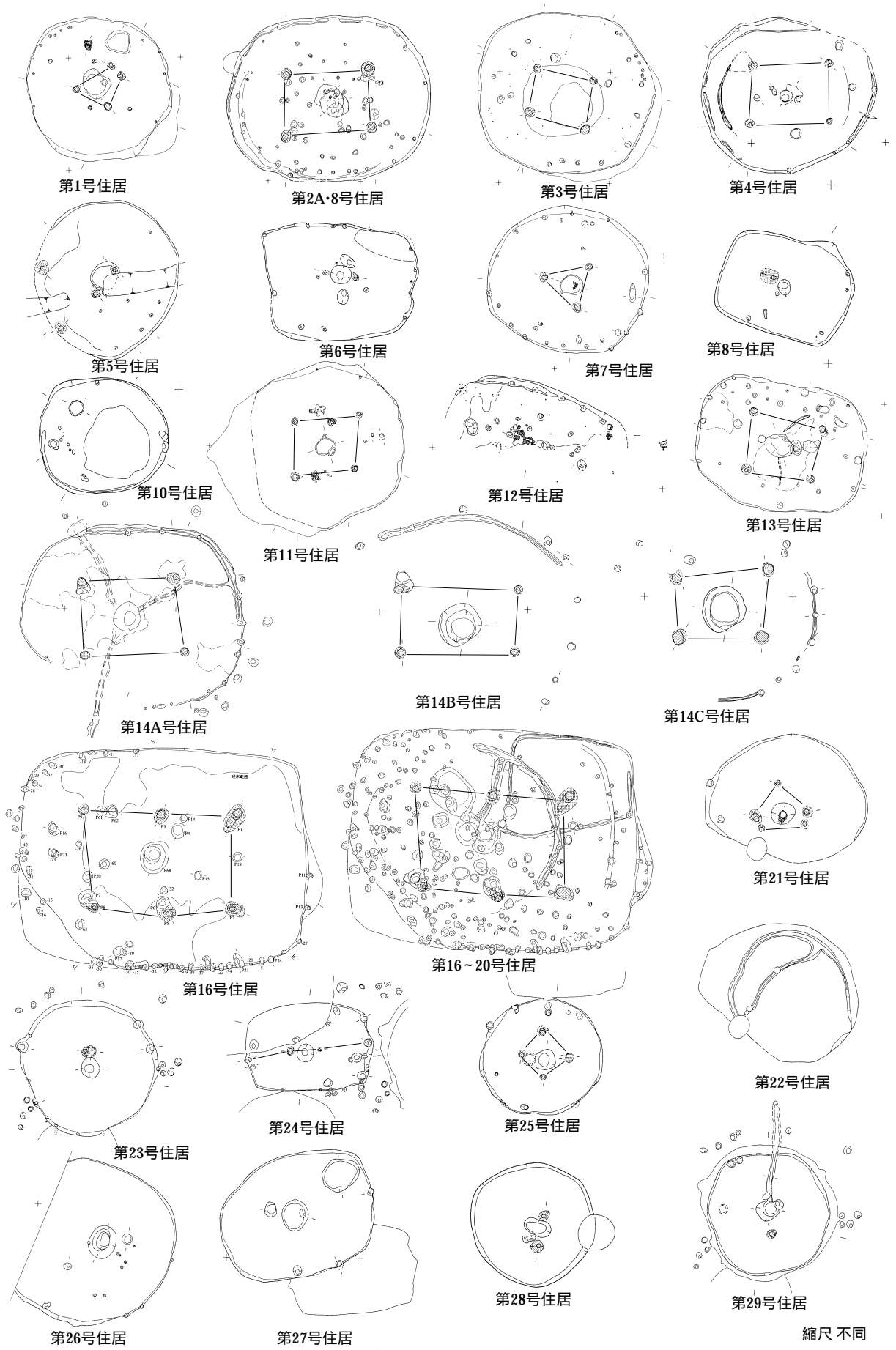


図167 前期の竪穴住居跡 集成

(青森県1996)などの特徴を有している。

期 平面形は隅丸長方形・円形で、期よりも規模が大きい。炉は地床炉(青森県 前掲)

期 楕円形または隅丸長方形、炉の周囲に支柱穴が4本配置され、地床炉が検出される。大型住居跡が構築されはじめる。大型住居跡は拡張しているものもあり、長い期間存続していた可能性がある。

## (2) 土器埋設遺構(図168)

土器埋設遺構は75基検出され、北側斜面で8基、南側斜面で67基が検出されている。縄文時代前期の土器埋設遺構が1遺跡で検出される量としては北東北・北海道の中では最も数が多い。ここでは、本遺跡の出土例を中心に集落内での位置づけを考えたい。

### 埋設形態の分類

#### 単体埋設

- 1 正立 土器口縁部を上にして埋設されているもの(1・8・11・12・15~17・19・21・23・24・29~32・35・36・44~46・48・51~55・60・61・66・70・77・85~87埋)。  
正斜 土器口縁を上にし、斜めに埋設されているもの(14・37・65・67・68・72~74埋)。  
正重 正立状態の土器が重なっているもの(78埋)。
- 2 倒立 土器底部を上にして埋設されているもの(9・10・13・38・39・57・59・63・71・79埋)。  
倒斜 土器底部を上にして斜めに埋設されているもの(43埋)。  
倒重 倒立状態の土器が重なっているもの(22埋)。
- 3 合口 土器の口縁と口縁を合わせて埋設しているもの(18・27・41・58・62・64・69・80・84埋)。
- 4 横転 土器が横にして置かれているもの(56埋)。

#### 複数埋設

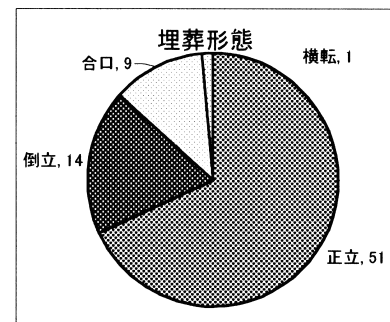
- 1 正立(81・82埋) 2 倒立(25・26埋)

この他の要素として、

- A 埋設された土器の外側に石を置くもの B 埋設された土器内に遺物を混入するもの。

### 埋設形態

斜位の埋設を含めると、全体の7割が正立状態での検出である。倒立は全体の約2割で、この他に合口、横転状態のものが続く。斜位の埋葬の場合、斜面地であることも考慮しなければならないが、ほぼ平坦の地形でも斜位のものが含まれることから(14埋)地形による要因なのか、本来の埋葬形態であったかを探る必要があると思われる。



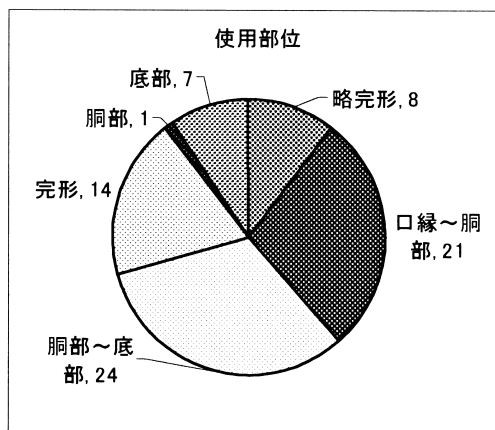
使用部位 調査時には原形を留めていた土器で、接合しなかつたものは略完形の土器に含めると、完形・略完形22基：口縁～胴部21基：胴部～底部24基で割合は

ほぼ同率である。底部としたものは7基で残存器高が5cm前後のものであり、上部の状態が不明なものがほとんどである。土器を埋設するために、意図的に土器を割り取った可能性があるものは、倒立



土器で底部を欠くもの（9埋）や重ねた状態で埋設され底部を欠くもの（22埋）である。このほか可能性のあるものは、合口の蓋である。また、内面に炭化物が付着している土器が12点みられ、日常の道具として使用されたものを埋設しているとみられる。

他遺構との関係 北側斜面の2埋・5埋は竪穴住居跡のほぼ床面で検出されている。5埋は底部下半のみ検出されており、仮に土器上部から埋設されていたとすれば、高いレベルから掘りこまれると考えられ、住居跡よりも後に埋設された可能性がある。2埋は土器の



上部が約5～10cm欠けた状態で住居跡の床面から検出されているため、住居跡の使用時期かこれに極めて近い廃絶直後に埋設された可能性がある。しかし、住居跡の遺存状態が悪く、詳細は不明である。

南側斜面の84・85埋は26住の堆積土上位から検出されている。確認面の下10～20cm下で検出されており、とくに84埋の上部は埋設の状態から、壊れていないものと推察される。このことからすると、南側斜面の住居跡群の堆積土上面に広がっていた捨て場は、84・85埋よりも新しい時期に形成された可能性が高い。

下層d<sub>1</sub>式の土器埋設遺構は捨て場1に隣接し、一部は捨て場内に埋設されている。

土器埋設遺構の内容物 今回、第18、21、25・26、39、60、62、64、69、81・82埋のリン酸分析を行い、この内18・62・21埋の土器内土壌、64埋の底部土器、21埋内部から出土した石器の脂質分析を行った。この結果、リン酸分析ではリン酸含有量が土器内土壌で周辺の土壌よりも若干高い傾向が窺えた。脂質分析では、全体的にパルミチン酸とオレイン酸が高く、経年変化の影響が大きい。他方、64埋の底部土器は経年変化の影響が他の試料に比べて少なく、動物由来のコレステロールが高いという結果がみられた。64埋は合口の埋設形態で、遺構内には、埋設後に流入したと思われる堆積土が底部付近に堆積しているのみで、ほぼ空洞の状態で検出されている。このことは、動物由来のものが土器内部に埋設されていた可能性も示唆するものであるが、同時に土器埋設遺構に使用された土器が日常的に使用された土器であったことも考慮しなければならない。検出事例の増加や、より精密な取り上げによる脂肪酸分析そして、その評価には慎重さが求められている（末木1999）。

土器埋設遺構に関わる遺物とその出土状況をまとめた。

A類 埋設された土器の外側に石を置くもの

上部に石皿	62・64・84埋
下部に石皿	19埋

B類 埋設された土器内に遺物を混入するもの。

磨石	19埋
----	-----

磨石・石匙・スクレーパー	21埋
自然礫	78・80・84埋
石皿片	85埋
内部が空洞	64埋

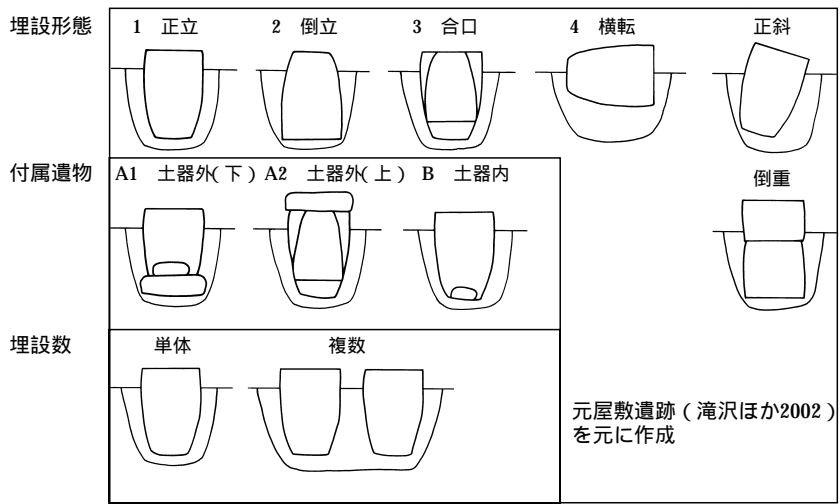
上部に石皿をもつものは3例みられる。いずれも埋設形態が合口であり、検出状況から明らかに蓋の上部土器を押える役割を果たしていると考えられる。これらはすべて石皿で、2例が土器の直径よりも大きいものである。比較的平らな石を使用するのが特徴である。土器の下部に石皿を置く1例もあり、これも平らな石皿を使用している。

一方、土器内からは自然礫・磨石・石皿片、石匙・スクレーパーが出土している。とくに、埋設形態が合口で明らかに土器内部に埋納された遺物とされるのが、80・84埋の自然礫である。形状が不整形で平坦な面などを有さない自然礫は、土器埋設遺構外部に使用される石皿類とは異なる要素をもつものと思われる。また、19埋で土器外部に使用された石皿と内部から出土した磨石も形状が異なる。これらのことから土器内出土遺物を再び見ると、磨石・石匙・スクレーパー・自然礫などは土器内に埋納された可能性が高い。しかし、石皿については85埋において土器内部から出土した例があり、埋納された可能性もあるが、土器外に置かれたものが土器内部に移動した可能性もある。後者の場合は、土器上部の蓋の役割を果たしたのは「編物・樹皮・獣の皮・葉等」であった可能性も示されており（末木 前掲）、これらが腐食して土器内に流れこんだとも考えられる。この場合、土器内の堆積状況を検討する必要があると思われるが、これに関しても、土器内という非常に狭い範囲で検討するのは非常に困難である。このような意味においては、土器内部がほとんど空洞であった64埋は貴重な検出例である。しかし、すべての土器埋設遺構が空洞であったかという問題や、空洞であることの解釈の問題（末木 前掲）などがあり、さらに検討する必要があると思われる。

時期別変遷 75基の内、43基が型式を特定できる。概ね下層d<sub>1</sub>式の割合が最も高く、次いで、下層b・c式が続く。南側斜面頂部では、胴部から底部にかけて出土する土器が多く、型式を特定できなかった。これらの土器の器形は、底部から直線的にならず、胴部上半で内湾気味に立ち上がる器形や土器内面の調整から、下層d<sub>1</sub>式に相当するものが多数含まれると推測される。

前期中葉～後葉（円筒下層b式相当）標高35～39mの北側斜面地に土器埋設遺構が構築される。これは竪穴住居跡の周辺に位置するもので、住居跡と土器埋設遺構は近接した関係を持つ。埋設形態もすべて正立であり、土器の径よりも一回り大きく深く掘りこみ埋設している。底部付近および口縁部を欠く土器もある（1埋・8埋）。

前期後葉（円筒下層c式相当）南側斜面の頂部西側が多いが、一部は標高37～38mの斜面地にも分布する。住居跡は南側斜面及び北側斜面で見られるが、土坑墓と考えられる土坑（23土・19土）が南側斜面でのみ検出されており、土器埋設遺構の分布と重複する可能性がある。土器などの捨て場は頂部捨て場・住居跡周辺（沢内）から出土が認められることからこの範囲であった可能性が高い。このことから、前段階よりも若干住居跡から離れて土器埋設遺構が構築されたと思われる。埋設形態には



形態分類



型式別分布

図168 土器埋設遺構

は合口の埋葬形態が認められ、上部に石皿を置く例や土器内部に石を納める例がみられる。

前期後葉～末（円筒下層d式相当）南側斜面の頂部から標高37～40mの斜面部に集中する。竪穴住居跡とは沢を隔てており、直線距離で約20mである。捨て場1が南側斜面全体に広がり、沢内からも土器が大量に出土する状況を考えると、土器埋設遺構の範囲は土器捨て場と一部範囲が重なるもののさらに住居跡から遠く、空間的にもっとも離れた場所であったと思われる。埋設形態は比率からみれば正立が多いが倒立・倒重、合口、複数埋設（正立・倒立）など多様である。

#### 他遺跡との比較

捨て場内や廃絶後の住居の堆積土に埋設される例は多く、稲山遺跡で検出例が見られる。三内丸山遺跡では円筒下層a・b式期から住居跡・埋設土器の検出例があり、この傾向は円筒下層c・d式にも認められる。住居跡の周辺に埋設土器が分布しているようにみえるが、詳細は不明である（青森県1996）。畑内遺跡では、下層c～d式期に埋葬の場と遺物を捨てる場は分布範囲が重なる傾向がある。逆に、竪穴住居跡が構築される近辺に立地するものは下層a～b式に比定されるものであり、本遺跡と同じ傾向である。このように、集落内での土器埋設遺構は生活の中心として使用されない場、2次的な場に構築されている。

### （3）土坑

本遺跡から検出された土坑は22基である。分布は大きく2つに分かれ、北側頂部から斜面にかけてと南側斜面頂部付近である。

出土土器などから時期を類推できたのは19基で、縄文時代前期10基、中期1基、後期1基、前期～中期2基、中期かこれ以前1基、平安時代4基、時期不明3基である。

土坑の平面形状は、調査範囲の外側に立地し完全に調査出来なかったものも含まれるが、円形、楕円形、方形の3つに大きく分かれる。円形基調16基、楕円形基調2基、方形基調4基である。このうち、方形基調のものは火山灰の堆積状況からすべて平安時代のもので、とくに14土は炭窯と推定される。この近辺から他の3基も検出されており、何らかの関連性があった可能性もある。以下に、楕円形基調2基、円形基調の比較的時期が想定できる縄文時代前期3基、後期1基の土坑について整理してみる。

楕円形基調の土坑 いずれの土坑も長軸方向がほぼ北方向である。縄文時代前期の19土は土坑の北側底面からUフレイク2点、この上部に抉入扁平磨製石斧1点、若干位置をずらした上部に完形土器1点が出土した。東側底面からは石筥1点が出土している。同様の遺構は、熊沢遺跡第12号遺構、秋田県池内遺跡（櫻田ほか1999）などでも確認されており、池内遺跡検出の遺構は「土坑墓」と報告されている。本遺跡例も形態・堆積状況・遺物の出土状況から土坑墓と考えられる。縄文時代中期の7土は土坑底面中央から横倒し状態の土器が出土し、壁際に近い部分からは磨石が1点出土している。リン酸分析では、周囲の土壌との差が認められず良好な結果が得られていないが、土坑の平面形や規模、遺物の出土状態から土坑墓の可能性が高い。

円形基調の土坑 出土遺物から、縄文時代前期の土坑4基、後期の土坑1基と考えられる。断面形

状はフラスコ状で、3・5・6・21号土坑は堆積土中位から底面にかけて埋め戻されている。17土は堆積状況から判断できなかった。フラスコ状土坑は一般的に貯蔵穴としての機能が想定されている。

しかし、21土の遺物出土状況は底面直上の壁際に土器を倒立させており、特異な出土状況を示している。フラスコ状土坑が別の機能をもつと想定される場合、土坑墓となる可能性が高い。フラスコ状土坑の場合、「壁際付近で、底面から20cm程度の間から遺物が出土している例」は墓の可能性を指摘している（南北海道1999）。また、神奈川を中心とした関東の事例であるが、倒置土器が土坑の端部に埋設され、胴下半部ないし底部を欠く事例を紹介している。そしてこれらの倒置土器が遺体の頭部を覆う役割を持つ可能性を指摘している。神奈川でのこのような例は縄文時代前期後葉から認められているとされている（山本2003）。

以上のような遺物の出土状況から、21土は最終的に墓として利用された可能性がある。このほかの3・5・6土はその断面形状や遺物出土状況から、貯蔵に使用されると考えられるフラスコ状土坑の可能性が高い。

#### （4）遺物出土状況（図169）

土器は、調査区全体で破片数約107,700点、重さ約1583kgの土器が出土している。遺構全体（住居跡・土坑・土器埋設遺構・焼土遺構・小ピット群）から出土した土器は、破片数約26,700点、重さ約346kgで、これを除いた遺構以外の出土数量は破片数約81,000点、重さ約1237kgである。南側斜面の頂部捨て場から出土した土器は、破片数約3,674点、重さ約44kg（図169の数字は全層集計したもの）、斜面捨て場 層から出土した土器は破片数約33,385点、重さ約383kg、沢から出土した土器は破片数約33,166点、重さ約680kg、出土地は南側斜面と沢内にかけてのA D～A P-52～63で、大多数が縄文時代前期後半の土器片である。出土層位は第 層が全体の約8割を占める。沢の第 層は大きくA～Cの3層に分かれ、各層でも多くの土器が出土している。ここで、遺物の集中した出土地をまとめてみた。

頂部捨て場（第352集所収）南側斜面の頂部から南西側斜面地にかけて広がる。細片が多く、復元個体が少ないが、主として円筒下層c・d式が主体と考えられる。

捨て場 1（第352集所収）北に面した南側斜面に位置する。頂部捨て場ほどではないが細片が多い。復元個体は円筒下層b・c式も見られるが、d式が最も多く、円筒下層d式主体と考えられる。

沢 調査時にはとくに遺物集中範囲を括らなかつたが、沢の下流側AN・O-59・60、沢の上流側AN54で多く出土している。各グリッド別の出土層位をみると A層出土の遺物が最も数量が多い。沢の下流側では、A層に次いで B層の出土数量も多い。

遺構内（竪穴住居跡を中心に。）南側斜面の住居跡内では、確認面から堆積土上位にかけて捨て場 1の遺物が出土しており、堆積土内での遺物の混入はほとんどみられない。北側斜面では、遺構の立地しない場所での出土数量とも少なく、住居跡の埋没過程で混入したのも、捨て場から出土した数量と比べれば少ない量である。

捨て場 1 の形成 尾根状の斜面に形成されており土器埋設遺構の範囲と重複している。斜面上から

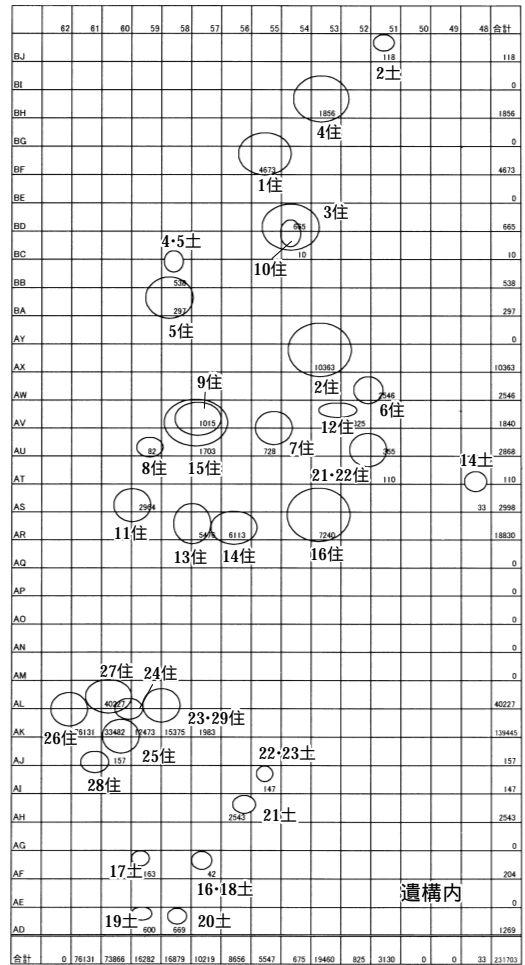
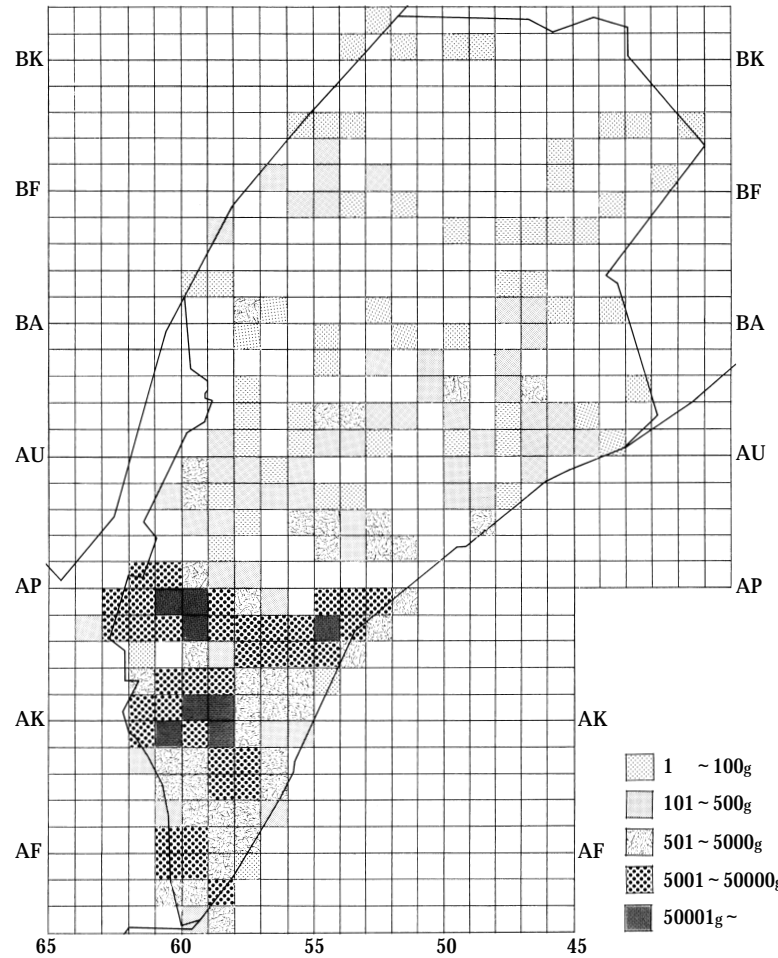
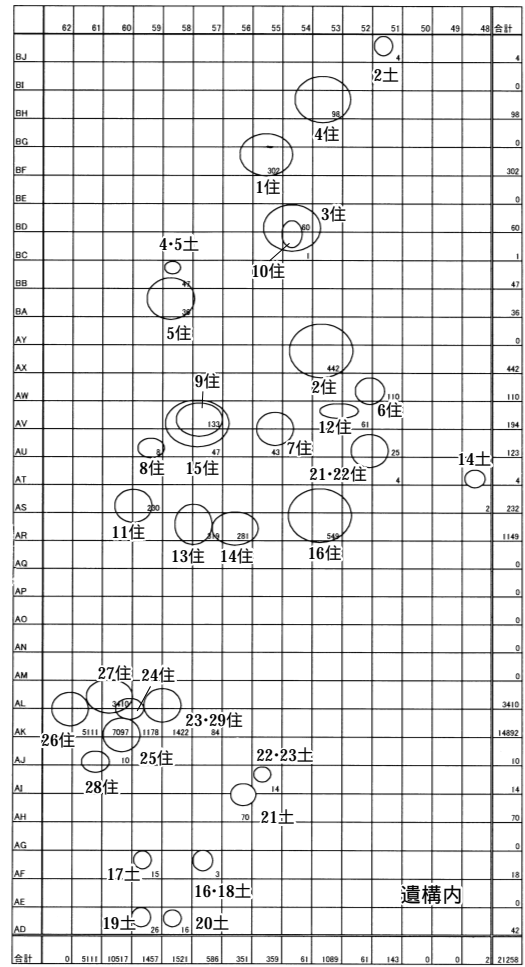
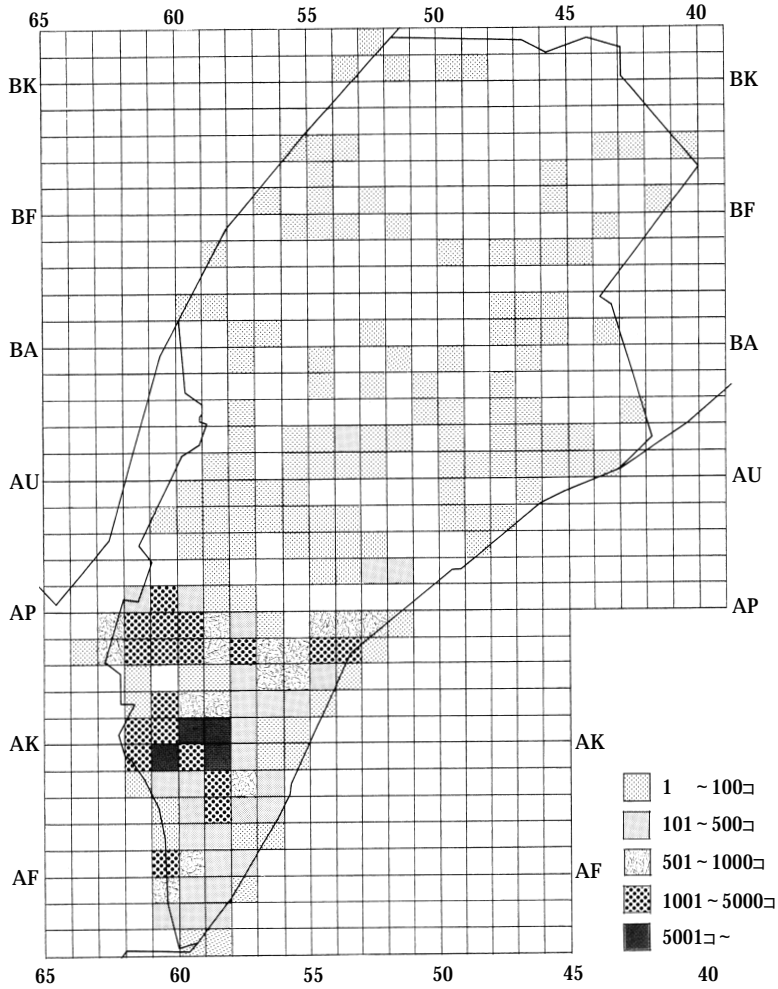


図169 出土土器の破片数と重量分布

沢の落ち際には住居跡が集中し、さらにこの住居跡の堆積土中には土器埋設遺構が構築されていることから、住居跡廃棄後に構築されたと思われる。捨て場1は、南側斜面から沢の落ち際まで広がるが、落ち際には住居跡が集中し、最大幅約10mの平坦地となっている。仮に上部から捨て場が形成されたとしてもこの平坦地で物理的に途切れてしまう可能性は十分にあり得る。このような地形的条件があったにせよ、B層の段階で沢の出土遺物が捨て場1の斜面下に位置するAN・O-59・60に集中することと考え合わせれば、縄文人は主に南側斜面に捨て場を形成し、これが沢内にも広がった可能性があると考えられる。

## 第2節 出土遺物のまとめ

### 1 土器

とくに補足を加えたい第1群土器について述べる。

#### (1) 第1群土器

概ね縄文時代早期中葉の貝殻腹縁文を施文する土器群である。沢A～C層、第14・23・25号住居跡、捨て場1、遺構外から出土している。縄文前期の遺跡内の土地利用などで土器が移動した可能性が高い。106-1、捨て場出土土器(352集184-4)は文様構成や施文から物見台式に相当する。貝殻腹縁文を施文する一群(第14・25住、捨て場出土土器含む)は腹縁文同士が平行であること・胴部下半近くまで施文されているものがあることから、根井沼・寺の沢式系統の土器に近い属性を持つと考えられる。このほかに条痕文のみ施文している一群は、第23号出土土器片と胎土・焼成が類似することから、この土器片と同群と思われる。胴部に施文される文様構成から物見台式に相当する。

#### (2) 第2群土器(図171～175)

縄文時代前期中葉～末の土器は出土遺物の大部分を占めており、沢・竪穴住居跡・土坑・土器埋設遺構・木組遺構などの遺構内、捨て場1、頂部捨て場と遺跡全体から出土している。

図171～173は沢・土器埋設遺構・竪穴住居跡出土遺物、捨て場1・頂部捨て場遺物の主な出土遺物をまとめたものである。左側に沢出土C層～A層の遺物でそれぞれの層において主体を占める土器を掲載した。右側には土器埋設遺構の遺物、竪穴住居跡は床直出土遺物、各住居の復元個体、堆積土上位から出土した復元個体、沢出土の遺物で出土層位の主体を占めない個体を掲載した。共伴する事例として土器埋設遺構の出土土器、共伴に準じるものとして、竪穴住居跡床直出土遺物、沢出土の層位と取り上げ番号が同一の出土遺物を挙げた。

とくに沢・捨て場出土の土器は、厳密に言えば、堆積土の主体を示すものではない可能性もあるが、破片を含めた出土遺物を概観した場合でも、復元個体における様相に大きな差はないと思われるため、報告書に掲載した復元個体を中心に論じることとする。また、第4類では稲山遺跡出土の共伴事例を掲載している。

第2類 円筒下層a式 沢C層から出土した復元個体と破片各1点、第23号住居跡から出土した1

点を掲載している。口縁が開き、胴部上半が膨らむ器形であり、熊沢遺跡の捨て場、三内丸山遺跡第6 鉄塔地区第 a 層（青森県1998）からの出土例がある。

第3 a 類 円筒下層 b<sub>1</sub> 式 復元個体は C 層、 B 層、 A 層、第3・5号土器埋設遺構から出土している。底部から直線的に立ち上がる器形で、文様帯の区画に隆帯を貼付ける。器高に占める口縁部文様帯幅は次の b<sub>2</sub> 式より狭い。口縁部の文様は結節回転文の割合が多い。隆帯は断面形状が方形で、二条貼付けるものが見られる。

第3 b 類 円筒下層 b<sub>2</sub> 式 主に沢 C 層で主体を占める土器で、土器埋設遺構などからも出土している。器形はバケツ形で、底面から真っ直ぐに立ち上がり（器形 B）口縁部には単軸絡条体を回転施文する。口唇上部は平坦に近く、端部にやや丸味を持つ。口縁直下や隆帯に沿わせて複節縄文を押し付けるものもある。胴部は、単軸絡条体と縄文を施文する割合がほぼ半々で、単軸絡条体は第1類を施文する割合が高い。三内丸山遺跡第6 鉄塔第 b 層出土土器（青森県1997）熊沢遺跡第2号遺物集中ブロック出土土器（小野2000）に出土例がある。

第4 類 円筒下層 c 式 主に沢 B 層の主体を占める土器で、土器埋設遺構、土坑、竪穴住居跡からも出土している。図104・105に示したとおり、主に沢の下流側でまとまって出土している。ここでは、これらについての特徴を整理していく。なお、この時代の土器群は同じ型式でも地域によって違いが表れているため、主に津軽地方の土器を取り上げることとする。

器形：底面から口縁部まで外側に直線的に開くもの（器形 A）底面から外側に直線的に開くが、口縁部がやや外反するもの、胴部上半がやや張り、口縁部で屈曲し口縁が外反するもの（器形 C）などがある。全体の器形のなかではそれぞれに個体差があるが、共伴事例からも、概ね底面から外側に開く器形といえる。

口縁部・口唇部の形状：口縁部はごく緩い波状口縁であることが多いが、平口縁も見られる。口唇部は徐々に先細りしている。

口縁部の文様（図175）：口縁部文様帯が狭くなり、主に単軸絡条体第1類を側面圧痕する施文技法を用いる。前型式と比較して多種多様になり、b<sub>2</sub> 式で見られた単軸絡条体第1類の横位回転施文 + 縄文原体の縦位押し付け施文が消えている。この類では、単軸絡条体の側面圧痕施文や縄文原体の押し付け施文方法が変化しており、とくに単軸絡条体第1類を施文するものが多い。文様構成は、横位に数状施文 + 波頂部などの縦位に2～3条施文するもの（1類）、波頂部を中心に菱形文に施文するもの（2類）、波頂部を中心に三角形文を施文するもの（3類）に分かれる。3類は三角形文の内部に充填される文様構成から a・b の2種類に分けられる。これらの文様パターンは次の d<sub>1</sub> 型式まで継続して使用されている。

このほかに、本遺跡では前型式に見られなかった、口縁部に結束縄文を横位に回転施文したものが表れ始める。津軽地方では、円筒下層 b 式段階から、このタイプが出現しはじめる（注1）。本遺跡例や三内丸山遺跡出土例などは口縁部に横位の側面圧痕を用いる例もみられ、これに後続する可能性がある。

結束縄文は口縁部文様帯に施文される以外、口縁部文様帯直下から胴部上半までの範囲で施文され



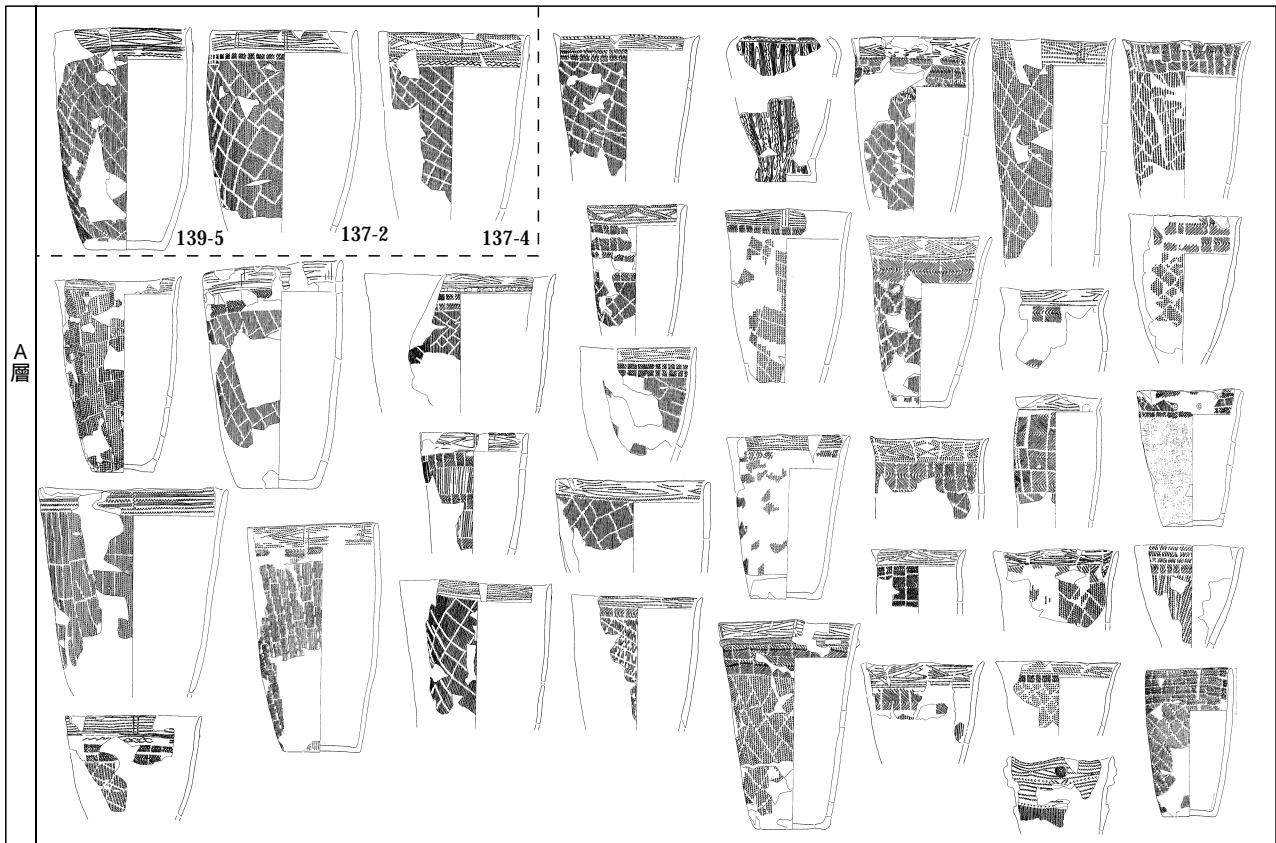
沢



图170 沢 C・B層出土土器



図171 遺構・捨て場等出土土器1



□ 共伴すると考えられる出土状態  
 [ ] 共伴に準ずる出土状態

図172 沢 A層出土土器

るものが多く、d型式でも継続して使用されている。

以上、この類の口縁部文様を概観してみた。前型式から踏襲された文様構成には、単軸絡糸体回転施文技法が押圧技法にとって変わられるもの（類）、前型式で口縁部に単節縄文や結束縄文の横位回転施文をする一群（類）、の2つの傾向の土器群が認められる（図175）。

胴部・底部の文様：単軸絡糸体の施文がほとんどなくなり、縄文原体を斜めに回転している。前型式まで若干認められた底外面への文様施文は復元個体では確認されていない。

共伴関係と他遺跡との比較：本遺跡出土の先に示した類土器群の特徴を述べる。1 器形は胴部上半がやや張るものが多い（112-3が顕著な例）、2 口縁部が肥厚せず、先細りする例が多い。3 口縁部文様構成で、波頂部から垂下する文様が少ない（復元個体のみ確認したため、破片資料は不明）。共伴事例やこれに準じる事例（図170・171）では、口縁部の文様構成が類似する場合が多い（81・82埋（注2）、沢出土121-1・122-2・124-2、沢出土120-1、120-2、11住堆積土出土遺物）。

第類は、単節縄文の施文例は、b<sub>2</sub>式では出土例があるが、c式ではほとんど見られず（注3）、共伴事例から考えると、b<sub>2</sub>式からc式の過渡期に見られる特徴の可能性はある。

注1 田小屋野貝塚では円筒下層a・b式前半としている。三内沢部遺跡遺物包含層出土例などが出土している。

注2 第352集では下層d式に分類しているが、口縁部で器形が外反していることや口縁部文様帯幅が広いことから、下層c式に改めた。

注3 稲山遺跡1036土、41埋例

第5a類 円筒下層d<sub>1</sub>式 沢 A層で概ね主体をなす土器で、土器埋設遺構、捨て場1、頂部捨て

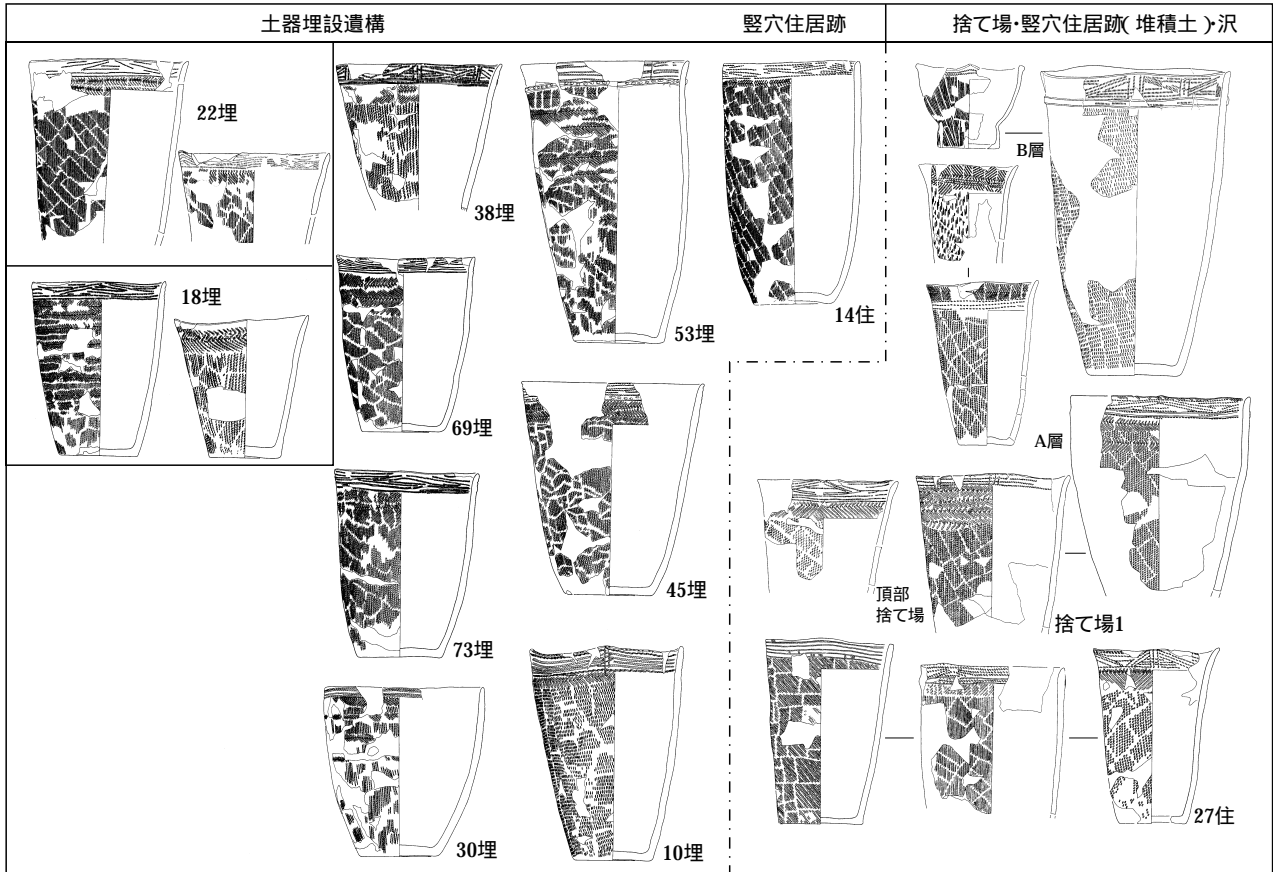


図173 遺構・捨て場等出土土器2

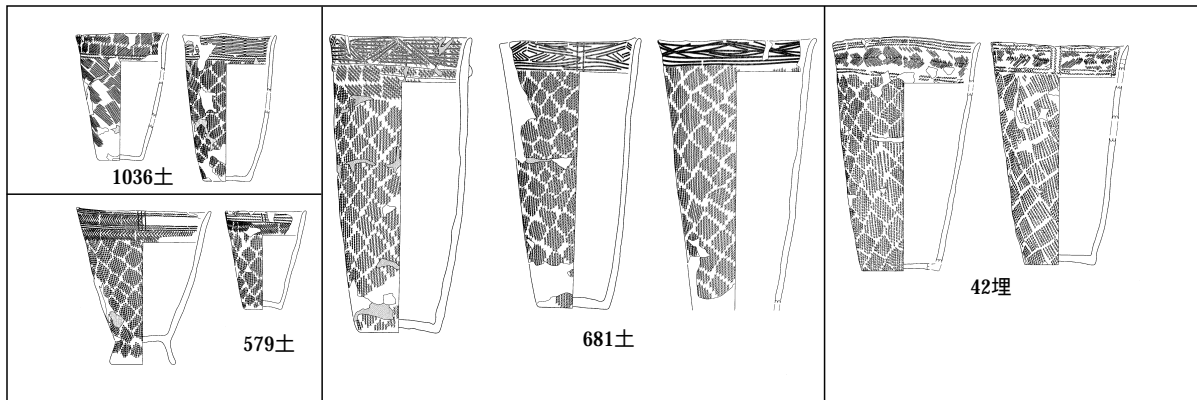
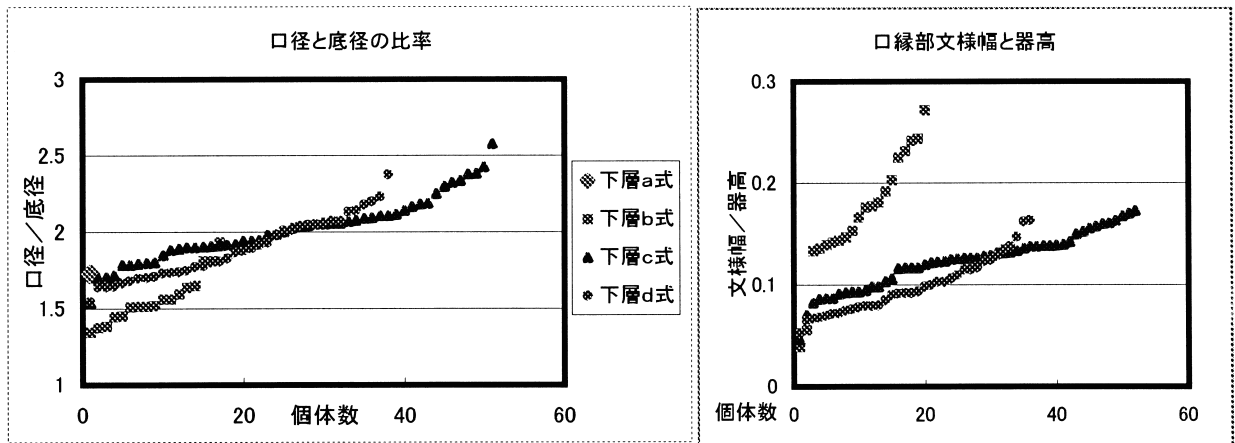


図174 稲山遺跡出土共伴土器



場でも主体を占めると思われる。

器形は底面からやや外側に開くもの、底面からほぼ真っ直ぐに立ち上がるもの、底面から緩やかに立ち上がり、胴部中央から上半でやや膨らみ口縁部がやや内湾するものなどがある（器形D）。c式より底径の規模が大きい。器厚が厚く、胎土が緻密である。内面にはほぼ全面にミガキが入る特徴がある。口唇部の形状は、断面が先細りするもの（c類）と厚みをもち三角形状になるもの（d類）がある。口縁部文様帯は前型式に比べて狭くなり、その幅は3cm以下となる（小笠原2002）。文様構成は前型式の文様パターンが踏襲されるもので、施文される縄文のバリエーションが多くなる。縄文原体は単軸絡条体・縄文原体の押圧が主体であるが、単軸絡条体の回転施文と単軸絡条体第5類の押圧、縄文原体の種類を変えて交互に押圧施文するなど前型式に見られなかった施文方法が加わっている。また、口縁部と胴部文様帯との境界に微隆帯を貼付け、その上部から刺突文が施文されるものもある。文様帯の境界には結束縄文や結節縄文が施文されるが、特に結束縄文は前型式に比べて極めて幅が狭いのが特徴である。胴部縄文には主として縄文原体を斜回転するものがあるが、結束縄文と単軸絡条体第1類を縦回転させたもの（縄文原体を斜回転したものもあり）を交互に施文するもの、縄文原体に縄文を巻き付けて回転施文したもの<sup>（注1）</sup>がある。

下層c式との比較：不明瞭であるが、器形・口縁部幅・口唇部形状に違いが表れる表で示しており、器高に対する口縁部幅は若干d<sub>1</sub>型式のほうが狭く、底径と口径の規模に差がなくなる傾向がある。（p353下表）

注1 当センター職員 茅野氏による指摘

異系統の土器：352集78-26、352集186-20の2点が出土した。いずれも南側斜面の出土である。深鉢の口縁部と考えられ、沈線による施文が見られる。

赤色顔料を塗布した土器片：5点出土している。第3号土坑堆積土から3点、第6号土坑堆積土上位から1点、沢出土のもの1点である。いずれも深鉢片と思われる。第6号土坑出土のものは内外面に赤色顔料が塗布されており、沢出土のものは外面のみ、第3号土坑出土のものは内面のみの塗布である。いずれも摩耗が激しい。 （坂本）

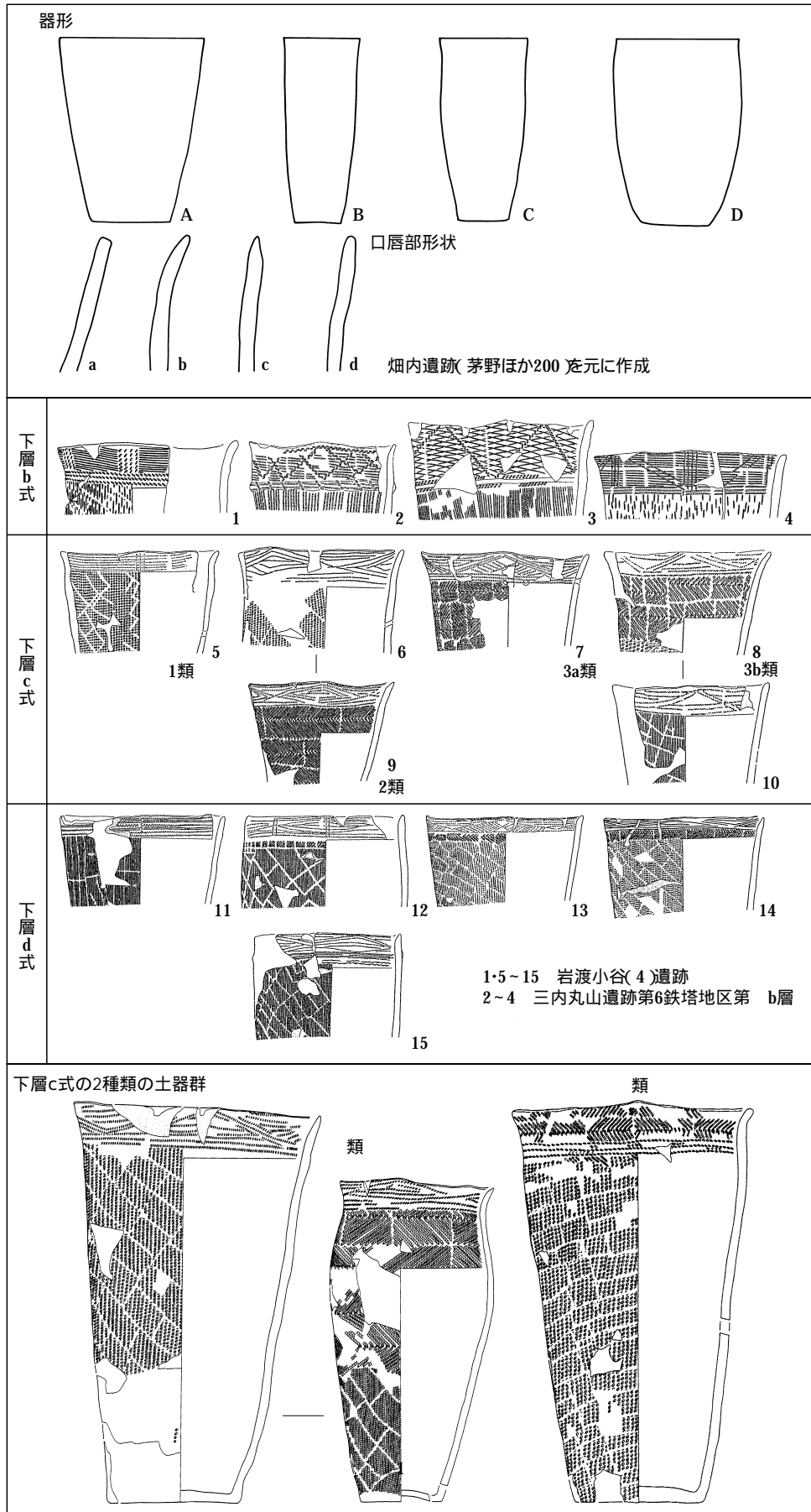


図175 土器の模式図

## 2 石器

二カ年の調査で出土した石器は、文末の表のとおりである。一部に縄文時代中期のものも含んでいるが、大半が縄文時代前期中葉から後葉にかけてのもので、主に捨て場や沢、住居跡覆土中から多く出土した。剥片石器類ではとくに石匙の出土が目立ち、礫石器類では各種の敲磨器類のほかに半円状扁平打製石器や抉入扁平磨製石器、石皿等が比較的多く出土している。

石鏃は18点の出土で、基部形態による分類では凹基無茎鏃2点、平基無茎鏃6点、凸基有茎鏃4点、尖基鏃5点、円基鏃1点である。この中で、特記されるものに第1号住居跡から出土した尖基鏃があり、器面には赤色顔料と思われる物質が付着している（未分析）。また、第2号住居跡から出土した凸基有茎鏃は、出土状況から縄文時代中期前葉の可能性が高い。本遺跡出土の凸基有茎鏃は総じて茎部の挟り出しが弱い、第2号住居跡出土のものは丁寧に茎部が作出されており、基部にはタール状の物質が付着している。

石槍は基部片1点が捨て場から出土した。また、異形石器とした第25号住居跡から出土した基部に突起が付されたものは、尖頭部を欠損しているものの石槍の可能性もある。縄文時代前期には希に見られる石器であり、永野遺跡や畑内遺跡で類品が見られる。

石匙はD1類（縦形石匙）116点、D2類（横形石匙）13点、D3類（両面加工で槍先状の先端部を持つ縦形石匙）3点、つまみ部片のため細分できないもの4点である。D1類の縦形石匙が圧倒的に多く、裏面に光沢痕が観察されるものが多いことが特徴である。また、D3類とした石匙のうち第13号住居跡出土のものは石槍に似たもので、両面に丁寧な調整が施された優品である。また、第25号住居跡出土のものは槍先状というよりは石錐状の先端を持つもので、類品はD1類の中にも2点ある。機能的には刺突や穿孔といった使われ方がなされたものと思われる。

石匙の使用痕分析では、石匙の主な役割が植物資源の切断にあったことが明らかになっている。対象となった植物についての記述はないが、川口による熊ヶ平遺跡での分析ではイネ科植物の可能性が指摘されている（川口1995）。なお、前述の第13号住居跡から出土した両面加工の石匙は、使用痕分析では他のものとはあきらかに用途が異なった石器であるとしている。

石篋は15点の出土である。完形品の10点を対象に大きさをみると、長さ6～8cm、幅2.5～4cmのものが主体であり、1点のみ長さが11cmを越すものがある。刃部は円刃かこれに近いものが大半であるが、直刃のものが1点ある。使用痕分析からは、この直刃の石篋には木の加工に関する道具の可能性がうかがわれている。石篋に似た石器に搔器がある。使用痕分析からは石篋と搔器では被加工物に対する操作の仕方が異なり、本遺跡出土の石篋が皮加工に利用されていたとすれば、その工程によって、道具や対象獣による使い分けなどが考えられるという。

磨製石斧は19点出土したが、このほかに敲石に転用されたものが1点ある。完形品は3点である。また、小型磨製石斧は2点の出土である。擦り切り技法によって製作されたものもあり、擦切痕の見られる原石も1点出土している。

敲磨器類は185点出土したが、この中のKa2類にはスリ幅の広さから半円状扁平打製石器に含めなかったものが10点ほど含まれている。石材には17種類あり、最も多様な石材が選定されている。

半円状扁平打製石器は52点出土し、このうち完形品は19点である。器体の一部あるいは全体にスリ

整形が施されているものが少数例あり、なかには挟入扁平磨製石器と似た石器もある。

挟入扁平磨製石器は51点出土した。完形品は2点で、破損率の高い器種である。なお、完形品のうちの1点は第19号土坑から出土したもので、副葬品と考えられるものである。使用された石材は本遺跡では希少な玄武岩である。石材には11種類あるが、凝灰岩が62%と多数を占めている。

北海道式石冠は3点出土した。うち、1点は第15号住居跡から出土したもので、縄文時代中期に属するものである。他の2点は縄文時代前期中葉から後葉にかけてのものと思われる。石材は石英安山岩と凝灰岩、安山岩質凝灰岩が各1点である。中期のものは安山岩質凝灰岩である。

石皿・台石類は71点の出土である。完形品は10点で、破損率の高い石器の一つである。石皿の大半は自然礫の大礫を素材としているが、板状礫を素材としているものも少数ある。また、片面加工のものが多く、両面加工のものも18点ある。

石棒は6点出土した。第22号土坑1点、沢4点、捨て場1点である。すべて無頭のもので、いずれも器面は滑らかである。長さ26～34cm、幅10～12cmで、重さは4000～6000gのものがあるが、5000g前後が多い。石材は安山岩2点、石英安山岩4点である。

石剣は1点の出土で、破損品である。第24号住居跡床面からの出土である。石材は輝緑凝灰質片岩であり、これを石材とするものはこの1点だけである。

砥石は12点出土した。このうち、第16号住居跡と第21号土器埋設遺構から出土したものは器面に溝を持った有溝砥石で、比較的小型の石器である。

擦切具は10点出土した。形状や大きさのわかる4点を対象とすると、3点は半円形、もう1点は方形に整形されている。大きさは概ね長さ18～21cm、幅13cm、厚さ1～2.5cmであり、重さ430～580gである。刃部はいくぶん丸みを帯びて摩耗痕が見られ、刃縁には平行する擦痕が見られる。また、1例だけであるが、沢出土品の中に装着痕を現しているかのように刃部以外の広い範囲に煤状炭化物が見られるものがある。特殊な事例と思われるが、類例の増加を待ちたいと思う。

その他とした石器（T a類）は25点出土したが、その中に擦切痕が見られるものが2点ある。南区遺構外と沢から1点ずつ出土している。擦切痕は板状礫の側縁に見られ、そこから折りとられている。流紋岩を石材とする小型の石器であり、加工途中の失敗品とも思われる。おそらく板状礫を素材とする石器の一部は、擦り切り技法によって切断されたものもあったものと推定される。

#### 石器の石材傾向

剥片石器類は大部分が珪質頁岩を石材とし、玉髓・玉髓質珪質頁岩・鉄石英・頁岩・黒曜石などが数点ある程度である。黒曜石は楔形石器と剥片の2点の出土である。産地同定分析では2点とも県内の鷹森山、大釈迦、戸門産地等の三ヶ所のいずれかである可能性が高いことが推測されている。

礫石器類の石材には21種類の石材が用いられている。最も多いのは凝灰岩の145点で、流紋岩の114点、安山岩の68点、石英安山岩の66点が続く。これら4種類の石材は大半の器種に用いられており、全体の8割以上を占めている。頁岩や緑色細粒凝灰岩、ヒン岩、輝緑岩は12～18点の出土で、それぞれ全体の2～4%程度を占めている。このうち、ヒン岩と輝緑岩は数量的には少ないものの大半の器種に一定量用いられており、緑色細粒凝灰岩は磨製石斧の石材として用いられている。（畠山）



出土石器一覧表

分類	器種	住居跡	土坑	土器埋設遺構	焼土遺構	頂部捨て場	捨て場1	南区遺構外	北区遺構外	表採	沢	小計
A類	石鏃	9				3	4				2	18
B類	石槍						1					1
C類	石錐	1				1	2		1			5
D類	石匙	38		3		9	31	5	10	1	39	136
E類	石篋	4	1				4	1	2		3	15
F類	楔形石器	1							1			2
G a類	スクレイパー類	49				12	26	4	20		45	156
G b類	Rフレイク	14				2	10	1	3		20	50
G c類	Uフレイク	17	2			1	19	1	2		18	60
H類	異形石器	1										1
I a類	剥片	165	4	1		13	81	14	38	15	126	457
I b類	石核	1				1					6	8
I c類	母岩										1	1
小計		300	7	4		42	178	26	77	16	260	910
J a類	磨製石斧	5				1	1		6		6	19
J b類	打製石斧		1									1
K a 1類	敲磨器K a 1類	2					1	1	1		4	9
K a 2類	敲磨器K a 2類	17	1	2		7	3	2	12		22	66
K b 1類	敲磨器K b 1類	2				1		2	1		15	21
K b 2類	敲磨器K b 2類	6				4	5		1		20	36
K c類	敲磨器K c類	5	1		1	1	2	1	6		35	52
K a類	敲磨器K a類	1										1
L類	半円状扁平打製石器	10				2	5	6	5		24	52
M類	挟入扁平磨製石器	3	1		1	3	5		6		32	51
N類	北海道式石冠	1					1				1	3
O a類	石皿	11	1	4		2	3		2		37	60
O b類	台石	2							2		7	11
P a類	石棒		1				1				4	6
P b類	石剣	1										1
Q類	石錘										2	2
R類	砥石	5		2					1		4	12
S類	擦切具	1							2		7	10
T a類	その他（使用痕跡）	3		1		2	1	3	2		13	25
T b類	その他（搬入礫）	7					2	2	6		22	39
小計		82	6	9	2	23	30	17	53		255	477
総計		382	13	13	2	65	208	43	130	16	515	1387

※前年度に器種不明とした剥片石器2点はスクレイパーへ含む。

※器種不明の礫石器小破片を除く。

石製品一覧表

分類	器種	住居跡	土坑	埋設	焼土	頂部捨て場	捨て場	南区遺構外	北区遺構外	表採	沢	小計
U類	岩偶										1	1
V類	浮き										2	2
V類	軽石製品	2									5	7
	その他										2	2
小計		2									10	12

※住居出土の軽石製品2点は縄文時代後期に属する。

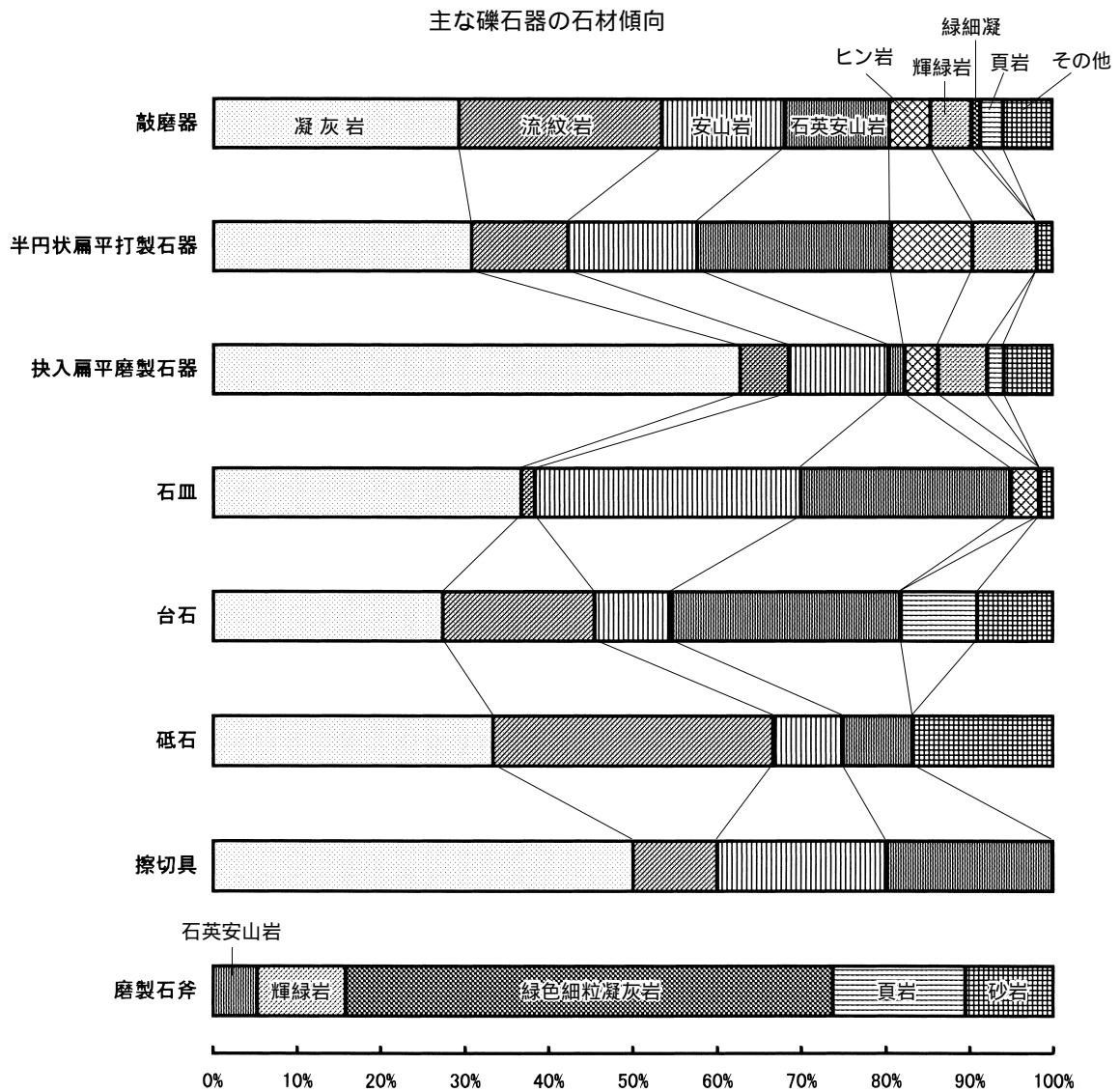
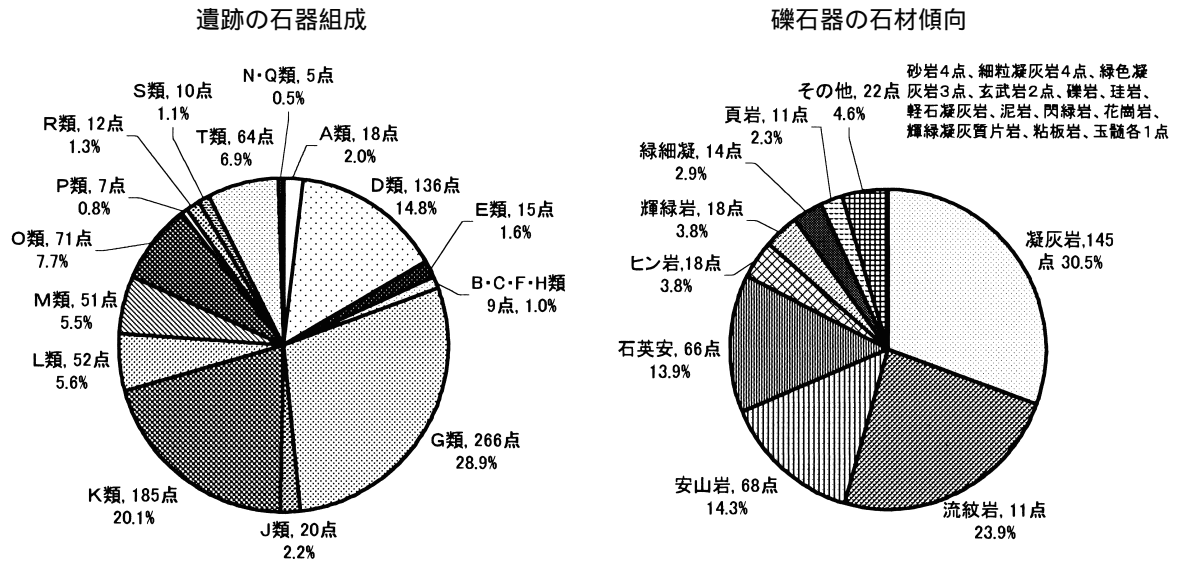


図176 石器組成と石材傾向

### 3 木質遺物

#### (1) 木質遺物における選択行為について

##### 1 はじめに

本遺跡における発掘調査の結果、沢地区から縄文時代前期に帰属する1,800点以上にのぼる木質遺物が出土しており、これらのうち623点(木製品・木材583点<sup>(1)</sup>、樹皮40点)を対象に樹種同定を実施している(第3章第12節)。図177~180は樹種同定の結果に基づき、(1)全体の樹種組成と器種組成(2)層位別(A~C層)の樹種組成と器種組成(3)遺構構成材の樹種組成と器種組成(4)主要器種の樹種組成(5)主要樹種の器種組成と木取りの各項目に該当するものを抽出し、組成比率を百分率でグラフ化したものである。

本項では、このグラフをもとにこれまでの研究および発掘調査の成果から折に触れ指摘される、木質遺物における選択行為が本遺跡出土木質遺物にも認められるかを検討する。

なお、抽出作業において、層位や樹種が不明なものは各項目の対象外とした。器種の特定が可能な未製品および木製品は、その器種に一括した。遺構構成材の器種組成に限り、転用材は例えば「櫂転用杭」は「杭」というように、転用後の名称を使用した。便宜上、板目板・板目材と柁目板・柁目材はそれぞれ「板目板材」、「柁目板材」とした<sup>(2)</sup>。いわゆる「みかん割材」は割材に含め、木取りは分割で一括した。用途不明木製品および用途不明加工材は「状」という語を使用せず、一括して扱った。各項目に占める割合が2%未満のものは一括して「その他」とした。

##### 2 樹種組成・器種組成・木取り

(1) 全体の樹種組成と器種組成(図177) 樹種組成はクリが最も多く全体の5割強を占め、次いでコナラ節、オニグルミ、キハダ、ケンボナシ属が優占する28分類群が認められた。本遺跡における花粉分析(第3章第1節)の結果出現した分類群と重複する樹種が多い。また、クリとコナラの優占は共通する。器種組成は杭状先端加工材と板目板材が多く、それぞれが全体の2割強を占める。次いで割材、杭、丸木材、柁目板材が優占する。木製品15器種・木材16器種の合計31器種から成る。

(2) 沢地区層位別の樹種組成と器種組成(図178) ここでは、木質遺物が出土したA~C層について、層位毎に述べる。

A層：樹種組成はクリ、オニグルミ、コナラ節、カエデ属、イヌエンジュの5分類群が認められる。クリが突出して多く、全体の6割強を占める。器種組成は杭状先端加工材が約4割、次ぐ板目板材が約3割を占める。次いで割材、掘り棒、容器、杭などが多い。木製品2器種・木材7器種の合計9器種から成る。

B層：樹種組成はクリが5割強を占め、次いでコナラ節、オニグルミと優占する20分類群が認められる。器種組成は杭状先端加工材、割材、板目板材がそれぞれ約2割を占める。次いで丸木材、掘り棒が多い。木製品9器種・木材15器種の合計24器種から成る。

C層：樹種組成はクリが5割を占め、次いでコナラ節、キハダが優占する25分類群が認められる。組成比率はB層とほぼ同様であるが、ニレ属とウルシが優占樹種の上位になる。器種組成は板目板材、杭状先端加工材がそれぞれ約2割を占め、割材と杭がそれぞれ約1割を占める。木製品10器種・木材14器種の合計24器種から成る。

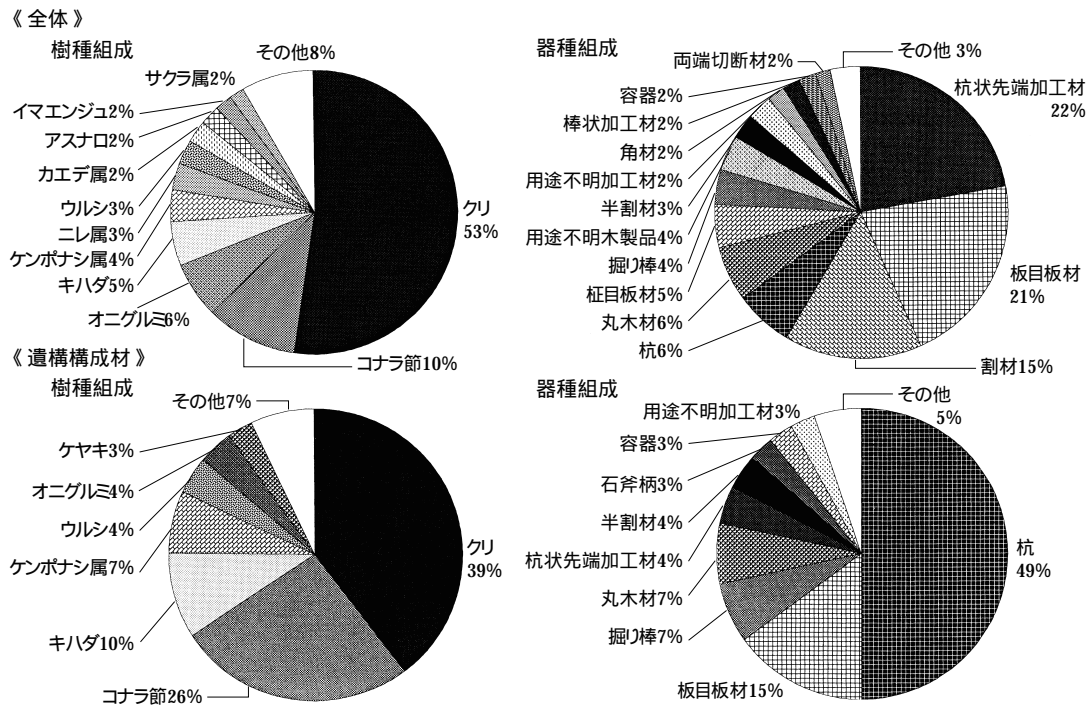


図177 樹種組成・器種組成1(全体・遺構構成材)

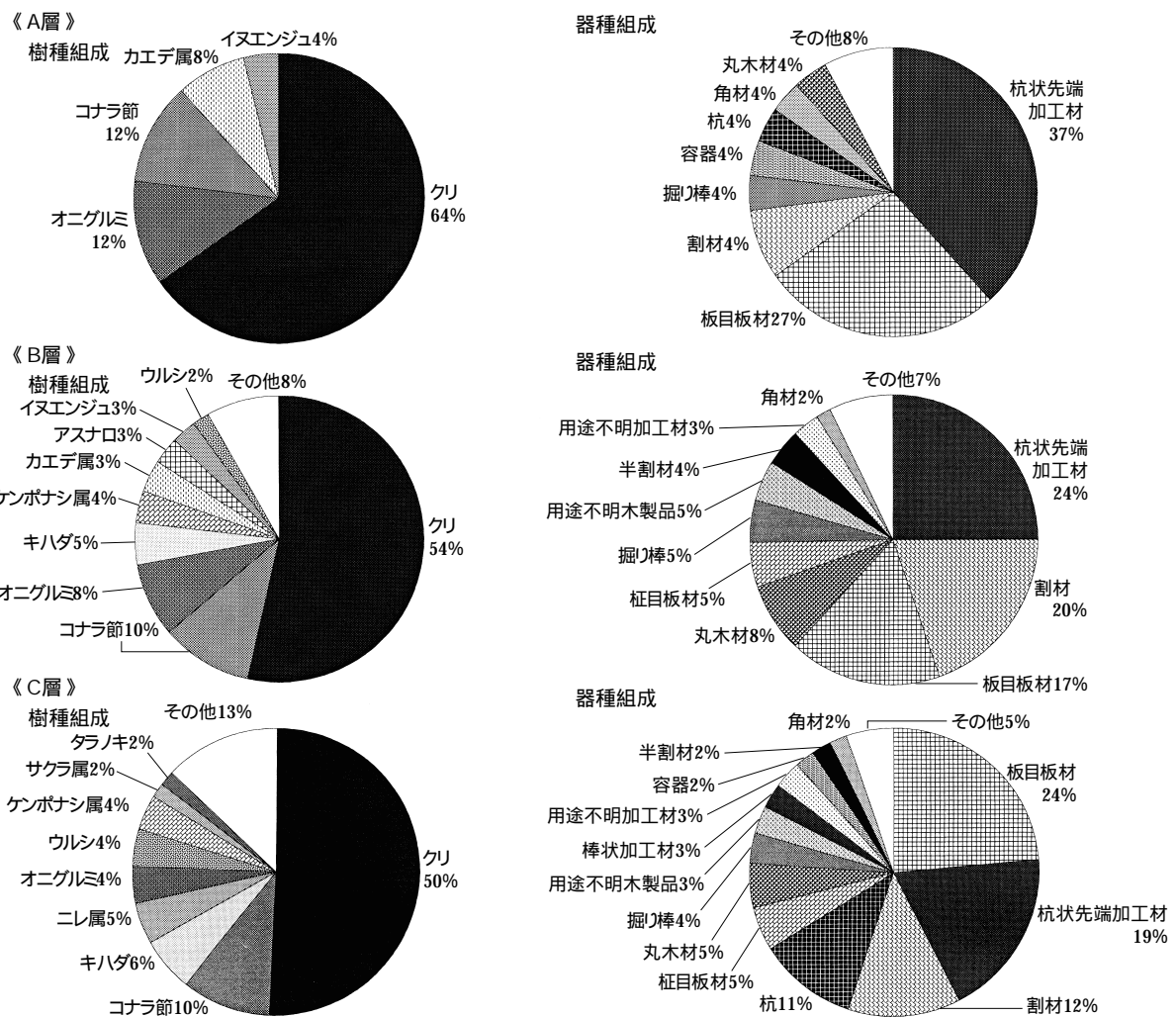


図178 樹種組成・器種組成2(層別別)

各層を比較すると、樹種組成ではクリが5割もしくはそれ以上を占め、コナラ節、オニグルミが主要の樹種であること、器種組成では杭状先端加工材、板目板材、割材の3器種が大部分を占めるが、

A層とB層を境として大きな変化がみられ、A層に比べB・C層の樹種は4ないし5倍、器種は約3倍に増加し、木製品：木材はA層がおおよそ1:4であるのに対し、B・C層では2:3になる。また、C層は第1号木組遺構をはじめとする遺構群が検出されていることにより、遺構構成材に多用される板目板材と杭の占める割合が増加する。

(3) 沢地区遺構構成材全体の樹種組成と器種組成(図177) 沢地区から検出された遺構群を構成する樹種組成は、クリが最も多く全体の約4割を占め、次いでコナラ節、キハダ、ケンポナシ属、ウルシ、オニグルミが優占する12分類群が認められる。製材性や耐久性に富む樹種が構成材に多用される傾向が窺える。

器種組成は杭が最も多く、構成材の約5割を占める。次いで板目板材、掘り棒、丸木材が多い。遺構は板材を杭で固定するというように、複数の木質遺物が組み合わされて構成されるものが多いことから、自然な結果といえるだろう。木製品4器種・木材10器種の合計14器種を使用している。

また、グラフ化はしていないが、遺構別にみると杭跡1のみ使用樹種および器種に大きな偏りが認められ、使用された杭の5本中4本はコナラ節を使用しており、それら4本中3本が櫂(櫂状木製品を含む)を転用している。

(4) 主要器種の機種組成(図179) ここでは、樹種組成に注目できる器種について個々に述べる。掘り棒(未製品含)：コナラ節、ケンポナシ属、アスナロ、オニグルミの4分類群が認められる。約7割がコナラ節で組成の大部分を占める。他の樹種はほぼ均一の比率である。

櫂(櫂状木製品含)：コナラ節とオニグルミのみが認められ、6点中、前者が5点である。

石斧柄：ケヤキとニレ属のみが認められ、3点中、前者が2点である。

用途不明木製品(舟形)：クリ、ウルシ、キリ、コシアブラ、ハリギリの4分類群が認められる。後二者は、樹種同定を実施した木質遺物の中で、ともに1点のみ認められた。クリの占める割合が最も多いが、組成全体に大きな偏りは認められない。

容器：クリ、ケンポナシ属、ウルシ、カエデ属の4分類群が認められる。クリとケンポナシ属がそれぞれ約4割を占める。

角材：クリ、キハダ、アスナロ、ケンポナシ属、コナラ節の5分類群が認められる。クリが約5割を占め、それに次ぐキハダが約2割と優占する。樹種に関係なく芯持材は認められない。

両端切断材：クリ、アスナロ、イヌエンジュ、ニレ属の4分類群が認められ、クリが全体の約7割を占める。

杭：クリ、コナラ節、キハダ、オニグルミ、ケンポナシ属、イヌエンジュ、ウルシ、ハンノキ属ハンノキ節の9分類群が認められる。クリが最も多く約5割を占め、次いでコナラ節、キハダが優占する。

杭状先端加工材：クリ、オニグルミ、カエデ属、コナラ節、イヌエンジュが優占する17分類群が認められる。クリが約7割を占め、他を圧倒する。

(5) 主要樹種の器種組成と木取り(図180) ここでは、全体を占める割合が高い上位5分類群(クリ、コナラ節、オニグルミ、キハダ、ケンポナシ属)と、器種組成や木取りに特徴のみられる4分類群(ウルシ、アスナロ、イヌエンジュ、ケヤキ)について個々に述べる。また、それぞれの文末には樹種の特徴についても記述する。

クリ：樹種同定を実施した木質遺物全体の5割強を占めるとともに、層位別にみても半数もしくはそれ以上を占める。器種組成は杭状先端加工材が3割と最も多く、次いで多い板目板材、割材とで7割以上を占める。木製品4器種・木材13器種の合計17器種から成る。木取りは板目と分割が多く、両者で6割以上を占める。他には芯持丸木、柱目、芯持半割、芯去角や横木取りなどが認められる。なお、加工はやや困難であるが、水湿によく耐え、耐久性は非常に高いという特徴を有する。

コナラ節：器種組成は掘り棒が最も多く約3割を占め、次いで割材、板目板材、杭、杭状先端加工材、櫂が多い。木製品2器種・木材9器種の合計11器種から成る。木製品の器種数は少ないが、数量は約4割に相当する。木取りは芯去削出が約3割、板目と分割がそれぞれ約2割で大部分を占める。なお、強度が高く硬いが、従曲性に富むという特徴を有する。

オニグルミ：器種組成は杭状先端加工材、板目板材、割材がほぼ同じ割合で大部分を占め、次いで柱目板材、掘り棒が多い。木製品3器種・木材11器種の合計14器種から成る。木取りに大きな偏りは認

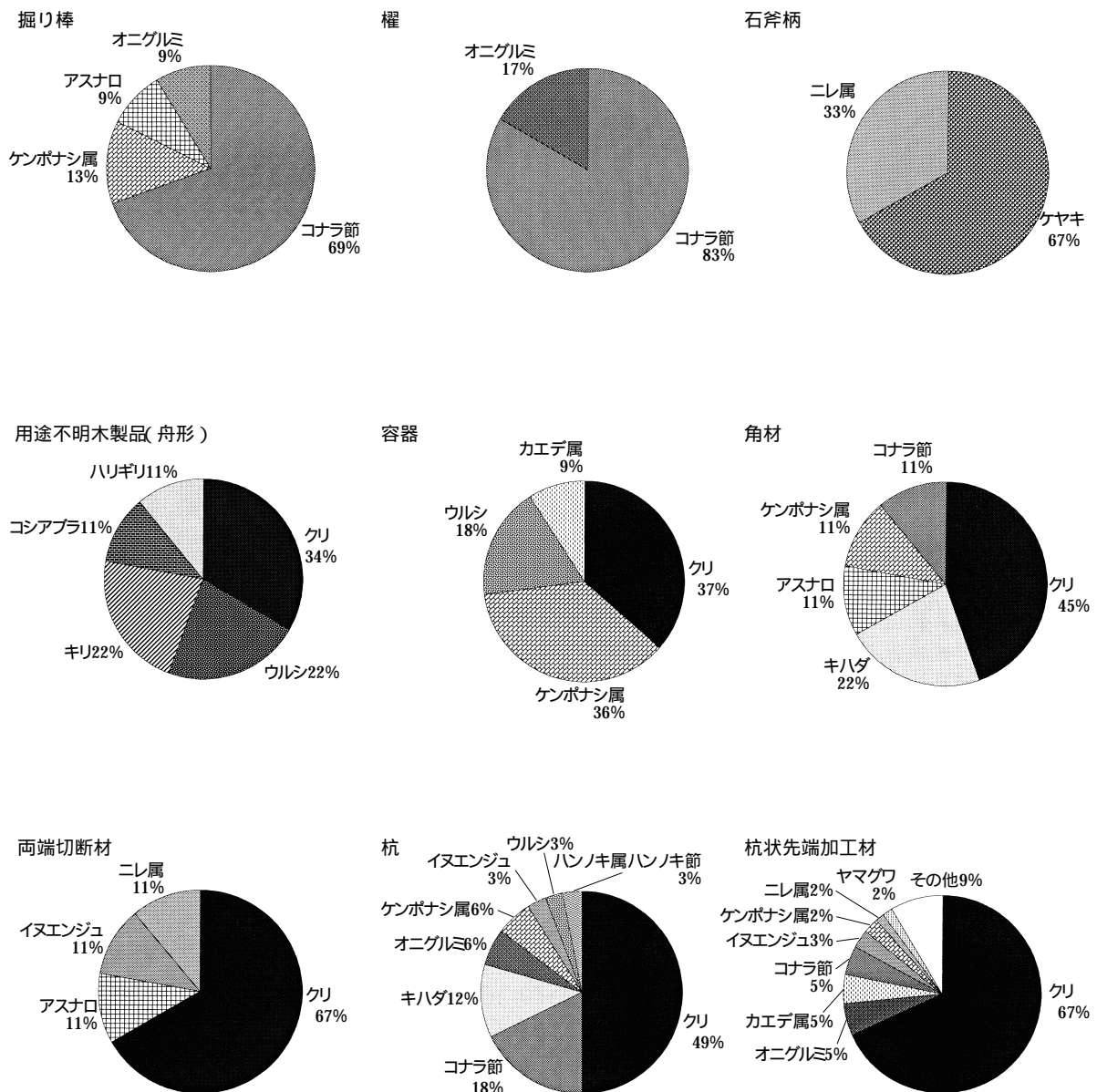


図179 主要器種の樹種組成

められず、板目が約 3 割と最も多く、次いで分割と芯持丸木が多いが、柾目や芯去削出もわずかに認められる。なお、狂いが少なく靱性に富み、加工が容易であるという特徴を有する。

キハダ：器種組成は板目板材と割材で全体の約 5 割を占めるが、他の樹種と比べ柾目板材の割合が多い。木製品 1 器種・木材 8 器種の合計 9 器種から成る。木取りは板目と分割に大きく偏り、ともに 3 割以上を占め、次いで柾目が約 2 割、芯持丸木が約 1 割と、器種組成に比べ木取りは少ない。なお、材肌は粗く強度の高い割には柔らかいという特徴を有する。

ケンボナシ属：器種組成は容器、割材、掘り棒、杭状先端加工材がほぼ同じ割合で全体の 6 割以上を占める。また、他の樹種に比べ板目板材の割合がきわめて少ない。木製品 3 器種・木材 7 器種の合計 10 器種から成る。木取りは分割と芯去削出が大部分を占めるが大きな偏りはなく、他にも芯去角、横木取り、縦木取りなどが認められる。なお、材肌は粗いが美しい木理をあらわし、加工は楽であるという特徴を有する。

ウルシ：器種組成は板目板材が約 4 割と最も多く、次いで用途不明木製品（舟形、挟り付）容器が多い。木製品 3 器種・木材 5 器種の合計 8 器種から成る。木取りは板目が 5 割を占め、次いで横木取りと柾目が多い。なお、強度はやや弱い方で脆いが比較的軽量で吸水しにくいという特徴を有する。

アスナロ：器種組成は用途不明木製品（薄板状、箸状）が最も多く 3 割以上を占め、次いで削出割材片、掘り棒が多い。木製品 3 器種・木材 4 器種の合計 7 器種から成る。木取りは芯去削出が 5 割を占め、次いで分割、柾目、芯去角となる。芯持材は認められず、すべて幅・厚さが 3 cm 未満である。なお、材質は柔らかいが強靱で耐久性に優れ、水湿の場所での使用は有効であるという特徴を有する。

イヌエンジュ：器種組成は丸木材が約 5 割と最も多く、次いで杭状先端加工材、杭、両端切断材の 4 器種に分類される。木製品は認められず、すべて木材である。木取りはすべて芯持丸木である。なお、加工はやや困難であるが、耐久性は高いという特徴を有する。

ケヤキ：器種組成は石斧柄と用途不明木製品（鳥形）のみである。すべて木製品である。木取りはすべて芯持丸木で、石斧柄は股木部分を使用している。なお、水湿によく耐え、耐久性が高く比重の割に加工は比較的楽であるという特徴を有する。

上記した樹種の内、クリ、オニグルミ、キハダ、イヌエンジュは数量に対する木材の占める割合が多く、これとは対照的に、ウルシ、ケンボナシ属、ケヤキは木製品の割合が多い。前者と同様の傾向はここでは述べていないニレ属、カエデ属にも認められ、後者と同様の傾向はサクラ属、キリ、コシアブラ、ハリギリに認められる。また、アスナロ、イヌエンジュ、ケヤキは器種に限定されないものの、木取りが限定される。

3 みかん割材・半割材・丸木材の意味するもの 本遺跡から出土した木質遺物には、丸木材、半割材のほか、放射状に分割される、いわゆる「みかん割材」に分類されるものが一定量認められる。これらの器種からは、伐採された木の直径がおおよそではあるが求めることが可能である。図181は上記した器種の内、樹種を問わず直径の算出が可能な160点（みかん割材89点、半割材23点、丸木材48点）から復元直径を算出し<sup>(3)</sup>、その分布を 4 cm 毎と 10 cm 毎でグラフ化したものである。

4 cm 毎の分布をみると、4 ~ 16 cm の範囲に 123 点（77%）が集中し、ピークである 4 ~ 8 cm に 76 点（48%）が集中する。10 cm 毎の分布では、0 ~ 10 cm の範囲に 113 点（71%）が集中し、0 ~ 20 cm の範囲には 142 点（89%）が収まるという注目できる結果となった。

上記したように復元直径は必ずしも正確ではないものの、樹種に関係なく特定の範囲内にほとんど

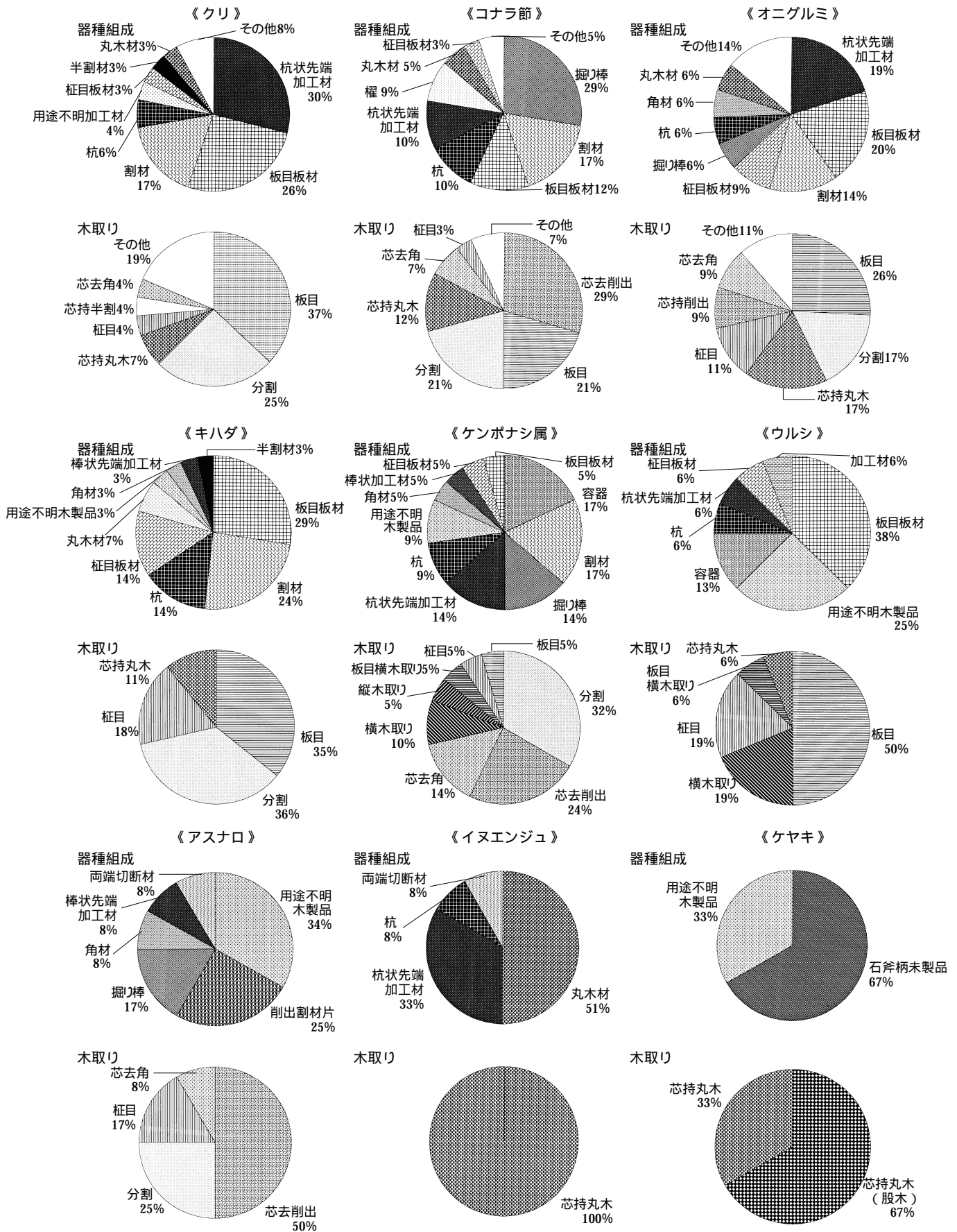


図180 主要樹種の器種組成・木取り



が集中することからは、木を伐採する際には径の太細が大きく関係した、言い換えれば、適当な太さを選択したうえで伐採が行われたものといえるであろう。「成長が速い木は、適する太さになる時間が短い(プラス要因)しかし、適する太さである時間は短い(マイナス要因)。逆に成長が遅い木は、適する太さになる時間はかかるが(マイナス要因)しかし、適する太さである時間は長くなる(プラス要因)」(山田2002)ことを反映させれば、本遺跡出土木質遺物の伐採に関わった人間にとって、直径約4~20cmが適する太さであったといえるであろう。

4 イヌエンジュと木取りの関係 本節2(5)で述べたように、イヌエンジュは例外なく芯持材である。この関係は、東京都東村山市下宅部遺跡第7号水場遺構(東村山市2000・2001)にも認められる。第7号水場遺構は出土土器から縄文時代後期の所産と推定され、二つの流路合流地点付近に構成材をコの字形に配置し、周囲に多数の杭を打ち込んだ遺構であり、イヌエンジュは構成材を支える重要な位置に杭として多用されていた。樹種同定された30本中27本(90%)が丸木材であること、構成材ではクリに次いで多用されていること、出土位置、樹種の特徴から、これまでに類例のないイヌエンジュの選択的な使用が指摘されている(佐々木・能城2004刊行予定)。

本遺跡においては、遺構構成材として使用されたものもあれば包含層から出土したものもあり、選択的に使用されたものかは判然としない。しかしながら、7cm前後にまとまる径からは本項3で述べた太さの選択性が窺え、これに木取りの特徴を踏まえれば、選択的に使用された可能性は考えられるであろう。

そして、時期的・地域的に離れている遺跡間において、これまで類例のない樹種について同様の選択性が指摘できることは、ヒトの植生への関与を検討するうえで注目できるであろう。

5 クリ使用と非クリ使用 まとめにかえて 本遺跡から出土した木質遺物の中で、樹種同定を実施したものについて検討してきたが、その結果、いくつかの注目すべき事柄が挙げられる。

まず、クリは他の樹種に比べて圧倒的に多く認められ、大部分の器種の優占樹種であるだけでなく、木取りも多様性に富む。これに加えて、丸木材や半割材、みかん割材から算出できるおよその径ならびに大型の遺構構成材などから想定できる、伐採・運搬・製作などの行為に要した労働力を最小限

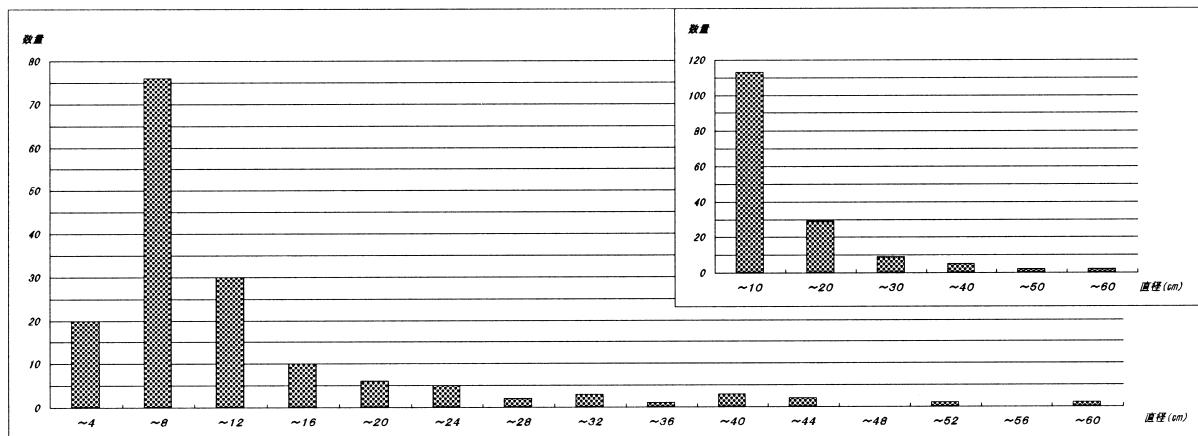


図181 みかん割材・半割材・丸木材の直径分布 4cm毎(大)・10cm毎(小)

に考慮しても、本遺跡から出土した木質遺物に関わった人間にとって、クリは様々な利用条件に適応し得る樹種であったといえるであろう。

しかしながら、掘り棒、櫂、石斧柄、敲き具、用途不明木製品、加工材といった、クリをほとんど、もしくはまったく使用していない器種が存在する。これらの器種は、それぞれの器種とそれに多用される樹種が相互に大部分を占める傾向にあるだけでなく、加工材以外はすべて木製品である。

クリは出土量が他の樹種に比べ突出していること、器種や木取りが多様であることは先に述べたが、出土数に対する木製品が占める割合は3%（300点中9点<sup>(4)</sup>）ときわめて少ない。本遺跡の花粉分析（第3章第1節）や約2km北東に位置する三内丸山遺跡第6鉄塔地区での分析結果（青森県1998）からは、円筒下層a・b式期の本遺跡周辺におけるクリ優占の林の分布が推定されており、これを踏まえると、クリで製作された木材が少なすぎるのはきわめて不自然といえる。

以上の事柄を合わせて考えれば、木材製作にはクリ、木製品製作には主としてクリ以外の樹種が多用された、つまり、クリ使用器種と非クリ使用器種を区別していた可能性が指摘できるであろう。

次に、丸木材や半割材、みかん割材から求められるおおよその径がほぼ同一の範囲内に集中することからは、木の伐採や割りに際し、木の太さが選択されたものと思われる。

そのほか、クリも含め、樹種によって器種組成が木製品に偏るものと木材に偏るものに大別できることから、木製品製作と木材製作という特定の器種に限定しない範囲での樹種選択が行われた可能性が指摘できる。さらに、イヌエンジュ、アスナロ、ケヤキなど、器種に限らず木取りに統一性がみられる樹種が認められることから、樹種に応じた木取りの概念が存在した可能性も指摘できるであろう。

以上の事柄を総合すると、選択行為は単に器種に応じた樹種を使用するだけに留まらず、伐採時における木の径、樹種に応じた木取りなど、木の取り扱いに対していくつかの選択項目が存在したことが推察できるであろう。

注（1）第3章第12節では樹皮を除く598点を対象に樹種同定を実施しており、本項とは点数が異なる。これは同定後の整理作業で接合したものがあることなどに起因する。

（2）「板」と「材」の明確な分類および基準の設定はかなり困難且つ曖昧であり、特に器種組成において両者を区別するのは問題があると判断した。両者を一括したのはそのためである。

（3）みかん割材の復元径の算出については、放射方向の値を2倍した。芯部分が加工してあるものは、二つの放射方向を延長した交点までの値を2倍した。

（4）注（1）に同じ。

## （2）「杭状先端加工材」の検討

1 「杭」と「杭状先端加工材」 二つの名称 本報告において、転用材を含む「杭」はすべて「地表に打ち込まれた状態で確認されたもの」であり、本遺跡から出土した多くの木質遺物の中で用途の特定が可能な数少ない器種のひとつである。それに対し、包含層から出土し、一端が杭状に加工されている木質遺物は、杭として使用された可能性が高いが「杭状先端加工材」（以下、本遺物と呼称）という名称を付し、第2章第4節1では杭と区別して扱った。

これは、木質遺物における各研究機関での器種分類基準の不一致や、木質遺物が有する使用法の複雑性に因る混乱（山田1993）を避けること、の事柄から、「地表に打ち込まれた状態で確

認められたもの」以外の木質遺物に対して、形状や製作技術から「杭」という用途を限定する名称を使用するのは問題があること：「杭」という名称は、支えや区画といった用途を限定するものであるが、本遺物の名称は「先端を杭状に加工している」という製作方法を付したものであるため、その用途は限定されないことに起因する。

本節では上記の理由から区別した両遺物の対比など、いくつかの視点から本遺物の用途を検討する。

## 2 二つの器種

( 1 ) 杭 ( 図179・182 ) 本遺跡から出土した杭の総数は44点である。冒頭で述べたように、地表に打ち込まれた状態で確認されたものである。樹種同定の結果ではクリが5割を占め、次いでコナラ節、キハダが優占する8分類群が認められた。分割材と板目板・板目材が多用されているが、内2割に相当する9点は掘り棒などの木製品を転用したものである。全体の6割以上に上端の潰れや欠損が認められ、それらの大部分は打ち込みによるものと思われる。炭化しているものや樹皮が残存しているものも存在するが、それらは全体の1割にも満たない。

杭を使用する際、ポイントのひとつとなる下端面の形状から、A類：平らなもの(方形状) B類：尖るもの(V字状) C類：丸みを帯びるもの(U字状) D類：何らかの力が加わり、本来の形状が変形しているものに分類した。

その結果、最も多くなるのがA類で全体の3割強を占める。その中には転用材である掘り棒のヘラ部分など平らで幅広な部分を使用しているものもあることから、加工の段階から使用に至るまで、下端の形状にさほど固執していないことが窺える。また、使用する際のもうひとつのポイントである上端<sup>(1)</sup>は、打ち込むには適さないとと思われる板状のものや、潰れや欠損の認められないものが存在する。

以上の事柄に、使用場所が台地に比べて比較的容易と思われる沢地形の泥炭質土や砂質土であることを加味すれば、打ち込まれたものだけでなく人力で挿し込まれたものが少なからず存在したものと考えられるだろう。

( 2 ) 杭状先端加工材 ( 図179・183 ) 本遺物は樹種同定を実施した木質遺物の中で最も多く、未報告のものを含めれば128点で全体の約2割に相当する。未報告分を含めた樹種同定の結果、クリが約7割を占め、次いでオニグルミ、カエデ属、コナラ節、イヌエンジュが優占する17分類群が認められた。分割材と板目板材がほぼ同じ割合で多い。ほぼ半数に炭化もしくは焦痕が認められ、少数だが樹皮が残存するものが認められる。出土状況およびA～C層の器種組成(本節3(1))から、大部分は上流からの流れ込みもしくは廃棄されたものと考えられる。

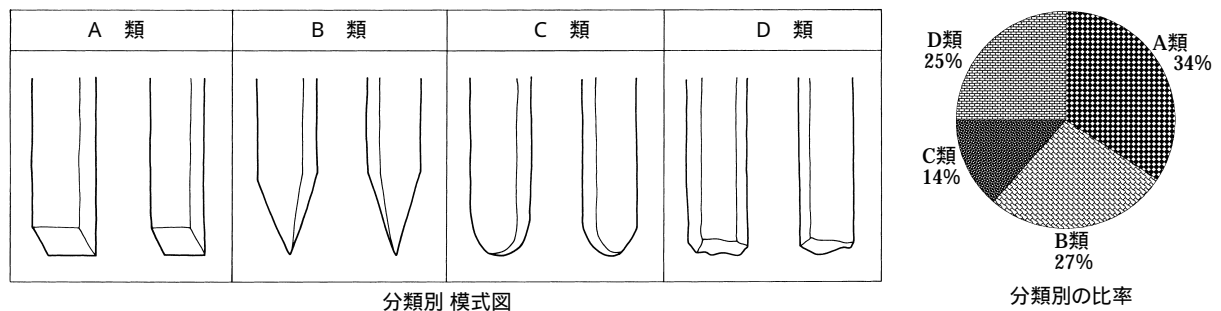


図182 杭

これらを先端加工部分の特徴から、A類：一方の側縁を加工するもの B類：全体を加工するもの C類：両側縁を加工するもの D類：両面を加工するもの E類：一方の面を加工するもの F類：焼きを入れ、炭化させることで整形しているもの に分類し、F類を除いた各分類はさらに、1類：炭化が認められるもの 2類：炭化が認められないもの に二分した。

各分類の比率をみると、A・B類がそれぞれ3割、C・D・E類が約1～2割、F類が1割未満となり、A・B類で大部分を占める。次に、分類別の炭化の割合をみると、多い順に、F類100%、B1類65%、C1類・E1類50%、A1類・D1類25%となり、先端の加工が少ないものほど炭化する傾向が窺える。これは、炭化させることで材の強化や腐食防止を図ったことのあらわれと考えられる。

そのほか、上端は破損しているものが多いが、杭の上端に類似する潰れや歪みが認められるものも存在する。これまでの事柄を踏まえれば、本遺物は「差（挿）す」や「打ち込む」など、杭と似た用途が考えられるだろう。

ただ、本遺物に分類したコナラ節については、クリに次いで多いものの加工の度合いに関係なくすべてに炭化が認められない。また、掘り棒や櫂に分類されるものと規模・形状に大差がない。さらに、芯の有無に限らず例外なく一面以上の平坦面が作出されていることから加工の発展が窺える。以上のことを踏まえれば、加工途中の未製品が含まれる可能性も考えられるだろう。

3 両者の対比 これまでではそれぞれの特徴に注目して述べてきた。ここでは両者を比較し、その所見を述べる。

まず、両者に共通する点は、第一に、樹種組成や木取りが概ね同様の傾向を示すこと、第二に、杭の上端に多く認められる敲打痕に似た痕跡が本遺物にも観察されることである。

次に、両者の異なる点は、第一に、杭は下端が尖らないもの（転用材は平らな部分を下向きにしているもの）が多いが、本遺物は加工の程度に関係なく先が尖ること、第二に、杭に比べると本遺物における炭化の割合は圧倒的に多いことである。

以上、共通する二点からは両遺物が同様の用途を持つ可能性が考えられる。しかしながら、製作方

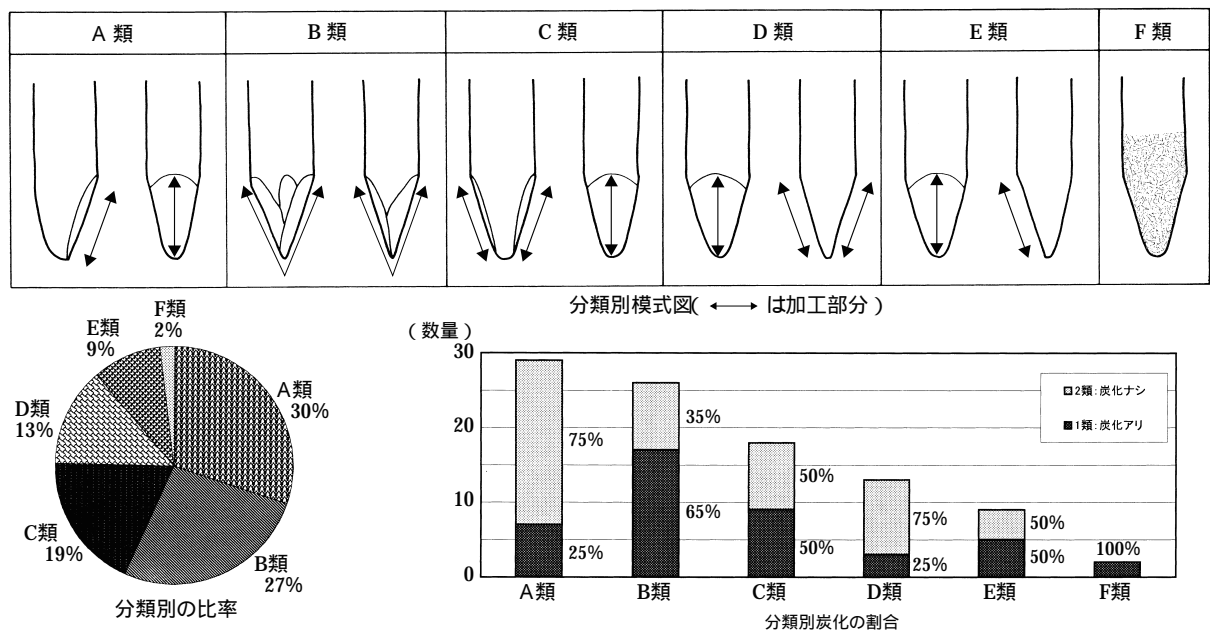


図183 杭状先端加工材

法や形状の相違という視点からは両者はその用途を異にするものと考えるのが妥当であろう。つまり、両遺物における矛盾が発生するのである。

4 遺構との関連性 さて、これまで杭と本遺物の両者を観察・比較し、所見を述べてきた。その結果発生した矛盾については後にふれるとして、ここでは視点を変えて検討する。

本遺物は掘り棒や櫂などの木質遺物とは異なり単独での機能が考えにくいほか、先述したように、大部分は廃棄もしくは流れ込みと考えられる。このことから、本遺物の使用場所を沢周辺の台地、すなわち本遺跡丘陵から検出された遺構群(『岩渡小谷(3)・(4)遺跡』所収)の中でも木質遺物と同時期である縄文時代前期に帰属する遺構に絞り込み、本遺物との関連性を検討する。

その前に、遺構が構築されている台地という場所を考えれば、先端を尖らせることで「差(挿)す」もしくは「打ち込む」際の労働力や地面の硬さなど、使用時に発生する諸問題を大なり小なり回避できるだけでなく、先端を炭化させることにより材の強度は増し、腐食防止効果が最大限に発揮されることは想像に難くないだろう。

上記の点でまず考えられるのは、住居との関連である。住居跡群の覆土は地山ないし住居内堆積土と同質の土で埋め戻されているものが多い。また、これらには建て替えが認められるものが一部存在し、第4B号住居跡ピット6を除き全体的に柱痕が認められるものは少ない。

次に、沢に面する北側斜面および調査区南側の土器埋設遺構周辺の二つの地域から検出されている小ピット群に着目すれば、これらには建物跡の存在や周辺の遺構との関係が考えられ、多くは柱穴状を呈するが、住居内柱穴と同様に柱痕が認められるものは少ない。このことから考えると、住居内柱穴やピット群は柱材が抜かれた状態で埋められた可能性が高いといえるであろう。もし、この見解に誤りがないのであれば、抜かれた後の柱材は一体どう取り扱われたのであろうか。

また、炭化させる作業が住居内で行われたものと仮定した場合、実物から想像すれば決して不可能ではない。しかしながら、火災の危険が伴うことを加味すれば、住居外で行われたものと考えられることはさほど不自然ではないであろう。

そのような視点からも検討すれば、第4号土坑は底面からピット1基が焼土と炭化物とともに検出され、地床炉を伴う仮小屋的な機能が考えられている。また、調査区中央に集中する焼土遺構はいずれも被熱深度が浅く、廃棄と思われるものを除き一時的に火が焚かれたものと考えられる。かなり漠然とした見解であるが、上記の土坑および焼土遺構は、本遺物を加工(炭化)する作業の場でもあった可能性がある遺構といえ、本遺物との関連が考えられる。

5 結語 これまで、「杭状先端加工材」という名称を付した木質遺物について、いくつかの視点から検討してきた。これまで述べてきたすべての事柄を踏まえたとうえで本遺物の用途を考えれば、住居の柱材などの遺構構築材として使用された可能性が濃厚である。これは本遺物の樹種組成の7割を占めるクリが青森県内外の当該期の住居跡から出土する炭化材に多く認められることから推測できるであろう。

しかしながら、先端部に集中する加工や炭化などの技法からは、杭として使用された可能性が高いことにも変わりはない。ただ、本遺物を杭として考えたとき、両者は明らかに加工の特徴が異なることから、使用場所にに応じて製作方法を変化した製作者の柔軟な対応が考えられる。そして、このこ

とは本項3での矛盾の理解にも繋がるであろう。

また、先端部以外や全体に炭化や焦痕が認められるものは、燃料材ないし燃料材への転用材、さらには燃料材としての利用途中に消火されたもの（青森県1998）である可能性も考えられる。さらに、先述したコナラ属の検討をふまえれば、加工途中の未製品が含まれることも考えられるであろう。

以上、「杭状先端加工材」という遺物に対していくつかの視点から用途を検討してきた。冒頭でもふれたように、「杭状先端加工材」とは「杭」と区別するために便宜上使用した名称であるものの、考えられる用途は多様であり、木質遺物特有の複雑性をあらかず結果となった。

考古学における木質遺物の研究は、土器や石器に比べると未だ発展途上の段階にあり、検討すべき問題は決して少なくない。しかし、それらを明らかにしていくことで、過去に生きた人々の痕跡がより鮮明に描かれることはいうまでもない。 （工藤）

注（1）民俗事例では、杭を加工する際に頭（叩く面）を面取りすることで、叩いた時に縁が欠けるのを防ぐことができるほか、頭がある程度尖っていると力が集中して入りやすいといわれる（村上2002）。この点を踏まえると、杭の下端に限らず上端の形状や状態は、杭や杭を使用する際の行動を検討するうえで重要なポイントであると考えられる。

### （3）木製品

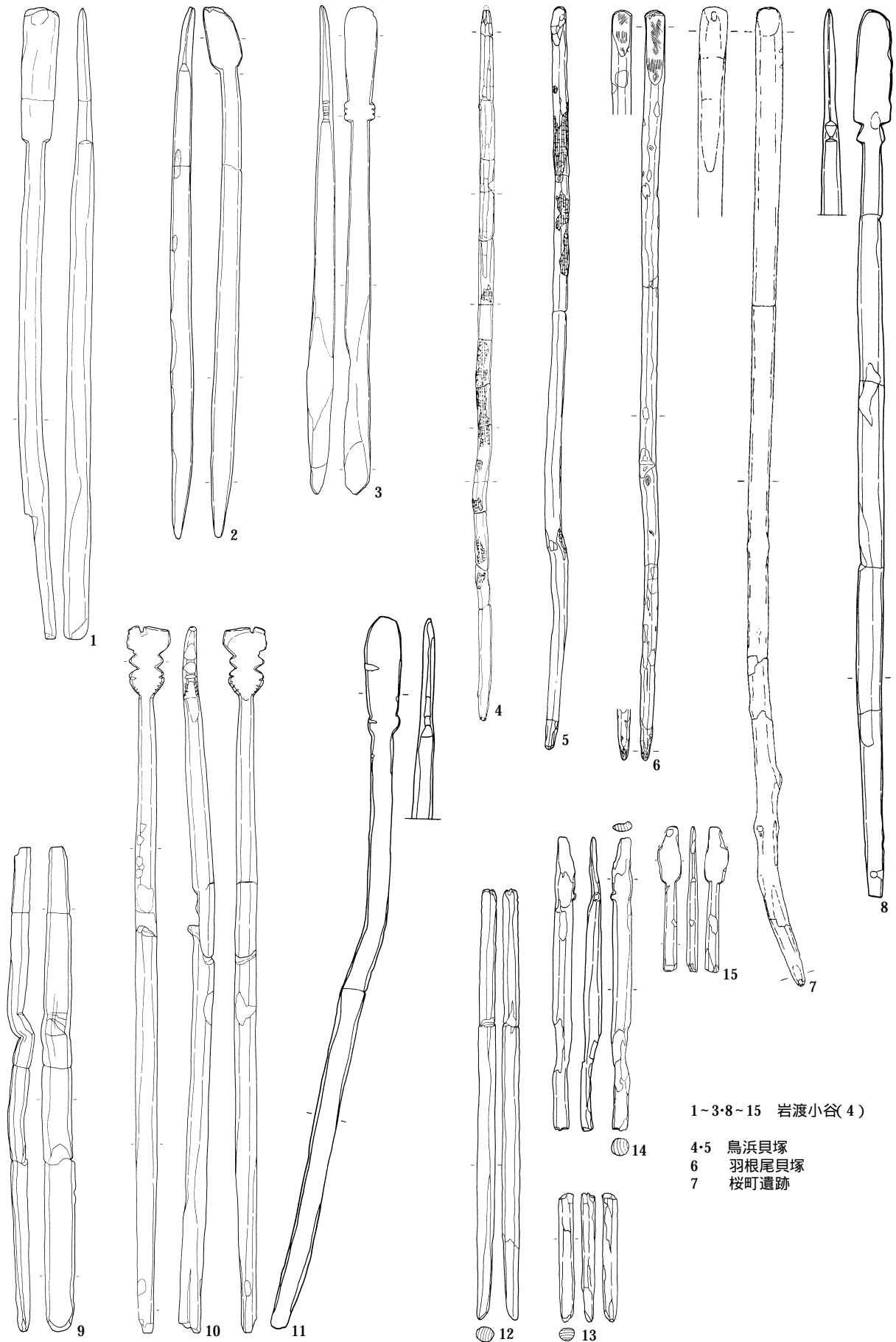
掘り棒（図184）棒状に削り出された木材の端部にヘラ状または尖り状に加工されているものである。完形品・破損品・未製品が出土している。大きさは、完形品やこれに近いものから、長さ70cm～1.3m、柄の幅2.5～3.5cm、ヘラ部分の長さは8cm～20cm、幅3cm～6cmである。器面が平滑で丁寧に加工されている。使用された木材はコナラ節が多く、アスナロやクリなど他の木材で作られたものよりも柄などの断面径が大きい。前期には各地から出土例が報告されるようになり、これ以降にもその利用が広範に認められるようになる。ここでは、主に、縄文時代前期の掘り棒を比較検討してみる。加工：製作工程に違いがあり、次の2つに分かれる。一つは、割材を削り出して丸い棒状に加工したもので、本遺跡や三内丸山遺跡で出土例がある。もう一つは丸木の両端を加工しているもので、福井県鳥浜貝塚・神奈川県羽根尾貝塚（戸田ほか2003）・富山県桜町遺跡（小矢部市1998）（中期）で出土例がある。

形態：一端をヘラ状に加工し、一端を尖らせた形状と両端を尖らせた形状の2種類がある。とくにヘラ状に加工してあるものは柄とヘラの肩部分形状にも違いがあり、大きく分けて3つのタイプがある。

1 柄とヘラ部分に境界のないもの、2 撫で肩状になるもの、3 肩部をもつものである。1のタイプは、本遺跡出土例の9と丸木を使って製作された掘り棒4～7がこれに当たる。2のタイプは、本遺跡出土例の2・15と三内丸山遺跡出土例である。3のタイプは本遺跡出土の12と13を除いた出土例であり、ヘラ部分に肩をもつものが本遺跡の特徴である。

大きさ：断面径が3～3.5cmの太めタイプと断面径が2.5cm以下の細身タイプとに大きく分かれる。本遺跡例は大部分が太めタイプで、丸木を使って製作された掘り棒は細身タイプになる。掘り棒の長さも、完形品がこれに近い形状のものだけで確かなことは言えないが、本遺跡例が70cm～1.3mと幅があるのに対して、丸木の掘り棒は1～1.3mと同じような長さの範囲にまとまっている。

ヘラ部分の大きさを探るために、ヘラ部分の形状が1・2のタイプについて、全体の長さとはヘラ部



1~3-8~15 岩渡小谷(4)

4-5 鳥浜貝塚  
6 羽根尾貝塚  
7 桜町遺跡

● 14

● 12

● 13

图184 掘り棒集成

分の比率を算出した。使用した掘り棒は3点で、本遺跡の完形掘り棒2点と三内丸山遺跡出土の掘り棒1点である(注1)。比率をみると、全体の長さが各々異なるにも関わらず、およそ8:1であり、掘り棒の長さの違いによってヘラの部分も変化することが分かった。

想定される機能：掘り棒に類似した形状の道具が、「フグシ」と呼ばれる近世の農具である。この農具は「根菜類を掘り取るのが目的で、(一)土をゆるめる、(二)土を掘り上げる、(三)根を突き切るといった機能のいずれか、または組み合わせによって、根菜類を掘り上げる農具であった。」とされている(藤塚1986)。

根菜類には下表のような種類のものがあり、この内、縄文時代前期にはイモ類が京都府松ヶ崎遺跡(戸原2000)で、中期にはコゴミが桜町遺跡(小矢部市 前掲)で確認されている。松ヶ崎遺跡で出土したのはムカゴで、ツルの葉脈にできる珠芽であるが、主根の部分も掘り上げられ、食用とされた可能性は十分に考えられる。このような出土例から本遺跡でも根菜類を食用に採取していた可能性も考えられる。

下表は根菜類の地表からの長さも表しているが、掘り棒の長さと比較すると、根菜類を掘り上げることが可能な深さであることが分かる。(藤巻1993 表3から転載)

カタクリ・アサツキ	オニユリ・ヤマユリ	ワラビ・ウバユリ	クズ・ヤマイモ
20cm	20～30cm	30cm	100～150cm

このほかにも、ヤマノイモを崖に自生した場所から掘り上げると労力がかからないため、縄文人がこの採取方法を利用してヤマイモを採取していた可能性が述べられている(中口1982)。以上のことから、本遺跡から出土の掘り棒が、形状や規模から根菜類を掘る道具として使用された可能性は高い。

注1 三内丸山遺跡対策室で実測させていただいた計測値をもとにしている。

石斧柄未製品 3点出土しており、台部と柄のなす角度は鋭角である。台部の先端は全体が樹芯に向かって斜めに削られ、柄に近い端部は両面から削りが入る。32-1・3はこの端部が斜めに削られる。台部の先端中央は削られたままのもの若干ツブレたような痕跡のある32-1がある。台部の径は32-1・2と32-3に大きな違いがあり、これと同じように樹種にも、32-1・2のケヤキ、32-3のニレ属というように違いが認められる。台部径の大きさの違いが樹種の違いに反映しており、使用目的等が異なる可能性がある。未製品を含む石斧柄が大量に出土した遺跡として有名なのが縄文時代前期の鳥浜貝塚である。鳥浜貝塚の木製品を分析した網谷氏は、斧身と柄のなす角度によって、鋭角型と鈍角型に分類しており、鋭角型174例・鈍角型11例と大多数が鋭角型の柄である。この内未製品は台部両端のみを裁断したものが実に7割を占めており、網谷氏は成形の第一段階にあてている(網谷1996)。これらの事例を本遺跡の3点と比較してみると、同じ様な加工が台部に施されており、石斧柄に加工する前段階の未製品と位置づけられる。

櫂・櫂状木製品(図185)本遺跡出土の櫂は、柄の断面形が円形で、水かきの部分に向かって緩やかに幅が広がる形状で、下端が尖るものが多い。水かき部分の断面は両側縁がやや尖り、中央部分が



膨らむ形状である。他の遺跡出土の縄文時代前期の櫂は、本遺跡出土例と同じく、下端が尖った形状を持ち、水かき部分が緩やかに広がる形状である。とくに羽根尾貝塚の出土例は水かき部分の長さや幅が本遺跡例に近い。鳥浜貝塚例は多くの種類が出土しているため一概にはいえないが、水かき部分の規模が大きく、やや幅の広い形状をしている。

縄文時代の舟を漕ぐ方法としては、櫂の出土する事例が多いことから、座位による走法であったといわれており、とくに櫂の動作によっては、最適な長さの櫂や水かき部分の面積も変わると考えられる。本遺跡出土例・羽根尾貝塚出土例・鳥浜貝塚出土例で各々櫂の形状が異なるのは、時代や地域性のほかに、海や湖沼・川など舟を操る環境の違いとも考えられる。

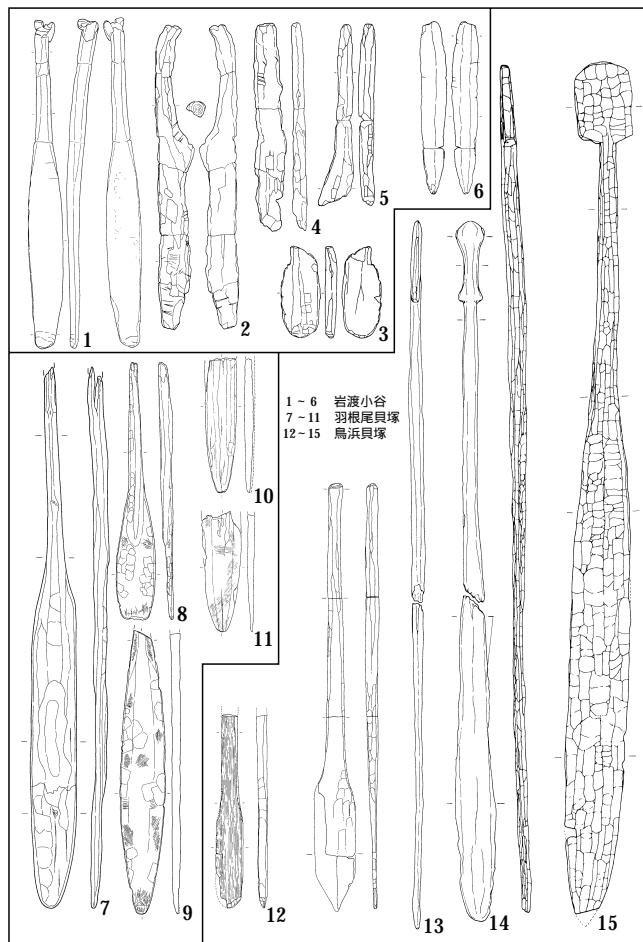


図185 櫂状木製品集成

容器 本遺跡の容器類は 9 個体11点出土し

ている。漆を塗布しているのは鉢・皿の 4 点である。漆は、何層かの構造で塗り重ねられており、赤漆には、ベンガラが使用されている。黒漆に使用されたものは本遺跡出土遺物でははっきりしなかったが、一般的には炭化物が使用されていたと推定されている。容器は全体形が復元できたものは59-1の 1 点のみで、その他は破片資料である。器種は鉢 3 点・皿 4 点・槽 2 点で、この内、台付鉢 2 点、台付皿 1 点である。使用された樹種はケンボナシ属・クリ・カエデ属・ウルシで、とくにケンボナシ属が多い。内訳は、ケンボナシ属：鉢 1 点・皿 3 点、クリ：鉢 2 点、カエデ属：皿 1 点、ウルシ：槽 2 点である。

縄文時代前期の他遺跡と比較してみると、器種では鉢の残存する遺跡が多く認められるが、最も出土点数の多い鳥浜貝塚では鉢・皿・椀の割合はほぼ同じである。使用される木材はケンボナシ属・クリ・ケヤキ・トチノキなどが各遺跡に共通する樹種である。とくにケンボナシ属が各遺跡で顕著に使用されており、「この木はそれほど優先的に自生しない木であるのに容器類に多く見られるのは、容器を製作するにあたっての樹種の選択が行われた可能性がある。」と述べられている（能城1996）。本遺跡でもケンボナシ属が容器に使用される割合が高く、同時代に使用された容器類と同じような器種組成や樹種選択が行われたと思われる。

用途不明木製品（槌状）：横断面形がU字形を呈し、内外面とも厚さが均一になるよう削られ、木口面は真っ直ぐに加工されており、表面の端部付近には一条の文様が施される。槌状木製品と分類した

ものの、その精巧な作りから「樋」とは別の用途も考えられる。この樋状木製品の類似例としては、鳥浜貝塚出土の漆塗り製品が挙げられる(鳥浜貝塚1987)。これは表面に赤漆と黒漆で文様が表現され、表面に一条の削り出し突帯がつくものである。出土例も少ないことから機能については不明であり、今後の出土事例の増加が待たれる。

用途不明木製品(鳥形) やや湾曲した丸木材の形状を生かして、全面を削り、鳥を表現したような形状に加工している。上面に楕円形状の削りが入っており、完成品のようにも見える。使用された木材はケヤキであり、97-1の用途不明加工材(容器状)や御井戸遺跡(新潟)出土の把手付き片口未製品(大田区2001)と同様に木製品の未製品の可能性もある。弥生時代以降の鳥形木製品と同様、祭祀的な意味合いで製作された可能性もあり、いずれかの判断はつかない。

用途不明木製品(舟形) 先端を三角形状・楕円形状に加工しているもので、内外面が平坦～丸味を帯びて加工され、両側縁がやや立ち上がり、端部などが加工されているものである。これらの木製品のひとつ、61-1は突起部分が両端につくのが特徴で、縄文時代中期の紅葉山49号遺跡(石狩市)から出土した「舟形容器」に形状が類似している(石狩市2003)。

舟形木製品と呼称されるものは全国各地で弥生時代以降も出土しており、準構造船などその時代の舟を模したと思われる木製品も出土している。本遺跡から出土した用途不明木製品(舟形)も縄文時代の舟を模した可能性もあり、このことについて若干触れてみる。

両端形状の分かる60-2、61-1は平面形がいわゆる鯉節形に近い形状である。60-2は側面からみると喫水線が両端とも高くなっており、外洋にも適した構造になっている(阿部2002)。川舟の場合は「舟底の下方に丸味をつけると据わりが悪く、波にゆられて転覆するので、底下は、平らなほうが波返りすることがない」(出口2001)とあり、仮に本遺跡から海に出る場合、沖館川を通過して移動する方法がとられたであろうから、川の移動と海の移動を兼ね備えた丸木舟が必要であったと想定するのは難くない。縄文時代の他の丸木舟例の平面形は鯉節形の削舟である(出口 前掲)。「帆走用の装置が発見されておらず、櫂が多く発掘されているので、走法はペーロン漕法(漕手が進行方向に向かって櫂で漕ぐ漕法)であったと思われる」(橋口1999)から推測すると、座位による櫂が使用されたと考えられる。

用途不明木製品(薄板状・箸状)と削り出し棒状木製品の加工方法(図186)とくにアスナロから作り出された木製品は、断面が円形で径2～2.5cmに削り出しているものである。これらと同じような形状を持つものに、掘り棒や両端切断材がある。他の削出割材片と異なる点は、1 径がやや小さく特徴的なこと、2 削出割材片をさらに分割した材が認められ

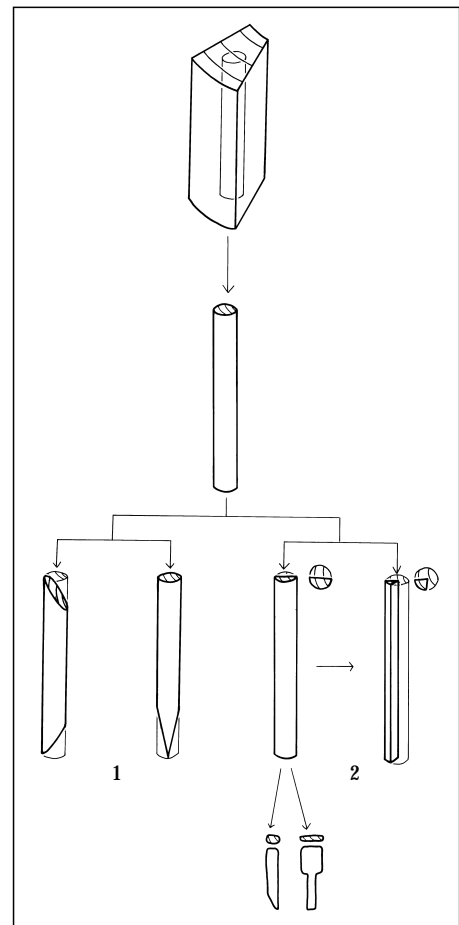


図186 用途不明木製品(箸状・薄板状)と削出加工材の加工方法

ること、3 アスナロを使用した木製品でかなり小さく加工した木製品がみられることである。これらの違いを踏まえてアスナロ材の加工工程の想定を行った。：木材を適当な大きさに割る、：その割材を削り出して断面形状を丸くする、1：削り出した丸棒の一部を加工して使用する、2：削り出した丸棒を更に割り取る、：加工して別の木製品を仕上げる、である。・工程を示すものは出土していないが、これは、アスナロ材が製品として利用される頻度が高く、無駄なく使用される表れかもしれない。1工程のものは削出割材片の一部を加工して使用している。2工程のものは、半割したもの(88-12)、四分割したもの(88-11)、分割した材の裏面を除いたもの(74-6、88-13)とさらに割り取られているものがあり、やの工程から連続する加工方法と位置付けられそうである。これらはの工程で作られた薄板状・箸状木製品に加工されたと考えられる。他遺跡でもアスナロ材は木製品に利用されている。三内丸山遺跡出土の篋状木製品もアスナロ材で(中村2002)、形状は若干異なるものの、最大幅は5mm~3cm程度であり、本遺跡の薄板状・箸状木製品に類似するものである。青森平野周辺の縄文時代前期遺跡における針葉樹の木材加工方法の一つである可能性がある。

### 第3節 遺跡のまとめ

#### 1 分析結果のまとめと今後の課題

花粉分析 表土から第層では多くないが、これより下部の層ではクリが最も優占する。このほかコナラ属コナラ亜属が試料9・10で多く出現し、クルミ属もやや多い。

植物珪酸体分析 各層ともクマザサ属の残存が多い。

珪藻分析 沢の本流では各層とも河川の中~下流域に生息する指標種群や流水性種の出現率が高い。支流の下部堆積層は殻数密度が低く、ほとんど生息していない。上部は陸生珪藻が多く、ほとんど水が流れる環境ではなかったと思われる。

昆虫同定 C層からサクラコガネ属の一種、ハナムグリが最も多く確認された。これにオサムシ科、アオオサムシなどが他の昆虫化石よりもやや多く確認されている。食植性のサクラコガネ属は「周辺の植生が人為度の高い二次林で占められていたことを示す。」、ハナムグリは「森林性昆虫」であり、オサムシ科、アオオサムシは「食屍性」であることを示す。これらのことから、二次林・森林性の両者を併せ持った環境であった可能性がある(森2002)。

放射性炭素年代測定 三内丸山遺跡での測定結果から、円筒下層式土器の測定値の幅は、5,100~4,600炭素年前(yrBP)とされており(辻2002)、本遺跡の年代も試料3(縄文時代後期)を除き、すべてこの範疇に含まれる。試料別にみると、第1号木組遺構は4940±40炭素年前(yrBP)から4650±40炭素年前(yrBP)と年代幅が大きい。貯水部の南北枠はほぼ同時期の値を示しているが、堰・排水・土留部分は大きな差がある。分析結果の誤差があるいは、第1号木組遺構の使用期間が長く、最終的な形態なのかは疑問が残る。住居跡は、1・11・13・23号住居跡から採取された炭化材・炭化種子を使っている。炭素年代は23 13 11 1号住居跡の順に新しくなり、竪穴住居跡のまとめで大きく分類した~期の中に包括されるものである。上流側の杭跡2・板敷遺構の炭素年代は近接している。三内丸山遺跡では円筒下層c式に相当する炭素年代試料が得られておらず、この型式の

炭素年代の対比は出来なかったが、第11・13号住居跡の炭素年代がこれに当てはまる可能性もあると思われる。

塗膜分析 59-1 は砂を混和した漆が1～2層塗布されている。このほか、赤く塗布された木胎漆器の赤漆はベンガラを含むものである。黒漆に含まれる黒色物質は不明である。

黒曜石産地同定 試料すべてが高い確率で遺跡の西側に位置する鷹森山・大釈迦・戸門産地である。

石器の使用痕分析 篋状石器と搔器には被加工物に対する刃部の当て方が異なる。素刃の篋状石器は木などの植物に対して使用されたと考えられる。とくに木製品の仕上げには小さく鋭利な工具が必要であり、これらの石器が使用された可能性がある。

土器の成分分析(松本2004)の文献と比較すると、本遺跡の土器胎土は円筒下層b・d式土器は津軽東部採取の土(遺跡周辺の土)に近い値、円筒下層b式は津軽西部採取の土に近い値を示す。また、下層b～d式にかけて白色系粘土を胎土として用いており、三内丸山遺跡で白色系粘土の利用期間内(円筒下層a式～大木10式併行)に収まるものと考えられる。

遺構内土壌分析 土器埋設遺構のまとめにあり。

大型植物化石群 A～C層をとおして、クリ果皮片が最も多い出土量である。オニグルミ・ミズナラ等のコナラ節などの食用、ヒョウタン・ウリ・ウルシ属・キハダなどの有用植物の種子が出土している。

樹種 第4章第2節3(2)に樹種同定のまとめあり。

## 2 集落のまとめ

縄文時代早期 遺構は確認されておらず、土器片が沢を中心に出土しており、施文文様から縄文時代早期中葉に相当する。沖館川を挟んだ西側の熊沢遺跡でも同じ時期の土器片が出土しており、遺跡周辺でこの時代の人々が活動していた。

縄文時代前期 本遺跡の主体をなす時期である。前期中葉～末にかけて集落が営まれたと考えられる。沖館川流域には縄文時代前期の遺跡が立地しており、これらの遺跡と本遺跡が沖館川を介して集落間の交流をもった可能性がある。

前期中葉：沢の近辺で遺物が出土する。遺構は確認されていない。沖館川西岸の熊沢遺跡では竪穴住居跡が構築され、沖館川に面した斜面に捨て場が形成され、三内丸山遺跡では集落が形成され始める。

前期中葉～後葉：沢を挟んだ南北斜面で小型の竪穴住居跡が構築される。土器埋設遺構は北側斜面のやや南側に埋設される。沢では上流側に導水状施設を設け、その下流側に木組遺構が構築され、堰部で水を遮断し、貯水部で水を貯める機能が想定される。このさらに下流側には樹皮範囲が広がり、木組遺構と樹皮範囲の間には対岸を行き来すると思われる木道がある。下流側・南側斜面住居跡周辺では土器が捨てられる。熊沢遺跡でも集落が営まれ、第2号遺物集中ブロックが形成される。

前期後葉：沢を挟んだ南北斜面に中型の竪穴住居跡が構築される。土器埋設遺構は、南側斜面の西寄りと頂部に埋設され、土坑墓も同じく南側斜面頂部・東寄りに構築される。遺物も沢下流及び南側斜面・頂部周辺に捨てられている。沢の上流側を作業場・廃棄場に使っていた可能性があり、クリ果皮片

集中範囲が検出される。

前期後葉～末：北側斜面に竪穴住居跡が多く作られ、住居跡を拡張して大型住居跡を構築している。集落範囲は北側斜面頂部に広がり、貯蔵穴の可能性のある土坑はこの時期に構築された可能性がある。沢や南側斜面の住居跡のあった場所に遺物が捨てられる。また、土器埋設遺構の集中範囲となる。

前期の生業活動：本遺跡から出土した遺物から、1年の中で行われる作業を下表にした。とくに沢から出土した大型植物遺体からクリ・オニグルミ・コナラ節などを採取して食料としたと思われる。また、本遺跡からは漆器が出土し、ウルシ種子、ウルシ材も利用されていることから、遺跡周辺でウルシ採取が行われた可能性は高いと思われる。樹皮を剥いで丸めたものも出土しており、樹皮剥ぎが行われていたと思われる。また、沢から出土した多量の木質遺物から、伐採が行われていた可能性は高い。ただ、伐採季節が不明であったため、鳥浜貝塚例を参考にしている。

落葉広葉樹地帯の民俗例からみた本遺跡での生業活動の想定（年単位）

		春		梅雨		夏		秋			
1月	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
漆採取											
木の实採取											
樹皮剥ぎ											
木の伐採(鳥浜貝塚の例による)											

縄文時代中期 中期初頭～前葉は数点の遺物が南側頂部、沢近辺に散在している。遺構は検出されなかった。中期中葉から後葉にかけては北側斜面に円筒上層e式期の住居跡・土坑が構築される。遺構は存在するものの、遺物量は多くない。むしろ、北側斜面から沢にかけて円筒上層c・d式土器の出土量が多く、前期の竪穴住居跡の埋まりきらない凹地に遺物を廃棄したと思われる。この凹地は発掘調査の段階でも確認されている。後葉～末は沢から南側斜面で遺物が散在している。

縄文時代後期 前葉は遺物が散在しており、北側斜面住居跡堆積土内、沢、頂部捨て場から出土している。中葉は焼失家屋が1軒検出されている。中葉～後葉は土坑が1基検出されている。

縄文時代晩期 南側斜面・沢で土器片が2点検出されている。

平安時代 北側斜面の東寄り、白頭山降下火山灰以前に構築された土坑が4基、沢から出土した土器片が1点出土している。

最後になりましたが、4年間に及ぶ発掘調査並びに報告書作成に関わりましたすべての方々から感謝申し上げます。 (坂本)

引用・参考文献

青森県教育庁文化課1996『三内丸山遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第205集 青森県教育委員会  
 青森県教育庁文化課1997『三内丸山遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第230集 青森県教育委員会  
 青森県教育庁文化課1998『三内丸山遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第249集 青森県教育委員会

- 青森県埋蔵文化財調査センター 2003『畑内遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第345集 青森県教育委員会
- 青森県埋蔵文化財調査センター 2003『上野尻遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第353集 青森県教育委員会
- 青森県教育委員会 1978『熊沢遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第38集 青森県教育委員会
- 青森県教育委員会 1980『大平遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第52集 青森県教育委員会
- 阿部千春2000「第 章第1節」『青森県史 別編 三内丸山遺跡』青森県史友の会
- 網谷克彦ほか 1996『縄文時代木製遺物・木工技術の基礎的研究 平成7年度科学研究費補助金（一般研究C）研究成果報告書』
- 池谷勝典2003「磨石・敲石・石皿の実験考古学的研究」『アルカ 研究論集第1号』埋蔵文化財研究業務 株式会社アルカ
- 石狩市教育委員会2003「2003年度 石狩紅葉山49号遺跡低湿地部発掘調査概要報告」CD-ROM版
- 江原 英1998『寺野東遺跡（縄文時代谷部編）』栃木県埋蔵文化財調査報告書第208集
- 大川 清・鈴木公雄・工楽善通編1996『日本土器事典』雄山閣出版株式会社
- 大田区立郷土博物館編2001『ものづくり考古学 - 原始・古代の人々の知恵と工夫』東京美術
- 小笠原雅行2000「第 章第2節第1項」『青森県史 別編 三内丸山遺跡』青森県史友の会
- 小野貴之ほか2000『熊沢遺跡発掘調査報告書』青森市埋蔵文化財調査報告書第48集 青森市教育委員会
- 小野貴之ほか2001～2003『稲山遺跡発掘調査報告書 ～ 』青森市教育委員会
- 小矢部市教育委員会1998『桜町遺跡おやべ展～縄文の森に吹く風を感じて～』小矢部市・小矢部市観光協会
- 河南武春1993「吉野の漆かき - 奈良県吉野郡西吉野村賀名生を中心として」『日本歴史民俗論集7 海・川・山の生産と信仰』吉川弘文館
- 柏崎市教育委員会1985『刈羽大平・小丸山』柏崎市埋蔵文化財調査報告書第5 柏崎市教育委員会
- 鹿沼市教育委員会2002『明神前遺跡 - 発掘調査概要報告書』鹿沼市教育委員会
- 工藤大他『木造町田小屋野貝塚 - 岩木川流域の縄文前期の貝塚発掘調査報告書 - 』青森県立郷土館調査報告第35集考古 - 10
- (財)長野県埋蔵文化財調査センター1994『県道中野豊野線バイパス志賀中野有料道路 - 長野県中野市内 - 栗林遺跡・七瀬遺跡』(財)長野県埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書 19
- 櫻田 隆ほか1999『池内遺跡 遺物・資料編』秋田県文化財調査報告書第282集 秋田県教育委員会
- 佐久間惇一1985「三面のヤマノイモ」『技術と民俗（上）』日本民俗文化大系（普及版）第13巻 小学館
- 佐々木由香2000「縄文時代の「水場遺構」に関する基礎的研究」『古代』第108号 早稲田大学考古学会
- 佐々木由香・能城修一2004「東京都下宅部遺跡の水場遺構材から復元する縄文時代後期の森林資源利用」『植生史研究』第12巻第1号 刊行予定
- 静岡市教育委員会1990『蛭田遺跡』静岡市埋蔵文化財調査報告23 静岡市教育委員会
- 柴田正蔵1999「雪国の保存食」『ブナ林の民俗』高志書院
- 末木 健1999「埋甕」『縄文時代 第10号 第3分冊』縄文時代研究会
- 滝沢規朗ほか2002『元屋敷遺跡（上段）奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書 』朝日村文化財報告書第22集 朝日村教育委員会
- 種市幸生・田口 尚ほか『忍路土場遺跡・忍路5遺跡』北海道埋蔵文化財調査センター調査報告書第53集
- 茅野嘉雄ほか2001『畑内遺跡』青森県埋蔵文化財調査センター第308集 青森県教育委員会
- 辻誠一郎2000「第 章第4節」『青森県史 別編 三内丸山遺跡』青森県史友の会
- 出口晶子2001『丸木舟』ものと人間の文化史98 法政大学出版局
- 戸田哲也ほか2003『神奈川県小田原市 羽根尾貝塚』玉川文化財研究所

岩渡小谷4遺跡

- 戸原和人2000「話題の遺跡と出土遺物 京都府網野町松ヶ崎遺跡」文化庁編『発掘された日本列島2000 新発見考古速報』朝日新聞社
- 鳥浜貝塚研究グループ1987「図版312」『鳥浜貝塚 - 1980～1985年度のまとめ』
- 中口 裕1982「 縄文農耕のあけぼの」『実験考古学』雄山閣
- 中村美杉2000「第 3章第2節3」『青森県史 別編 三内丸山遺跡』青森県史友の会
- 名久井文明1999『樹皮の文化史』吉川弘文館
- 奈良国立文化財研究所1985『木器集成図録 近畿古代編』
- 成澤潔水1982『木材 - 生きている資源 - 』パワー社
- 能城修一ほか1996「鳥浜貝塚から出土した木製品の樹種」『鳥浜貝塚研究1』福井県立若狭歴史民俗資料館
- 橋口尚武ほか1999『海を渡った縄文人 縄文時代の交流と交易』小学館
- 東村山市遺跡調査会2000『下宅部遺跡 2000年度発掘調査概報』東村山市遺跡調査会下宅部遺跡調査団
- 東村山市遺跡調査会2001『下宅部遺跡 2001年度発掘調査概報』東村山市遺跡調査会下宅部遺跡調査団
- 藤塚悦司1986「武蔵の掘り棒」『技術と民俗(下)』日本民俗文化大系(普及版)第14巻 小学館
- 藤巻正信1993「土掘具(一)」『新潟考古学談話会会報』第12号 新潟考古学談話会
- 北海道開拓記念館1998『第47回特別展 うるし文化 - 漆器が語る北海道の歴史 - 』北海道開拓記念館・開拓の村文化振興会
- 前田義人ほか2001『長野小西田遺跡2』北九州市埋蔵文化財調査報告書第262集 (財)北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室
- 松本建速2003「三内丸山遺跡粘土採掘坑粘土と遺跡出土土器の成分分析」『特別史跡三内丸山遺跡 年報6』青森県教育庁文化財保護課三内丸山遺跡対策室
- 松本建速2004「三内丸山遺跡出土土器胎土分析成分の時代的变化に関する研究 - 円筒下層 a 式から大木10式まで - 」『平成15年度 三内丸山遺跡報告会 予稿集』青森県教育庁文化財保護課三内丸山遺跡対策室
- 三浦貞栄治1983「 . 衣 食 住」『小田野沢の民俗』調査報告書』青森県郷土館調査報告第14集・民俗 - 7
- 南北海道考古学情報交換会第20回記念シンポジウム実行委員会1999『北日本における縄文時代の墓制 資料集』
- 村上由美子2002「木を割るということ」『往還する考古学』近江貝塚研究会
- 村上義直ほか2003『平成14年度 縄文講座 縄文人の台所・水さらし場遺構を考える - 縄文人は水とどう関わってきたか - 』資料
- 森 勇一2000「第 3章第2節」『青森県史 別編 三内丸山遺跡』青森県史友の会
- 山本暉久2003「墓壇内に倒置された土器」『神奈川考古 第39号』神奈川考古同人会
- 山田昌久2002「材成長から見る縄文・弥生時代の人類=森林関係」『人類誌集報2002』東京都立大学考古学報告8
- 山田昌久1993「日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成 - 用材から見た人間・植物関係史」『植生史研究』特別第1号 植生史研究会
- 渡邊 晶2000「縄文時代の建築用主要道具について - 木の建築をつくる技術と道具の歴史に関する調査報告 その2 - 」
- (財)竹中大工道具館研究紀要 第12号 財団法人 竹中大工道具館
- 渡辺 誠2002「水さらし場遺構研究の現状と課題 - 明神前遺跡の成果に基づいて」『明神前遺跡 - 発掘調査概要報告書』鹿沼市教育委員会

遺構出土土器

図版番号	出土地点	出土層位	部位	口唇・口縁	胴部	口径(mm)	器高(mm)	底径(mm)	分類	備考
図27-1	AN56P2880	C	口～胴上	波状、単(LR)溝回、 隆帯 RLR側圧	単(L)縦 回?	(288)	(136)	-	3	口端丸み
図27-2	AN56	C	口	波状、単(LR)溝回、 隆帯 RLR側圧	-	-	-	-	3	

二次加工 - 割り取り後の加工を指す。割裂痕の残存しているものは“二次加工なし”にしている。  
樹皮の推定長は実測図をマップメータ - で計測した。

遺構出土木質遺物

図版番号	遺物番号	No	樹種	層位	グリッド	遺構構成部位	製品の種類、 木取り等	形態・技法	全長(mm) 幅 厚さ	備考
図28-1	H196 C-1712	3011	コナラ 属コナ ラ節	C層	A N53	1木組 掘り棒	芯去削出	ヘラ部分は断面扁平で、柄との境界の両側縁に2箇所ずつ刻みを持つ。柄の断面は 円形である。下部は大きく破損し、下部5cmほどがヘラ状に扁平に加工される。 おそらく、下部破損後にヘラ部分を作成している。	704 49 31	A M S 試料 IWATARI13
図28-2	C-1270	3612	コナラ 属コナ ラ節	C層	A N56	1木組 貯水部 右岸側	掘り棒	芯去削出	754 57 34	炭化あり
図28-3	C-1697	3611	コナラ 属コナ ラ節	C層	A N56	1木組 貯水部 右岸側	掘り棒	芯去削出	915 580 38	
図29-1	C-814	3613	コナラ 属コナ ラ節	B層	A N56	1木組 貯水部 上位	掘り棒	芯去削出	1262 55 31	
図29-2	H60 C-793	3343	ケンボ ナシ属	B層	A N55	1木組 貯水部 東側	掘り棒転用 杭	芯去削出	1032 16 34	
図29-3	H175 C-834	3028	コナラ 属コナ ラ節	B層	A N55	1木組 導水部	掘り棒未製 品副材	12分割	1219 73 50	
図29-4	H196 C-1681	3008	コナラ 属コナ ラ節	C層	A N55	1木組 導水部	掘り棒未製 品副材	8分割	1378 75 55	
図30-1	H182 C-1850	3318	コナラ 属コナ ラ節	C層	A N56	1木組 堰部	掘り棒転用 杭	芯去削出	845 50 39	
図30-2	H182 C-1672	3317	コナラ 属コナ ラ節	C層	A N56	1木組 堰部	掘り棒転用 杭	芯去削出	733 41 47	樹皮付き
図30-3	H37 C-1705	3390	アスノ コ	C層	A N55	1木組 掘り棒	芯去削出	622 25 23		先端焦痕
図30-4	H196 C-1843	3013	オニグ ルミ	A層	A N53	1木組 貯水部 南側	掘り棒	芯去削出	437 37 37	
図31-1	C-1453- 1683	3602 3385	ケンボ ナシ属	C層	A N56	1木組 貯水部 両側	掘り棒 & 用 途不明木製 品(柄付)	芯去削出	(1023) 63 30	
図31-2	H35 C-792	3386	ケンボ ナシ属	B層	A N55	1木組 貯水部 南側	掘り棒転用 杭	芯去削出	700 49 23	
図31-3	C-1787	3601	コナラ 属コナ ラ節	C層	A N53	1木組 堰杭	掘り棒	芯去削出	691 73 35	樹皮巻き?
図32-1	C-1334	3604	ケヤキ	C層	A N56	1木組 貯水部 内	石斧柄未製 品	芯持丸木 (段木)	653 282 72	
図32-2	C-1720	3605	ケヤキ	C層	A N56	1木組 貯水部 脇	石斧柄未製 品	芯持丸木 (段木)	607 210 62	
図32-3	H218 C-1729	3070	ニレ属	C層	A N56	1木組	石斧柄未製 品	芯持丸木 (段木)	257 238 94	
図33-1	H192 C-1270	3324	クリ	C層	A N56	1木組	板目材	板目	678 60 60	
図33-2	H43 C-1852	3337	オニグ ルミ	C層	A N56	1木組 貯水部 内	杭(角材)	芯去角	612 75 47	
図33-3	H180 C-1803	3034	オニグ ルミ	C層	A N56	1木組 堰部	杭(板目材)	板目	767 71 37	
図34-1	H181 C-1650	3020	クリ	C層	A N56	1木組 堰部排	杭(角材)	16分割	1081 62 55	A M S 試料 IWATARI 6
図34-2	H181 C-1664	3017	クリ	C層	A N56	1木組 水部 杭	杭(割材)	16分割	894 53 36	
図34-3	H180 C-1106	3032	ケンボ ナシ属	C層	A N56	1木組 貯水部 外	杭(割材)	芯去角	732 67 52	
図34-4	H181 C-1670	3018	コナラ 属コナ ラ節	C層	A N56	1木組 堰部	杭(角材)	芯去角	1143 67 64	
図34-5	H182 C-1668	3316	クリ	C層	A N56	1木組 堰部	杭(板目材)	板目	1027 62 62	
図34-6	H60 C-1671	3345	キハダ	C層	A N56	1木組 堰部	杭(割材)	16分割削出	100 48 36	



岩渡小谷(4)遺跡

	遺物番号	No	樹種	層位	グリッド	遺構構成部位	製品の種類、木取り等		形態・技法	全長(mm)幅厚さ	備考
図35-1	H183 C-1666	3310	キハダ	C層	A N56	1木組み排水部	杭(板目材)	板目	表裏面は平滑で二次加工があったと思われる。下端は丸味を帯びて斜めに削る。上部は両側縁を削り上端を尖らせる。上端は敲打によるツブレあり。	390 85 31	
図35-2	H177 C-1663	3014	コナラ 属コナラ節	C層	A N56	1木組み土留部	杭(板目材)	板目	分割材の木表・木裏を削って平坦面を作出している。表面中央から下部にかけての左側縁は大きく削り落とされている。下端付近では両面・両側縁も削られ薄くなっている。	724 131 41	
図35-3	H43 C-1665	3336	クリ	C層	A N56	1木組み土留部	杭(板目材)	板目	下部に敲打による歪みあり。下部を両面とも薄く削り出す。	602 78 46	
図35-4	H191 C-1630-2	3049	クリ	C層	A N56	1木組み土留部	杭(板目材)	板目	樹皮に近い部分の分割材を使用している。表面と両側縁は削られている。裏面は削り残しの高まりを削り落とされている。上端部には上部からの削り痕が残存する。上端部は凹凸がある。下部から下端にかけて両側縁を斜めに削っている。	643 155 55	
図35-5	H181 C-1684	3019	x	C層	A N56	1木組み土留部	杭(柱目材)	24分割	分割材で、敲打による歪みが大きい。上部は斜めに削る。下端は丸味を帯びて削られている。	780 149 59	
図36-1	H182 C-1649	3320	コナラ 属コナラ節	C層	A N56	1木組み土留部	杭(割材)	分割	削り取ったあと両面を削って平坦に加工している。両側縁は削り取り時の状態だが、上部右側縁には削りの痕跡が見られる。中央付近で曲がっており、部材の重みや水圧のためと考えられる。下端は斜めに丁寧に削られている。	937 65 68	
図36-2	H15 C-1612	3377	クリ	C層	A N56	1木組み土留部上位	杭状先端加工材(半割材)	芯持半割	丸木の裏面を削り取り、中央部分に高まりが残る。右側縁下部から下端にかけて削り落とした後、炭化。	448 100 70	全面炭化
図36-3	H38 C-1699	3137	クリ	C層	A N55	1木組	杭(角材)	板目	全体に二次加工あり。裏面に削り取り時の稜線残存する。両側縁はほぼ真っ直ぐに加工される。	488 47 31	
図36-4	H45 C-1793	3329	キハダ	C層	A N56	1木組み土留部	柱目板	柱目	表面上部を中心に削り痕が見られ、敲打により材が歪んでいる。下部左右側縁は多くが破損しているものの、幅2-3cmの抉りが入り、下端まで続くと思われる。上端にはツブレたような痕跡も見られるが、はっきりしなかった。	936 209 14	模痕?
図36-5	H45 C-1793	3330	ウルシ	C層	A N56	1木組み土留部	柱目板	柱目	削り取りにより両面に稜線が残存する。両側縁は真っ直ぐに加工する。両端は斜めに切り落とされ、削りによる凹凸が残る。	556 195 80	
図37-1	H217 C-1354	3334	ウルシ	C層	A N55	1木組み土留部東側	板目板	板目	半割材を削り取り、芯部分を除去。両面・両側縁に削りの加工がほとんど見られない。両端とその付近には削り痕が残存する。	642 177 69	
図37-2	H177 C-1431	3015	クリ	C層	A N56	1木組み土留部右岸側	用途不明加工材	芯持丸木	丸木を4面削り取り、断面長方形に加工する。裏面の一部を除いてほぼ全面炭化しているが、器面が平滑であることから、二次加工があったと思われる。両端は丸味を帯びて削られる。表面左側縁上部は両面から浅い削りが入る。	792 215 122	
図37-3	H37 C-1799	3389	キハダ	C層	A N56	1木組	柱目板	柱目	両面に削り取りによる稜線が残る。表面右側縁が薄く成形される。表面左側縁は真っ直ぐに加工する。両端は斜めに切り落とされ、平滑に仕上げられる。上部にヒビが入り、下端にツブレの痕跡が見られる。	496 205 75	
図37-4	H2 C-1613	3353	クリ	C層	A N56	1木組み土留部	板目板	板目	半割材の木表側と両側縁を削り取り、全面二次加工あり。裏面には削り取り痕と思われる木目と直交する光沢痕あり。裏面にツブレが見られるが部材のあたりが模痕は不明。両端は切断時の痕跡削り平滑にしている。	800 225 114	炭化あり。
図38-1	H13 C-1624	3375	キハダ	C層	A N56	1木組み土留部	板目板	板目	表裏面に削り取り時の稜線残存する。両側縁は真っ直ぐに加工される。上部は削りの痕跡が認められ、裏面下部にはヒビが見られる。	494 218 61	
図38-2	H216 C-1625	3331	クリ	C層	A N56	1木組	板目板	板目	分割材を削り取り板材に加工している。削り取り時の稜線残存するが、両面とも全面平滑な仕上げである。両端には削りの痕跡が残る。とくに下部は薄く削られている。下部から下端にかけて表面左側縁を斜めに削っている。	621 248 90	
図38-3	H193 C-1618	3085	クリ	C層	A N56	1木組み土留部	板目板	板目	表面には、削り落とした時の稜線が見られる。両面とも端部から中央方向に向かって薄く削る。とくに裏面下部は器厚を薄くしている。また、表面左側縁は真っ直ぐに加工され器面も平坦であるが、下部右側縁は下端に向かって斜めに削っている。上部は裏面上端から大きく削りが入る。裏面上部は埋部の部材の圧力でつぶれている。	500 185 64	
図38-4	H44 C-1619	3332	クリ	C層	A N56	1木組み土留部	板目板	板目	両面とも端部から中央方向に向かって薄く削る。とくに裏面下部は器厚を薄くしている。表面上部は斜めに削り落とそうとして破損したような痕跡が見られる。表面右側縁真っ直ぐに加工され器面も平坦であるが、下部左側縁は下端に向かって斜めに削られている。	505 176 66	
図38-5	H202 C-923	3089	オニグルミ	C層	A N55	1木組み土留部左側	板目板	板目	裏面に削り取り時の稜線残存する。表面はやや平滑で調整した痕跡あり。両側縁は削り取り時の形状で、上部両側縁に削りによる抉りの加工あり。上端は平らに削られる。下部から下端にかけて破損している。	1064 368 92	
図39-1	H198-2-2 C-1662	3094	クリ	C層	A N56	1木組み土留部	板目板	板目	削り取り時の稜線残存する。全面二次加工あり。両端とも削り痕あり。	698 273 98	
図39-2	H198-2-1 C-1661	3093	クリ	C層	A N56	1木組み土留部	板目板	板目	裏面には削り取り時の稜線残存する。表面は右側縁が斜めに向かってやや傾斜するが、ほぼ平滑である。両端に削り落とした痕跡あり。	710 260 62	A M S 試料 IWATAR10
図39-3	H183 C-1667	3308	クリ	C層	A N56	1木組み排水部	板目板	板目	分割材を削り取って板状に加工。両面とも平滑である。裏面には削り取り時の稜線がわずかに残存する。両端に削りの痕跡あり。	656 262 79	A M S 試料 IWATAR17
図39-4	H193 C-1375	3084	クリ	C層	A N55	1木組み排水部	板目板	板目	樹皮に近い部分を板状に削り取る。裏面の分枝部分を削り取っている。表面下部右側縁の円形は杭の打ち込み部分にあたる。両端は破損した痕跡はみられないが詳細は不明である。	698 275 63	
図40-1	H138-3 C-1846	3487	x	A層	A N56	1木組み土留部	杭(割材)	分割	削り取り時の稜線残存する。表面下部は左側に削り痕あり。上端は破損している。	160 55 25	
図40-2	H24 C-1849	3380	キハダ	C層	A N56	1木組み土留部	板目板	板目	割材の表面右側縁と裏面を薄く削る。形状は右側縁側を斜めに削り下端を尖らせている。	359 120 21	
図40-3	H8 C-1840	3365	クリ	C層	A N55	1木組み土留部東側	板目板	板目	表面左側縁上部と下部は欠損する。表面は平坦にし、左側縁は真っ直ぐに加工されている。右側縁付近は薄く削りややカーブしている。裏面は整形時の削り取りで凹凸が見られる。	317 120 32	
図40-4	H222-2 C-1613	3511	クリ	C層	A N56	1木組み土留部	用途不明木製品(舟形)	板目	上端は切り落とした痕跡あり。ほとんど二次加工なし。表面には削り取り時の稜線残存する。表面は上端に近い部分以外平坦に削り、上部は丸味を残す。両側縁は内部と同様真っ直ぐに加工される。裏面はほぼ平坦で上部は端部に向かって斜めに削られる。	291/289 135/137 35/40	
図41-1	H186 C-840	3096	クリ	B層	A N55	1木組み排水部	板目板	板目	分割材の木裏を削り取り、板材に加工したもので、裏面に稜線残存する。表裏面に削り取り後の調整は見られないが、表面右側縁の中央から下部にかけて浅く削り出している。上端から右側縁にかけて丸味を帯びて削り出されている。下端には切断時の削りが入る。	1107 226 85	
図41-2	H188 C-833	3046	クリ	B層	A N55	1木組み排水部	板目板	板目	削り取りにより板状に加工。下端は丁寧な削りで曲線を作り出している。裏面の樹芯部分は高まりとして残存している。	735 156 33	
図41-3	H197-1 C-1815	3097	キハダ	C層	A N56	1木組み土留部	板目板	板目	遺存状態は非常に悪く、取り上げた時点で細かく破損してしまっていた。樹皮の部分が多いが辺材部も若干残存する。厚みは最大4cm程度である。	765 305	スケッチのみ
図41-4	H6 C-1165	3360	オニグルミ	C層	A N55	1木組み排水部	板目板	板目	表面右側縁が厚みを持ち、左側が薄い。表面は平滑に加工されている。裏面は削り取り時の稜線残存するがほぼ平坦である。下端は裏面から削り痕が残る。	624 196 32	
図41-5	H189 C-1827	3347	ニレ属	C層	A N56	1木組み土留部	板目板	板目	半割(した後)表面のほぼ長軸中心線を境に削り取る。上面は、幅約3cmの工具痕の起伏があるものを平坦に仕上げている。表面上部右側縁は弧状に削られ、浅く窪んでいる。裏面は一部樹芯残存。	787 242 103	
図42-1	H19 C-1472	3122	コナラ 属コナラ節	C層	A N55	1木組み土留部右岸側	割材	分割	遺存状態悪い。表面上下部は平坦になるが、中央部は残存する。裏面はほぼ平坦である。	587 137 113	模痕?

	遺物番号	No	樹種	層位	グリッド	遺構構成部位	製品の種類、木取り等		形態・技法	全長(mm) 幅 厚さ	備考
図42-2	H18 C-1853	3126	キハダ	C層	A N56	1本組	杭(丸木)	芯持丸木	上部が破損している。下端は削りにより丸味を帯びている。	161 95 81	
図42-3	H1 C-1732	3351	ニレ属	C層	A N56	1本組 貯水部 右岸側	半割材	芯持半割	遺存状態悪い。表面は二次加工あり、裏面は不明。表面下部に削り痕あり。	334 96 67	
図42-4	H185 C-815	3044	クリ	B層	A N56	1本組 貯水部 上位	板目材	板目	割材片で、表面下部・表面左側縁に大きな剥落あり。上下端は破損している。二次加工なし。	688 65 37	
図42-5	H185 C-914	3043	ケンボ ナシ属	C層	A N56	1本組 貯水部 右岸側	割材	12分割	分割材の下部裏面を削り断面台形状にしている。右側縁中央には分枝部分が見られる。	869 75 37	
図43-1	H48 C-1628	3340	クリ	C層	A N56	1本組 排水部	杭(割材)	分割	両面・左側縁に裂痕あり。表面左側縁付近に削りによる削り出しが入る。右側縁は真っ直ぐに加工する。右側縁から下部にかけて斜めに削られ、下端を尖らす。上端には切り落とし削り痕が残る。	292 52 31	先端炭化
図43-2	H150-2 C-1616	3285	クリ	C層	A N56	1本組 貯水部 内	用途不明加工材(桶状)	板目	表面を削り取り平坦面を作り出す。裏面は芯部分を削り出す。両側縁下部を斜めに削り出し、下端は尖っている。全体に丁寧な二次加工である。	263 72 34	先端炭化
図43-3	H138-3 C-1788	3486	クリ	C層	A N56	1本組	杭状先端加工材(割材)	分割	全体に二次加工あり。断面三角形で、裏面の中央から下端の稜線上に削り入る。	227 25 29	側面炭化
図43-4	H135-6 C-1156	3265	ケンボ ナシ属	C層	A N55	1本組	割材	分割	表面下部から下端にかけて削りをいれて斜めに加工している。裏面上部にも削り痕あり。	247 72 58	
図43-5	H163-7 C-1708	3542	クリ	C層	A N55	1本組	割材	16分割	両端は欠損している。二次加工なし。	115 25 17	
図43-6	H183 壘	3311	クリ	C層	A N56	1本組 壘部	杭(丸木)	芯持丸木	表面裂痕あり。下端丸味を帯びる。上端破損、裏面一部欠損。	156 35 42	
図43-7	H147-5 C-1858	3181	ウルシ	C層	A N55	1本組 立ち杭	杭(柱目板)	柱目	上面全体に敲打によるツブレが見られる。また、裏面には敲打による歪みが見られる。上部やや傾いている。	205 69 24	
図43-8	H194 C-1439	3051	ウルシ	C層	A N55	1本組	板目材	板目	薄く削り取った板材で、表面の左右側とも斜めになり、中央は削り取られてほぼ平坦である。裏面は平坦で、上部に削り取り時の稜線残存する。	796 136 40	
図43-9	H150-4 C-1796	3286	クリ	C層	A N55	1本組	柱目板	柱目	同一個体と思われるが接合しない。両面を削り出して薄く仕上げている。裏面にごく浅い削り痕が見られる。上部は土圧により変形している。	(105-180- 76) 63 11	
図43-10	H162-5 C-1621	3546	クリ	C層	A N56	1本組	用途不明加工材(桶状)	板目	木裏の内部を削り取り、両側縁側に緩やかに立ち上がる。両側縁は真っ直ぐに加工される。裏面は中央の稜線を残すように裏面左側のみ加工されている。	359 38 16	
図44-1	H200 C-1100	3100	クリ	C層	A N56	1本組 貯水部 左岸側	丸木材	芯持丸木	股木の上部の高さをそろえ、下部を尖らせた形状。一部面取りをし、平坦面を作成する。	2332 438 190	A M S 試料 IWATARI 9
図44-2	H215 C-1333	3346	クリ	C層	A N56	1本組 貯水部 右岸側	半割材	芯持半割	上部がやや曲つて成長した丸木の下部の一部を削り取り平坦面を作り出す。上部は樹芯を除去して半割する。裏面中央付近に削り出した浅いくぼみが見られる。上端は切断時の削り痕が残り、芯が残存する。	2218 308 217	A M S 試料 IWATARI 8
図45-1	H197-2 C-1806	3092	ニレ属	C層	A N56	1本組 底板	板目板	板目	表面左側縁に削り取り痕が2カ所見られる。裏面中央付近に削りが入る。	840 253 100	
図45-2	H201 C-1109	3086	クリ	C層	A N56	1本組 貯水部 右岸側	丸木材	芯持丸木	丸木を5～6面取りして断面五角形状に仕上げている。上部右側縁は大きく破損している。下部は右側が大きく欠損している。一側縁付近に長さ20cm、幅3cmほどの弧状に加工されている。同じ側縁の下端及び裏面の側縁に削りの加工が見られるが形状ははっきりしなかった。	1704 190 150	部材転用? 全面削り
図45-3	H184 C-808	3083	コナラ 属コナラ節	B層	A N56	1本組 貯水部 右岸側	丸木材	芯持丸木	芯を残して幅8cm程の平坦面を両面に作り出す。二次加工なし。両側縁はやや丸味を帯びている。下端はほぼ真っ直ぐに削られ、上部は股木になっている。股木は片方が欠損しているが、いずれも断面長方形に加工されており、何らかの部材であった可能性が高い。	1947 514 20	芯残して加工
図46-1	H191 C-1630-1	3048	クリ	C層	A N56	1本組 壘部	半割材	芯持半割	表面上半部を削り剥がしている。これ以外の加工は見られない。	677 117 79	
図46-2	H192 C-832	3328	カエデ 属	B層	A N55	1本組 排水部	杭状先端加工材(丸木)	芯持丸木	丸木材を伐採したもので、裏面上部に削りを入れ平坦にしている。両端は芯部分を残して切り離されている。	968 105 70	樹皮付き
図46-3	H182 C-1475	3313	カエデ 属	C層	A N55	1本組 貯水部 東側	杭状先端加工材(丸木)	芯持丸木	丸木材を伐採したもので、上端は先が尖り、下端は平坦に作り出される。	969 84 99	樹皮付き
図46-4	H180 C-1331	3038	ハンノ キ属ハン ノキ節	C層	A N56	1本組 貯水部 内	杭(丸木)	芯持丸木	下部は二面に削りが入る。下端には両面から斜めに削られたあとがあり、伐採時の痕跡の可能性が高い。	561 34 35	樹皮付き
図46-5	H182 C-1474	3312	キハダ	C層	A N55	1本組 貯水部 右岸側	板目材	板目	半割材で、表面・左側縁を真っ直ぐに加工する。裏面は削り取り時の状態である。左側縁から下端にかけて丸味を帯びて削られている。裏面上部はさらに削り取られている可能性がある。	1034 136 79	
図46-6	H31 C-1847	3128	ミズキ	C層	A N56	1本組 壘部	丸木材	芯持丸木	炭化によるヒビが全体に入る。木の曲がり部分を利用し、上部は断面方形になるよう四面に削りを入れる。下部は先端を尖らせるよう削り出して細くしている。下端には敲打によるツブレが見られる。	531 230 113	全面炭化
図46-7	H177 C-1820	3016	オニグ ルミ	C層	A N56	1本組 底板	丸木材	芯持丸木	分割材で両面に平坦面を作り出す。上部は両側縁を斜めに削り、先端を尖らす。	592 110 55	
図47-1	H214 C-219	3103	クリ	B層	A N56	木道	丸木材	芯持丸木	芯部分を残し両面を平坦にする。裏面の下半は芯部分を残して両側縁側を除去している。両側縁は削り取りによる形状のままである。上下部は両面とも平坦で薄く削られている。	2682 393 192	
図47-2	H190 C-224-1	3029	クリ	B層	A N56	木道杭	半割材	芯持半割	半割(した後) 芯部分を除去。表面に樹皮の剥がれた部分あり。上下端は切断時の加工痕?	783 143 89	
図48-1	H141- ズ3) C-1594		コナラ 属コナ ラ節	C層	A N57	樹皮範囲 杭跡1	権転用杭	芯削出	削り出して、上部は断面形を円形に、下部は幅が広がる形状である。下部の断面形はやや中央が膨らむ形状である。上端及び下端は破損している。	383 61 34	
図48-2	H138-1 C-1595	3485	コナラ 属コナ ラ節	C層	A N57	樹皮範囲 杭跡1	権転木製品 転用杭	芯削出	両面に平坦面を作り出し、全体的に削って形を整えている。下部の両側縁を斜めに削っている。	365 57 25	
図48-3	H160-9 C-1593	3515	コナラ 属コナ ラ節	C層	A N57	樹皮範囲 杭跡1	権転木製品	板目	両側縁から下端にかけて丸味を帯び、平面形が楕円形状である。上端は破損している。断面形は中央が膨らむ形状である。表面には削り痕跡がある。	196 83 24	
図48-4	H180 C-1592	3033	イヌエ ンジュ	C層	A N57	樹皮範囲 杭跡1	杭(丸木)	芯持丸木	丸木の杭で、両端を切断した削り痕が残る。表面左側を削り取る。	873 105 55	
図48-5	H198-1 C-1591	3040	コナラ 属コナ ラ節	C層	A N57	樹皮範囲 杭跡1	杭(板目)	板目	板材の両側縁の上半・下端にかけて真っ直ぐに加工される。下端には削りの痕跡が見られるが、切断時の痕跡である可能性が高い。両面は平滑で、表面下部には削りの痕跡が見られる。	720 117 42	

岩渡小谷(4)遺跡

	遺物番号	No	樹種	層位	グリッド	遺構構成部位	製品の種類、木取り等		形態・技法	全長(mm)幅厚さ	備考
図49-1	H48 C-1673	3341	キリ	C層	A N53	導水状遺構	用途不明木製品(舟形)	板目	最大厚5mm程度の薄板で、削り出して薄く仕上げている。側縁はやや厚く、ごく緩く立ち上がるようである。反対側の側縁が厚さ1、2mm程度である。	826 159 10	
図49-2	H167-4 C-1673	3524	キリ	C層	A N53	導水状遺構	用途不明木製品(舟形)	板目	49-1と同一と思われるが接合しなかった。上端は丸味を帯びている。表面を平坦に削り、左側縁をやや高く残している。裏面はほぼ平坦で両側縁付近で緩く立ち上がる。下端は破損している。	164 70 12	
図49-3	H166-1 C-898	3526	コナラ 属コナラ節	B層	A O52	杭跡2	掘り棒転用杭	芯去削出	全体的に断面を円形に削りだしている。下端は尖らせてあり、削りの痕跡が見られる。下端は敲打によると思われるツブレが見られる。	278 38 35	
図49-4	H166-1 C-1679	3525	クリ	C層	A O52	導水状遺構	杭(割材)	分割	下端を斜めに削っている。裏面に敲打による歪みあり。	226 37 28	
図49-5	H166-1 C-1640	3527	キハダ	C層	A N53	杭跡2	杭(割材)	12分割	上部から敲打により、下部が歪んでいる。歪みによるヒビも見られる。	220 38 28	
図50-1	H16 C-893	3108	クリ	B層	A O52	導水状遺構?	用途不明加工材(容器状)	半削削出	方形の半割材の表面を半円球状に削り、裏面は内部を削りぬき、周縁を平坦にしている。中心線の左右対称の側縁2カ所に、3cm程高く平坦面が作り出す。	295 354 145	
図50-2	H176 C-1601	3007	ケンボ ナシ属	C層	A N53	導水状遺構	柱目板	柱目	全長の上部1/3は断面形が方形で厚みがあり、その他2/3は上部よりも幅広く薄い形状である。表面左側縁側と下端付近はさらに薄く削っている。下端は斜めに切り落とされている。上部は裂痕が見られる。	1368 90 50	
図50-3	H144-4 C-1659	3273	クリ	C層	A O52	杭跡2	割材	6分割	断面三角形状で、中央部分は、敲打によって歪み破損している。下端は丸味を帯び、一部光沢痕があり、磨った可能性もある。下部左側縁は弧状に削られている。	301 39 37	
図51-1	H197 C-1675	3039	クリ	C層	A O53	杭跡2	杭(割材)	6分割	断面台形の割材の上部から下を削り断面長方形に加工している。割材の上端は敲打によるツブレ、歪んでいる箇所も見られる。下半にはツブレで割れた状態となっている。	500 137 14	A M S 試料 IWATARI12
図51-2	H157-5 C-1580	3292	クリ	C層	A O52	杭跡2	杭(割材)	分割	左側縁を上部から下部にかけて削り、下端を尖らす。敲打による痕跡は見られない。	308 54 22	
図51-3	H142-5 C-1801-2	3494	クリ	C層	A O52	杭跡2	杭(割材)	分割	断面三角形状で、角の部分を削り落とす。下部から下部にかけて全体に削り、先端を尖らす。裏面には削り痕残存。	152 33 28	
図51-4	H182 C-1545	3315	クリ	C層	A N52	導水状遺構	杭(丸木)	芯削削出	削り取りにより断面形が変五角形状である。表面には裂痕が見られる。下半は全体的に削り、下部にかけて尖らす形状である。上端は中央部分を削り取り、敲打によるツブレも見られる。	725 78 53	
図51-5	H189 C-1655	3348	コナラ 属コナラ節	C層	A O52	導水状遺構	杭(角材)	芯去角	上端に敲打によるツブレあり。上部表面に削りの痕跡が見られる。下部は両側縁を斜めに削り先端を尖らす。	580 60 50	
図52-1	H209 C-1221	3091	コナラ 属コナラ節	B層	A N54	板敷遺構	割材	分割	一部芯持材。裏面は下半破損し、上部は削りが入る。表面は平坦に加工され、上部から上端にかけて削りあり。	1131 284 192	
図52-2	H201 C-899	3087	クリ	B層	A N53	板敷遺構	丸木材	芯持丸木	分割材を削り取って板状に加工する。上部は右側半分を切断し、残る左側の一部を丸く削りぬいでいる。全面平坦になるよう加工されている。表面下部左側縁は一部破損している。表面に直交する光沢痕が見られたが、削り取りの痕跡かどうかは確認できなかった。	1793 292 154	
図52-3	H211 C-705	3088	クリ	A層	A N53	板敷遺構	板目板	板目	両面とも平滑に加工。下部表面を斜めに削り出し、上部も下部ほど顕著でないが同様である。両側縁は削り取り時の状態である。裏面上部左側縁付近にはごく浅い削りが入る。	1372 26 96	
図52-4	H212 C-1361	3080	クリ	B層	A N53	板敷遺構	板目板	板目	分割材の木裏を削り取ったもので、この部分が炭化している。表面には削り取り時の稜線残存する。裏面は平坦に加工される。下端は2次加工の削り痕が残る。上部は左側を除去しており、右側のみ残存している。	1126 308 104	焦痕(表面) A M S 試料 IWATARI11
図53-1	C-1678	-	クリ	C層	-	導水状遺構	杭(割材)	分割	両面、両側縁は真っ直ぐに加工する。全体に角がとれて丸味を帯びている。表面左側には割れが見られる。上端には削り痕あり、下端は非常に丸味を帯びてつぶれたような痕跡である。	145 44 29	楔の可能性あり?
図53-2	H18 C-1677	3127	ケンボ ナシ属	C層	A N53	杭跡2	杭(割材)	3分割(扇形)	上部から上端にかけて丸味を帯びる。下部は芯部分を削り残して斜めに切断している。下部は四面を作り出し、中央部を方形基調に削り出している。	324 62 54	
図53-3	H18 C-1674	3123	クリ	C層	A O53	杭跡2	杭(棒状)	芯去削出	上部左側縁に削りによる浅い窪みあり。	305 36 16	炭化 樹皮付き
図53-4	H182 C-1715	3319	コナラ 属コナラ節	C層	A N53	杭跡2	杭(丸木)	芯持丸木	全体的に炭化、下端に敲打による歪みが見られる。	222 49 38	
図53-5	H149-3 C-1544	3186	クリ	C層	A O52	導水状遺構	杭(板目)	板目	幅7cmの板であるが、上部から下部にかけてカーブしている。両端とも破損している。	96 71 22	容器片?
図53-6	H10 C-1532	3371	クリ	C層	A N53	導水状遺構	両端切断材	芯削削出	両端部全面に削り痕あり、芯部はやや高まりを残している。削り取りによって整形し、両面に削り取り時の稜線残存する。	257 255 158	

遺構外出土木質遺物

	遺物番号	No	樹種	層位	グリッド	遺構構成部位	製品の種類、木取り等		形態・技法	全長(mm)幅厚さ	備考
図54-1	C-606	3140	コナラ 属コナラ節	B層	A N54		掘り棒	芯去削出	断面が円形に削り出され、下方から下部にかけて先を尖らす形状だが、両端が破損している。中央部でやや変形している。上部は断面が長方形状で両面に平坦面を持ち、ヘラ状になる可能性がある。	681 370 430	
図54-2	H196 C-1598	3010	コナラ 属コナラ節	C層	A N57		掘り棒	芯去削出	上端は破損し下端が尖らす形状。断面形は円形に近いが、両面をやや平坦に削り削っている。裏面下方に工具による削りや“あたり”が4カ所確認できた。高さ2mm程度で、刃先を上から下に向けている。	404 36 34	
図54-3	H135 C-1609	3384	コナラ 属コナラ節	C層	A N53		掘り棒	芯去削出	元は掘り棒と思われるが、破損?のため、裏面が半分欠損している。下半は両面・左側縁から削りがはいる。上端から上半部は削り剥がれたと思われる。	652 40 20	転用杭の可能性あり
図54-4	H124-1 C-452	3553	アスナ ロ	B層	A N55		掘り棒	芯去削出	削り出して全体を丸く加工する。表面下部に裂痕あり。下方は全体に削り、下端をやや尖らす。	187 21 20	
図54-5	H196 C-674	3009	コナラ 属コナラ節	B層	A N54		掘り棒未製品	分割	ヘラ付き掘り棒の未製品。ヘラ部分を両面平坦で、断面形は長方形にし、下部から下部にかけては先を尖らす。他の部分は断面形が方形である。	1270 67 59	
図54-6	H196 C-236	3012	コナラ 属コナラ節	B層	A N57		掘り棒	芯去削出	断面形はほぼ円形で、裏面上半が大きく破損している。下端もわずかに破損している。	438 43 33	
図54-7	H35 C-1362	3387	コナラ 属コナラ節	B層	A N53		掘り棒	芯去削出	ヘラ付き掘り棒の未製品。上部右側縁に柄部分を削り出している。下部は大きく欠損している。左側縁の一部に木材との密接により生じたと思われる光沢痕が見られる。	425 32 25	
図55-1	H221-2 C-1511	3063	コナラ 属コナラ節	B層	A N53		掘り棒	芯去削出	ヘラ部分の上部両側縁欠損。上端は平面形がやや角張る形状である。両側縁とも端部までやや厚みがある。断面形は扁平である。柄は断面円形であり、下端は欠損している。	210 34 16	
図55-2	H136-3 C-215	3255	コナラ 属コナラ節	B層	A N56		榫状木製品	板目	全体に平滑で、丁寧な二次加工あり。両端破損している。断面は両側縁で屈曲し、面に向かって丸味を帯びる。裏面下部には斜めに線状痕あり。	441 65 20	楔痕

	遺物番号	No	樹種	層位	グリッド	遺構構成部位	製品の種類、木取り等	形態・技法	全長(mm) 幅 厚さ	備考
図55-3	H111-2 C-265	3217	オニグルミ	B層	A N56		権状木製品 板目	上部が細く、下部が幅のある木を選択したものと思われる。上部から下半にかけて幅のある材を板状に割り取っている。裏面には割り取り時の残線残存する。全面に削りの調整が入り、両側縁は真っ直ぐに加工する。下端は丸味を帯びている。上端は破損している。	646 76 29	
図55-4	H221 C-966	3053	サクラ属	C層	A N55		敲き具 芯持丸木(般木)	柄部分は表面が大きく破損しているが加工は見られない。台部は全体に削りが入り、断面形状状に加工している。先端は全体にツブレであり、周縁にはツブレによりめくれ上がる箇所もある。	157 138 29	
図56-1	C-642	-	ケンボナシ属	B層	A N55	台付皿片	容器 横木取り	全体に両端が細くなる器形と想定される。底面から口縁に向かって緩やかに立ち上がり、口縁端部は丸味を帯びて先細りする。内面中央付近の底面はほぼ平坦である。底外面の高台は楕円形で台幅は約1cmあり、削りの痕跡が見られる。	265 108 64	裏面漆塗り
図56-2	H221 C-708	3057	カエデ属	A層	A N53	台付皿	容器 横木取り	接合しないが、同一固体と考えられる。形状や厚みから図のような復元が想定できるが、高台が偏った位置になると思われる。上端部に向かって緩やかに立ち上がり、左側縁はほぼ真っ直ぐに立ち上がる。底面はやや丸味を持つ。高台の幅は薄く、高さも1cm程である。	264・129 157・85 43・20	残存状態悪い
図57-1	C-1230	3603	ケンボナシ属	B層	A N54	皿片	容器 板目横木取り	口縁が一部残存する皿片で、底面は丸味を帯びる。口縁端部は平坦である。器面は全体に平滑である。	(153) (64) (31)	赤漆塗り
図57-2	H221 C-1762	3058	ケンボナシ属	C層	A N53	皿片	容器 縦木取り	皿の底面付近の破片と思われる。右側縁側が口縁に近く、器壁が薄くなったり、やや上部にカーブしている。	154 119 19	内外面漆塗布
図57-3	C-1543	-	クリ	C層	A N54	浅鉢	容器 横木取り	右側縁の一部が口縁に近く、全体形は砲弾状になると推定される。底面は平坦で、緩やかに立ち上がる。底外面と胴部の境界はやや削り出し、浅い段差がある。	170 115 55	内外面漆塗布
図58-1	-	-	クリ	C層	A O52	鉢	容器 不明	口縁部片で、ほぼ真っ直ぐに立ち上がる器形である。口縁上端は平坦であり、胴部のほうが器壁が薄い。	104 130 7	推定口径19cm 赤漆塗布
図58-2	-	-	クリ	C層	A O52	鉢	容器 不明	口縁部片で、ほぼ真っ直ぐに立ち上がる器形である。口縁上端は平坦であり、胴部のほうが器壁が薄い。外面は赤・黒漆が塗布されている。	116 126 6	推定口径19cm 赤漆塗布、外面に黒色漆あり
図58-3	-	-	クリ	C層	A O52	鉢	容器 不明	胴部片で、口縁部に比べて器壁が薄く、胴部下半から底部にかけての部位と考えられる。内外面とも木地よりも漆膜のほうが残存状態がよい。	89 68 4	赤漆塗布
図59-1	C-1095-1139	-	ケンボナシ属	B層	A N54	台付鉢	容器 横木取り	底面から緩やかに立ち上がる器形で、口縁上端は平坦である。口縁の一部に台形状の突起がみられ、この上端には一条の沈線が入る。外面は口縁に沿って幅1cmほどの範囲が浮かび彫り状になっている。高台は、幅1.5～2cm程度でこの面には漆の付着がなく、塗布後に加工された可能性がある。	口径229 底径135 器高138	
図59-2	C-1586	3073	ウルシ	C層	A N55		容器 横木取り	図59-3と同じ種類。59-3よりも若干長軸が長く、平坦である。表面は口縁が残存してあらず、内底面は右側が緩やかに立ち上がる。外底面は平坦である。	340 148 30	
図59-3	C-1293	3073	ウルシ	C層	A N55		容器 横木取り	側縁すべて欠損している。図59-2と同種類の製品である可能性が高い。上端部は高さ約10cm、厚さ2cmほど残存し底面からの立ち上がりは急傾している。内底面は長方形基調である。右側縁は厚さ5mm程で、緩やかに立ち上がり、欠損した口縁部分も上下ほど高さを持たなかった可能性が高い。裏面は外底面はほぼ平坦であるが、側縁付近になると緩やかに立ち上がる。	375 148 58	裏面に靴痕あり
図60-1	C-1371	3606	モクレン属	B層	A N53		用途不明木製品(楯状) 板目	断面が半円状にカーブする。割り取り後、削り出して器面を調整する。表面の両木口付近に帯状に削り残り、浮かし彫り状にする。厚さは1mmにも満たない。片側に穿孔あり。	700 113 22	
図60-2	C-1285	3609	コシアブラ	C層	A N53		舟形木製品 横木取り	底面はほぼ平坦で、端部に向かって内外面とも緩やかに立ち上がる。両側縁はほぼ間垂直に立ち上がるが、土圧により内湾する部分も見られる。外面上端には径1cm程度の突起のような痕跡が残存している。	739 95 61	
図61-1	C-1211-947	3608 3610	ウルシ	B層	A N54		舟形木製品 板目横木取り	底面はほぼ平坦で、端部に向かって緩やかに立ち上がる。右側縁はこれよりもやや急傾斜で立ち上がる。口縁は丸味を帯びる。両端外面上部には長さ7cm程の突起があり、断面方形に削り出される。	816 (249) (106)	
図61-2	H218 C-1740	3071	ケヤキ	C層	A N56		用途不明木製品(鳥形) 芯持丸木	丸木を削り出す。上面に深い窪みあり。芯を残して製作。	330 173 112	
図62-1	H221 C-206	3052	ハリギリ	B層	A N56		用途不明木製品(舟形) 横木取り	上部がやや細くなる器形と考えられる。側縁は真っ直ぐに加工され、炭化の痕跡から焦がしながら加工したと思われる。底面はやや丸味を持つ。	138 94 23	
図62-2	H221 C-429	3054	ウルシ	B層	A N57		用途不明木製品(舟形) 横木取り	底面から緩やかに立ち上がる容器片で、胴部の厚み大きい。	109 59 25	
図62-3	C-1613	-	クリ	C層	A N56		用途不明木製品(舟形) 横木取り	表面は上端に近い部分以外平坦に削り、上部は丸味を残す。両側縁は内部と同様ほぼ平坦である。裏面はほぼ平坦で上部は端部に向かって斜めに削られる。	169 96 19	
図62-4	H56 C-274	3164	クリ	B層	A N57		用途不明木製品(舟形) 板目	内側を丸く削り、両側に縁を作り出す。裏面は平坦に削り取る。上部左側縁斜めに削る。	630 121 45	
図63-1	H221-2 沢Vベルト	3061	サクラ属	C層	A N57		用途不明木製品(柄付) 芯持丸木(般木)	柄の右側縁は段状にする。台部と柄の境界にも削りを入れ、段をつける。上端部は削りが入り中央がやや高まりになる。両面には2箇所ずつ刺目が入る。下端は欠損している。	140 79 28	
図63-2	C-373	3607	ケンボナシ属	B層	A N57		用途不明木製品(柄付) 芯去削出	柄の部分は扇状で裏面がくぼみ、表面が膨らむ形状で、裏面上端は斜めに削り出す。表面の柄と頭部の境界には沈線状の削りがみられる。×印の文様は浅い削りである。柄は断面がほぼ平坦で断面形状が隅丸方形である。	247 60 20	
図63-3	H99-6 C-1130	3066	ニシキギ属	C層	A N57		用途不明木製品(柄付) 芯去削出	頭部を逆円錐形状に加工している。柄の部分を削り出してあり、頭部との間に浅い段差がある。上端は擦痕があり平坦である。柄は断面がやや扁平な円形で下端は破損している。	304 62 23	
図64-1	H221-2 C-1399	3060	アスナロ	B層	A O53		用途不明木製品(薄板状) 柱目	両面を薄く削り出す。両端破損。上部は右側縁がやや薄い。下部は上部より厚みがあり、両側縁は丸味を帯びる。	72 19 4	
図64-2	H221-2 土サンプル	3065	アスナロ	不明	不明		用途不明木製品(薄板状) 柱目?	上部は平面形状が隅丸方形で、中央部分は器厚があり側縁端部に近づくと徐々に薄くなる。下部は断面が長方形で下端は欠けている。	41 20 5	焦痕有り裏面とくに炭化
図64-3	H221 土サンプル	3056	アスナロ	C層	不明		用途不明木製品(管状) 分割	割り取り・削りにより細く加工する。表面はほぼ平坦である。裏面には裂痕がみられる。断面形状は隅丸方形である。	97 7 5	
図64-4	土サンプル	-	アスナロ	B層	A N53		用途不明木製品(管状) 分割	破損している。割り取り・削りにより細く加工する。表面はほぼ平坦で、下端がやや尖る。断面形状は方形である。	86 6 5	
図64-5	H167 C-175	3068	キハダ	B層	A N54		用途不明木製品(しゃもじ形) 板目	全体に平滑で丁寧な二次加工あり。上部は細く、下部に従ってやや幅広になる。下端は斜めに削りがありやや丸味を帯びている。右側縁に削り痕あり。	268 80 34	
図64-6	H21 C-1839	3069	ウルシ	C層	A N55		用途不明木製品(挟り付) 板目	柱目薄板の上部両側縁を削り、3cm程の挟り状にしている。挟り以外の側縁や上端は平滑に仕上げている。裏面下部全体を薄く削っており、剥落している箇所も見られる。裏面には樹心部分を除いた窪みが見られる。	249 234 12	
図64-7	H139-10 C-1451	3254	ウルシ	C層	A N55		用途不明木製品(挟り付) 柱目	両側縁中央は残存する。両面とも全体に平滑で、丁寧な二次加工あり。両端とも欠損している。右側縁上部に挟りが入る。左側縁は丸味を帯びた器形と思われる。	273 138 24	
図64-8	H110-2	3459	クリ	B層	A N56		用途不明木製品(しゃもじ形) 板目	上部から下半にかけての柄の部分の細く削り、柄から下部の肩部分は左側縁が直角になっているのに対し、右側縁は緩いカーブである。柄の両側縁には工具帽と思われる挟りが1～5mm程度入る。裏面に割り取り時の残線残存する。	338 81 32	

岩渡小谷(4)遺跡

	遺物番号	No	樹種	層位	グリッド	遺構構成部位	製品の種類、木取り等		形態・技法	全長(mm)幅厚さ	備考
図64-9	H133-10 C-1147	3476	オニグルミ	C層	A N57		用途不明木製品(板状)	柱目	全面二次加工あり。両面はほぼ平坦で、表面には上端から上部にかけて削りが入る。両側縁は丸味を帯びており、裏面は工具痕が見られる。下端は破損している。	132 41 12	
図65-1	H92-16 C-732	3434	クリ	A層	A O53		角材	芯去角	二次加工あり、削り取り時の稜線残存する。	109 40 29	先端炭化
図65-2	H110-1 沢Vベル ト-3	3455	オニグルミ	C層	A N56		角材	芯去角	断面台形で、全体に二次加工あり、裏面は平坦に作り出す。工具の削り痕あり。	102 27 18	
図65-3	H129-1 C-1347	3244	キハダ	B層	A N53		角材	6分割	左側縁を真っ直ぐに加工する。削り取り時の稜線残存する。上端に削りの痕跡あり。	120 42 28	
図65-4	H164-2 C-155	3521	クリ	B層	A N55		角材	芯去角	二次加工なし、削り取り時の稜線残存する。	135 60 46	
図65-5	H139-7 C-1826	3253	×	C層	A N56		角材	芯去角	全面二次加工あり。表面は右側に削り取り時の稜線残存し、これを境に削りが入る。裏面は平坦に作り出す。上端は両側縁を削り、先端が尖った形状である。下端は削り痕が残存する。	176 73 29	
図65-6	H143-8 C-1750	3280	オニグルミ	C層	A N53		角材	芯去削出	表面は平坦で、両側縁はまっすぐに加工されている。表面の右側下部は斜めに削り出している。上部は削りが入る。	445 30 26	
図65-7	H35 C-1555	3388	クリ	C層	A N57		角材	板目	分割材の両側縁は真っ直ぐに加工される。上部裏面に削り取れていない部分が残存し、側縁に工具痕が見られる。表面は光沢部分があり、密接したことにより生じた可能性がある。上下端とも斜めに削り加工している。	529 55 31	光沢痕あり
図65-8	H185 C-218	3045	コナラ 属コナ ラ節	B層	A N56		角材	芯去角	ほぼ完形。削り割がし加工後、上端は斜めに切り落とす。上部は断面正方形に近い形状で、下部につれてやや幅広になり断面長方形となる。右側面2ヶ所と裏面下部1ヶ所に浅いくぼみがある。	745 70 58	
図66-1	H87-10 C-1197	3428	クリ	C層	A N54		棒状加工材	芯去削出	全体に平滑。上端破損、上部は断面円形に近いが、下部につれて扁平になる。右側縁から裏面に削り加工痕が残存している。	283 37 27	
図66-2	H159-9	3491	クリ	C層	A N56		棒状加工材	芯去削出	削り出して断面形を半円状に作り出す。裏面は平坦。両側縁はやや丸味を帯びる。全体に平滑で丁寧な二次加工である。	55 13 7	
図66-3	H194 C-1463	3050	ケンボ ナシ属	B層	A N53		棒状加工材	芯去削出	分割材を四～六角形状に加工している。表面上部は分割材のままで、表面下部は平坦面を作り出す。裏面は木裏部分の高まりを落としている。形状は不整形であるが、全体に削りが入っている。上端部はほぼ平坦に削っている。	853 64 59	
図66-4	H152-6 C-1736	3199	コナラ 属コナ ラ節	C層	A N53		棒状加工材	芯去削出	断面形は円形で、裏面下部や上部右側縁に裂痕がみられる。使用による割れと思われる。	323 29 28	
図66-5	H118-14	3222	単子葉 植物	C層	A N56		棒状加工材	芯去削出	上部は断面半円形、下部は断面三角形である。全体に削りだし、丸味を帯びる。	69-50-43 10 8	蓄状木製品
図66-6	H76-5 C-1004	3424	ノリウ ツギ	C層	A N57		棒状加工材	芯去角	割材を削り出して断面円形状に加工している。全体に平滑である。両端は破損したと思われる。	176 9 8	蓄状木製品
図66-7	H149-6 C-1570	3185	クリ	C層	A N53		棒状加工材	芯去削出	削り出して断面を半円状にする。表裏面の加工は不明である。	48 28 20	
図66-8	H7 C-1547	3362	クリ	C層	A N53		棒状加工材	芯持削出	丸木の木表側を削り取り、平坦面を4面作り出す。下は右側縁から斜めに切断されている。全体に二次加工があり、削りの痕跡が認められる。上面に削りあり。	256 137 113	先端炭化
図66-9	H78-3 C-1253	3176	クリ	C層	A N57		棒状加工材	分割	全体に削り取り時の稜線残存する。削り痕も見られる。	278/615 30/52 25/39	
図67-1	H92-12 C-722	3433	クリ	A層	A N53		杭状先端加工材(角材)	芯去角	上半は断面台形状だが、表面下部から下端にかけては削りが入り断面三角形になる。	170 39 26	先端炭化
図67-2	H76-6 沢Vベル ト	3425	クリ	C層	A N56		杭状先端加工材(角材)	芯去角	全体に平滑で、丁寧な二次加工あり。断面形は台形で、分割材を加工したものと考えられる。上部は切断したと思われる、削り痕あり。側縁に削り痕あり。両側縁ともに下から下端に向かいわずかに先が鋭くなる。	216 45 34	
図67-3	H91-10 C-495	3437	ケンボ ナシ属	B層	A N57		杭状先端加工材(角材)	芯去角	接合しないが同一個体と考えられる。上部は両側縁を削り、先端がやや尖る。下部から下端にかけては両側縁を削り先が尖る。全体に二次加工あり。裏面は工具痕が残存し、削り取り時の高まりもあることから、加工途中と思われる。表面中央は浅く削りが入る。	210/95 37/35 29/24	炭化あり
図67-4	H57 沢	3416	クリ	B層	A N57		杭状先端加工材(角材)	芯去角	上部は断面長方形で徐々に細くなり、下部で断面三角形に膨らむ。全体に削り取り時の稜線残存。下端は両側縁から斜めに削り先端を尖らす。	439 40 29	先端炭化
図67-5	H98-12 C-1201	3195	クリ	C層	A N54		杭状先端加工材(角材)	芯去角	全体に平滑で丁寧な二次加工あり。下部から下端にかけて全体を削って尖らす。上部の右側縁は斜めに加工されている。	299 42 36	先端炭化
図67-6	H175 C-407	3026	クリ	B層	A N54		杭状先端加工材(角材)	芯去角	上部表面を中心に裏面まで炭化している。裏面中央に工具による切り込みが何力所にも渡って見られる。四面とも平滑に仕上げられている。裏面の切り込みのほか、浅い刻みは無数に見られる。上下端丁寧に削られている。	776 75 47	先端炭化
図67-7	H11 C-1174	3372	コナラ 属コナ ラ節	B層	A O53		杭状先端加工材(角材)	芯去角	半割材の両側縁を削り落としたもの。芯部分は残存しない。上部は裂けた面を調整したようである。上端は斜めに削った痕跡あり。	731 95 95	
図68-1	H192 C-1560	3326	クリ	C層	A N57		杭状先端加工材(角材)	芯去削出	上部は断面三角形状に、下部は方形状に削られる。両側縁中央に削り痕あり。左側縁中央から下端にむかい先を尖らせる。	990 46 39	
図68-2	H66 C-1126	3404	クリ	C層	A N57		杭状先端加工材(角材)	芯去削出	両面・両側縁を丁寧に加工し断面角材にする。下部10cm程が折れ曲がり、下端方向に尖らす。上端は破損している。	712 48 48	
図68-3	H5-1 C-879	3359	オニグルミ	A層	A N53		杭状先端加工材(角材)	芯去角	両面・右側縁平坦、左側縁やや斜めに加工される。両端丸みを帯びる。	219 28 14	
図68-4	H9 C-1535	3367	クリ	C層	A N53		杭状先端加工材(角材)	芯去角	全体に丸味を帯び、丁寧な二次加工あり。両側縁の下部は下端に向かって斜めに削られる。上端はヘラ状で丸味を帯びる。左側縁の上部はそのまま残存し、ゆるやかな肩がつく。	327 60 21	ヘラ付掘り棒か?
図68-5	H35 C-1461	3383	クリ	B層	A N53		杭状先端加工材(角材)	芯去角	表面右側中央・下端にかけて大きく削れている。左側縁に浅い刻みあり。	476 57 30	
図68-6	H119-9 C-1150	3465	キハダ	C層	A N57		杭状先端加工材(柱目材)	柱目	全体に二次加工あり、両面を削り先端にかけて薄く尖らせている。両側縁を真っ直ぐに加工する。上端破損。	117 54 21	表面炭化
図68-7	H67 C-897	3405	クリ	B層	A O52		杭状先端加工材(柱目材)	柱目	二次加工あり。両面を平坦にし、左側縁を真っ直ぐに加工する。表面・左側縁の下部に斜めに削った痕跡あり。裏面には削り取り時の稜線残存し、沈線のごく浅い窪みあり。	340 82 59	
図68-8	H175 C-720	3024	コナラ 属コナ ラ節	A層	A N53		杭状先端加工材(板目材)	板目	分割材を全体に削り加工している。上部は両面に平坦面を持ち、下部は先端を削り尖らす。この他は断面が方形である。杭になる可能性も高い。	1133 56 45	
図69-1	H128-4 C-1305	3227	クリ	C層	A N57		杭状先端加工材(板目材)	板目	下部の両側縁を斜めに削り、下端に向かって尖らす。両面下部にも削りが入る。全体に平滑で、丁寧な二次加工が見られる。裏面左側には大きく削りが入る。	235 40 22	先端炭化

	遺物番号	No	樹種	層位	グリッド	遺構構成部位	製品の種類、木取り等		形態・技法	全長(mm)幅厚さ	備考
図69-2	H118-10 C-578	3221	クリ	B層	A N56		杭状先端加工材(板目材)	板目	下部から下端にかけて先端を尖らす。上部は破損。二次加工なし。	135 48 25	先端炭化
図69-3	H93-1 沢Vペルト	3445	クリ	C層	A N57		杭状先端加工材(板目材)	板目	表面・右側縁に二次加工あり。上部左側縁斜めに削り落とす。	119 20 15	先端炭化
図69-4	H151-5 C-181	3184	ニガキ	B層	A N56		杭状先端加工材(板目材)	板目	表面は平滑で二次加工あり。右側縁・裏面は削り取り痕あり。下部両側縁を斜めに削り、下端は先を尖らす。	169 48 20	先端炭化
図69-5	H50 C-525	3410	クリ	B層	A N56		杭状先端加工材(板目材)	板目	表面は平坦で、両側縁は真っ直ぐに加工され全体に平滑である。裏面は削り取り痕あり。上端は削り落とされ、下部から下端にかけて削りの痕跡あり。	541 121 45	先端炭化
図69-6	H37 C-1546	3391	クリ	C層	A O52		杭状先端加工材(板目材)	板目	板目に削り取られたもので、上端は破損している。下部につれて細くなっている。	596 83 24	
図69-7	H35 C-921	3382	クリ	C層	A N55		杭状先端加工材(板目材)	板目	表面は平滑に作り出され、裏面は上部から中央にかけて7箇所削り取り痕あり。両側縁下部から下端が削られ、先が尖る。	580 68 17	
図69-8	H96-2 C-643	3440	クリ	B層	A N55		杭状先端加工材(板目材)	板目	分割後、全面に二次加工あり。下部両面を薄くしている。上端には削りあり。	709 47 26	
図70-1	H15 C-1173	3376	コナラ 属コナラ節	B層	A O53		杭状先端加工材(板目材)	板目	1174と同木? 芯部分を一部残し、裏面を削り取る。削り取り後の調整なし。下部表面左側縁は斜めに削り落とされる。上部は比較的平らに削り落とされる。	759 95 83	
図70-2	H12 C-1336	3374	クリ	C層	A N56		杭状先端加工材(板目材)	板目	表面に削り取り時の稜線残存する。表面から両側縁にかけて平滑であり、二次加工あり。上部左側縁に削り取り痕あり。下端破損だが左側縁下部は斜めに削り出される。	352 77 31	
図70-3	H22 C-721	3116	クリ	A層	A N54		杭状先端加工材(板目材)	板目	下部両側縁・表面を削り先端を尖らす。両面に削り取り時の稜線残存。	270 66 23	
図70-4	H105-2 沢VIペルト	3466	クリ	C層	A N54		杭状先端加工材(板目材)	板目	表面及び両側縁は平滑に作り出される。表面左側の大部分は割取られている。裏表には若干ではあるが削り取り痕あり。表面左上部は斜めに削り出される。	193 64 33	
図70-5	H133-9 C-1364-2	3475	クリ	B層	A N53		杭状先端加工材(板目材)	板目	両面平坦で、裏面下部は破損している。上端は切断痕あり。下部から下端にかけては先が尖る。	122 57 14	
図70-6	H91-3 C-748	3435	クリ	B層	A N56		杭状先端加工材(板目材)	板目	二次加工なし。表面に工具痕のようなものがあるが不明。左側縁下部から下端に削りあり。	113 39 17	
図70-7	H119-1 C-476	3462	カエデ 属	B層	A N56		杭状先端加工材(板目材)	板目	表面は平滑で、裏面は裂痕あり。右側縁は下半から下端に向かい尖る。	242 41 14	
図70-8	H140-3 C-173	3482	クリ	B層	A N54		杭状先端加工材(板目材)	板目	右側縁を真っ直ぐに加工する。裏面もほぼ平坦である。下部左側縁から下端にかけて斜めに削られる。裏面には削り取り痕が見られる。	177 78 38	樹皮残存
図70-9	H22 C-1298	3112	カエデ 属	C層	A N56		杭状先端加工材(板目材)	板目	上端に削り痕、下部両側縁から斜めに削られ、下端を尖らす。表面中央付近に削り取り痕あり。	487 63 32	樹皮付き
図71-1	H106-2 C-1446	3452	クリ	C層	A N57		杭状先端加工材(副材)	分割	削り取りにより、断面長方形になる。右側縁は細くなるが、左側縁はほぼ真っ直ぐに加工する。裏面は削り取りにより中央部分がくぼんでいる。表面下部は下端に向かって薄く削られる。	281 71 34	表面炭化
図71-2	H159-1 沢VIペルト	3490	クリ	不明	A N55		杭状先端加工材(副材)	分割	全体に二次加工あり、削り取り時の稜線残存する。両側縁の下部を斜めに削り先端を尖らす。工具痕残存。	214 51 44	先端炭化
図71-3	H142-6 沢V-2	3496	クリ	C層	A O56		杭状先端加工材(副材)	分割	削り取り時の稜線残存する。下部は表面と両側縁を削って先端を尖らす。上端は裂痕が見られる。	157 44 18	先端炭化
図71-4	H101-7 C-525	3449	クリ	B層	A N56		杭状先端加工材(副材)	分割	全面に削り取り時の稜線残存する。右側縁は真っ直ぐに加工される。下端はやや斜めに削り出す。全体に平滑である。	148 63 34	先端炭化
図71-5	H137-5 C-1273	3550	ケンボ ナシ属	C層	A N55		杭状先端加工材(副材)	分割	両面に割取り時の稜線残存。両面下部から下端にかけて削りあり。	204 51 23	先端炭化
図71-6	H142-7 C-301	3497	クリ	B層	A N56		杭状先端加工材(副材)	分割	全面に削りが入り、角材に加工している。上端は破損している。下部は右側縁を斜めに削り落とすとしている。	243 42 27	先端炭化
図71-7	H69 C-857	3153	クリ	A層	A N53		杭状先端加工材(副材)	分割	全体に平滑で、二次加工あり。表面左側半分が大きく削り取られ、上部は断面長方形に薄く削られている。両面下部に削りあり。	415 59 57	先端炭化
図71-8	H64 C-466-4	3398	クリ	B層	A N56		杭状先端加工材(副材)	分割	両側縁上部斜めに削りだし? 表面に二次加工あり。	247 49 40	先端炭化
図71-9	H29 C-232	3162	クリ	B層	A N57		杭状先端加工材(副材)	分割	削り取り前に炭化? 二次加工なし。削り取り時の形状をそのまま利用?	250 58 42	先端炭化
図71-10	H38 C-1771	3135	クリ	C層	A N56		杭状先端加工材(副材)	分割	削り取りによる稜線あり。二次加工なし。下部は若干細くなっているが、炭化により詳細不明。削り取り時の形状をそのまま利用?	254 70 48	炭化あり
図71-11	H92-3 C-632	3431	クリ	B層	A N55		杭状先端加工材(副材)	分割	下部から下端にかけて尖らせる。裏面に二次加工あり。上端には削り取り痕あり。	198 52 31	先端炭化
図71-12	H134-2 C-316	3233	クリ	B層	A N56		杭状先端加工材(副材)	分割	右側縁は真っ直ぐに加工する。表面右側を中心に欠損。上部は炭化により段状に割れる。左側縁下部は斜めに削られる。	118 42 20	先端炭化
図72-1	H168-3 C-1718	3529	クリ	C層	A N56		杭状先端加工材(副材)	分割	断面形は方形に近いが、表面左右側を削りとっている。上部に敲打による剥れあり。下部は破損している。左側縁から下端にかけて破損している。右側縁下部から下端にかけて斜めに削り先を尖らせている。	277 60 48	
図72-2	H76-1 C-1310	3423	トネリ コ属	C層	A N56		杭状先端加工材(副材)	分割	断面逆台形で表面は平滑。丁寧な二次加工あり。右側縁上部から上端は斜めに削られる。	324 39 28	
図72-3	H173-6 C-1295	3507	クリ	C層	A N56		杭状先端加工材(副材)	分割	削り取り時の稜線残存する。下部は表面を削り、先端を尖らす。上端欠損。	280 40 33	
図72-4	H156-3 C-1528	3500	クリ	B層	A N53		杭状先端加工材(副材)	板目	削り取りにより幅5cm程の規模に加工した後、右側縁の下部を斜めに削り、上部を細くしている。右側縁上部には削りによる丸いくぼみあり。下端は両面を削り板状に薄く加工する。表面上部は削り取り時の稜線残存。	359 38 33	
図72-5	H119-1 C-576	3463	オニグル ミ	B層	A N56		杭状先端加工材(副材)	分割	下部の先端が削られ尖る。	219 53 38	先端炭化
図72-6	H141-2 C-1768	3268	クリ	C層	A N56		杭状先端加工材(副材)	8分割	二次加工全体にあり、削り取り時の稜線裏面に残存する。下部は細く削られ、上部は破損している。	204 53 34	先端炭化

岩渡小谷 4 遺跡

	遺物番号	No	樹種	層位	グリッド	遺構構成部位	製品の種類、木取り等		形態・技法	全長(mm)幅厚さ	備考
図72-7	H172-5 C-272	3506	クリ	B層	A N57		杭状先端加工材(副材)	分割	割り取り痕あり。下部は表面を削り、先を尖らす。	190 45 34	先端炭化
図72-8	H133-8 C-1190	3473	クリ	C層	A O52		杭状先端加工材(副材)	分割	全面二次加工あり、表面下部に割り痕が見られる。下端は丸味を帯びて削られる。上端破損。	150 47 25	先端炭化
図72-9	H118-7	3219	クリ	C層	A N56		杭状先端加工材(副材)	分割	全体に二次加工あり。断面三角形だが、上部は削り出して扁平である。下部は先端が細くなっている。	355 46 28	先端炭化
図72-10	H52 C-400	3413	クリ	B層	A N54		杭状先端加工材(副材)	分割	分割材で、上部から下半部にかけては、断面形が方形から長方形で、下端では断面三角形になる。下端にかけて細く尖らす。全体に二次加工あり、裏面には削りのような痕跡も見られる。	1328 82 6	模痕?
図73-1	H134-12 C-311	3238	クリ	B層	A N56		杭状先端加工材(副材)	分割	下部先端を尖らす。器面は全体に平滑で二次加工あり。表面上部に工具による割りあり。	154 48 23	先端炭化
図73-2	H110-1 沢Vベルト-1	3453	クリ	C層	A N56		杭状先端加工材(副材)	分割	右側縁下部に割りあり。このほかの二次加工は不明。	233 51 36	先端炭化
図73-3	H102-3 C-1264	3209	クリ	C層	A N57		杭状先端加工材(副材)	分割	上部から下半にかけて裏面を削り出して断面長方形に削り、下部は表面を斜めに削り、先端をやや尖らす。	304 47 19	先端炭化
図73-4	H9 C-1644	3369	クリ	C層	A N57		杭状先端加工材(副材)	分割	全体に二次加工あり。右側縁に工具痕多数あり。下部から下端にかけて全体に削り、尖らす。	353 56 29	先端炭化
図73-5	H169-2 C-1589	3533	クリ	C層	A N55		杭状先端加工材(副材)	分割	断面三角形で、全体に平滑。丁寧な二次加工あり。下部は表面左右側を削り先端を尖らす。表面上部右側縁は若干欠損しているが、全体としては細くなる。	342 41 24	先端炭化
図73-6	H158-5 C-1560	3300	クリ	C層	A N57		杭状先端加工材(副材)	分割	分割材の下半を削り徐々に下端を先細りさせている。断面形は上部で台形だが、下部では方形となる。表面中央付近の右側縁で削りによる窪みが見られる。また、工具の当て?のような長さ1cmほどのごく浅い刻みが多く観察できる。	278 37 25	先端炭化
図73-7	H119-3 C-1421	3464	クリ	B層	A N53		杭状先端加工材(副材)	分割	下部表裏面は二次加工の可能性あり。	181 27 20	
図73-8	H91-6 C-869	3436	ニガキ	B層	A N54		杭状先端加工材(副材)	分割	下部右側縁を斜めに削っている。右側縁は平坦で、擦痕のようなものが直交している。	137 41 22	
図73-9	H5-1 C-719	3356	クリ	A層	A N53		杭状先端加工材(副材)	分割	裏面に割り取り時の稜線残存する。左側縁下部から下端にかけて斜めに削り出される。	275 35 24	
図73-10	H140-4 C-199	3483	クリ	B層	A N56		杭状先端加工材(副材)	16分割	全体に平滑で、二次加工あり。割り取りにより生じた稜線を削っている。また、正面左側を中心に工具痕による割りあり。上端は表面に向かって斜めに削り落ちてしている。	373 35 22	
図73-11	H9 C-1256	3368	クリ	C層	A N57		杭状先端加工材(副材)	分割	二次加工あり、裏面に割り取り時の稜線残存する。表面は平滑で、下端は尖らす。	274 43 19	
図73-12	H96-3 C-235	3441	クリ	B層	A N57		杭状先端加工材(副材)	分割	全体に平滑で、丁寧な二次加工あり。中央付近が大きく欠損している。右側縁は真っ直ぐに加工される。裏面は割り取り時の稜線残存する。下端には左側縁に削りあり。	167 51 39	
図73-13	H110-1 沢Vベルト-6	3458	クリ	C層	A N56		杭状先端加工材(副材)	分割	全体に二次加工あり。両面に割り取り時の稜線残存する。右側縁下部から下端にかけて斜めに削りあり。	242 35 19	
図73-14	H110-1 沢Vベルト-5	3457	ミズキ	C層	A N56		杭状先端加工材(副材)	3分割(扇形)	表面の残存状態悪い。裏面に割り取り時の稜線残存する。左側縁は下部に向かって斜めに削られる。	261 59 23	
図74-1	H50 C-924	3412	クリ	C層	不明		杭状先端加工材(副材)	分割	割材の表面上部と下部両面を削り出している。上部は右側縁から上端にかけて斜めに削り、下端は表面から削り出す。全体に二次加工あり、裏面には割り取り痕あり。	727 65 31	
図74-2	H20 C-1721	3381	クリ	C層	A O52		杭状先端加工材(副材)	8分割	表面左側に横から入った削り痕あり。上部から中央付近は断面三角形だが、下部では断面長方形に加工。両端破損しているが上部から上端にかけては斜めに削り出される。	716 91 74	炭化あり
図74-3	H53 C-1462	3160	クリ	B層	A N53		杭状先端加工材(副材)	分割	二次加工あり。全体に丸味を帯びている。下部は両側縁から斜めに削り落とし、先端を尖らす。上部は分枝部で削り落とされている。	663 82 51	
図74-4	H63 C-1175	3421	クリ	B層	A O52		杭状先端加工材(副材)	分割	二次加工あり。表面は平坦、裏面は割り取り時の稜線残存する。裏面下部は平坦に加工される。裏面右側縁上部に工具痕あり。	589 61 32	
図74-5	H63 C-1368	3422	コナラ 栗コナラ節	B層	A O53		杭状先端加工材(副材)	6分割	表面右側縁上半を除去している。左側縁は真っ直ぐに加工される。右側縁下部から下端に削りあり。	367 42 36	
図74-6	H222-10 C-1714	3512	アスナロ	C層	A N53		杭状先端加工材(副材)	分割	全体に割り取り痕あり。裏面と上端に裂線残存。上端は敲打による割れも見られる。下端は両側縁から削られ先が尖る。	329 15 10	
図74-7	H91-12 C-500	3438	クリ	B層	A N57		杭状先端加工材(副材)	16分割	割り取りの時の稜線残存する。表面上部に割り痕あり、裏面は炭化。両面及び両側縁下部を削り先端に向けて薄く尖らせている。	214 39 20	炭化あり
図74-8	H119-1 C-978	3461	クリ	C層	A N57		杭状先端加工材(副材)	分割	割り取り時の稜線残存する。二次加工の有無は不明だが、左側縁下端に削り痕?あり。	288 55 34	先端炭化
図74-9	H172-1	3504	エノキ 栗	C層	A N56		杭状先端加工材(副材)	6分割	木表側の表面上部に浅い削りあり。右側縁下部から下端にかけて削りあり。	286 50 44	樹皮付き
図75-1	H110-1 沢Vベルト-4	3456	オニグルミ	C層	A N56		杭状先端加工材(半割材)	芯去半割	断面台形で、全体に二次加工あり、裏面は平坦に作出される。左側縁下部から下端にかけて斜めに削り出す。	189 35 20	全体焦痕
図75-2	H153-5 C-369	3289	ニガキ	B層	A N54		杭状先端加工材(半割材)	芯持半割	丸木を半分削り取り、木表を平坦に加工した痕跡あり。上端は切断時の痕跡あり。下端は炭化しており、不明。木裏には芯が残存し削り取り時の稜線残存する。両側縁を削り断面長方形形状になる。右側縁はやや斜めに削られる。	199 84 53	先端炭化
図75-3	H142-6 沢V-1	3495	ヤマグワ	C層	A O56		杭状先端加工材(半割材)	芯持半割	半割材の下端を焦がしている。上端は破損している。両側縁を斜めに削り先端を尖らせている。	179 43 24	先端炭化
図75-4	H5-1 C-714	3358	クリ	A層	A N53		杭状先端加工材(半割材)	芯持半割	丸木の半割材で、上端にヒビあり。下部から下端にかけて斜めに削り出される。	162 46 31	先端炭化
図75-5	H12 C-1542	3373	クリ	C層	A O52		杭状先端加工材(半割材)	芯持半割	丸木を半割し、表面両側縁下部を斜めに加工している。	446 76 52	
図75-6	H5-1 C-711	3357	クリ	A層	A N53		杭状先端加工材(半割材)	芯持半割	半割材の木表部分を二方向から削り取る。中心に稜線残存。裏面は比較的平坦。左側縁下部から下端に削りあり。	317 127 72	
図75-7	H108-2 C-522	3211	クリ	B層	A N56		杭状先端加工材(丸木材)	芯持丸木	裏面・右側縁を真っ直ぐに加工される。下端を尖らす。上部切断痕あり。	297 76 63	先端炭化

	遺物番号	No	樹種	層位	グリッド	遺構構成部位	製品の種類、木取り等		形態・技法	全長(mm)幅厚さ	備考
図75-8	H57 C-406	3414	オニグルミ	B層	A N54		杭状先端加工材(丸木材)	芯持丸木	丸木材の下端を二方向から斜めに削る。上端はほぼ平坦に削られ、削り痕あり。裏面と右側縁の一部が真っ直ぐに加工される。	413 51 45	先端炭化
図75-9	H43 C-1423	3335	クリ	B層	A N53		杭状先端加工材(丸木材)	芯持丸木	丸木の外側を削り落とし、断面変五角形状に加工する。削り落とされた面はほぼ平坦である。中央部分は木こぶあり。上部は切断痕あり。下部表面は斜めに削られ、その部分のみ炭化している。	549 134 82	先端炭化?
図76-1	H47 C-278	3076	イヌエンジュ	B層	A N57		杭状先端加工材(丸木材)	芯持丸木	丸木の四面を削り落とし、両面を平坦に、断面長方形に加工する。上部を削り落とし、下部に向かって両側縁を斜めに削る。	424 74 48	
図76-2	H106-1 C-895	3451	オニグルミ	B層	A N56		杭状先端加工材(丸木材)	芯欠損?丸木	削り取りにより中央は断面凹レンズ状になり、他は断面三角形になる。左側面から下端にかけて斜めに削られる。	469 42 31	
図76-3	H176 C-1006	3614	タラノキ	C層	A N56		杭状先端加工材(丸木材)	芯持丸木	表面二箇所と上端が破損している。下部は両面を15cm前後削り、下端を尖らす。表面上部と中央に削りあり。	536 60 56	
図76-4	H174 C-1450	3321	コナラ 属コナラ節	C層	A N56		杭状先端加工材(丸木材)	芯持丸木	丸木の両面及び両側面を削り、断面形が凸レンズ状になるよう加工している。上端は両面を加工する際に共に斜めに削られている。	606 69 50	芯持材を平坦に加工
図76-5	H161-1 C-685	3517	イヌエンジュ	B層	A N56		杭状先端加工材(丸木材)	芯持丸木	丸木材で、裏面に上部から下部全体に削り取りあり。下端は斜めに削られている。	429 60 34	
図77-1	H174 C-737	3323	クリ	A層	A O53		杭状先端加工材(丸木材)	芯持丸木	四面を広く作り出す。下部は先端を尖らせ、断面が台形状になる。	1108 282 113	
図77-2	H189 C-363-1	3349	クリ	B層	A N53		杭状先端加工材(丸木材)	芯欠損?丸木	芯部分欠損、下端破損、上端は真っ直ぐに切り落とし、右側縁を削り削がし形あり。	585 86 70	
図78-1	H134-6 C-415	3234	クリ	B層	A N55		柱目板	柱目	上部左側破損。二次加工あり。	147 32 10	
図78-2	H92-2 C-498	3430	コナラ 属コナラ節	B層	A N57		柱目板	柱目	両面には調整痕なし。下端を斜めに削り落とす。裏面右側縁に接して微かに削り削がし痕あり。	110 20 7	端部炭化
図78-3	H122-2 C-554	3477	x	B層	A N57		柱目板	柱目	両面から削って薄く仕上げしており、表面に削り痕が見られる。左側にやや厚みがある。	92 29 6	
図78-4	H124-5 C-648	3555	ミズキ	B層	A N54		柱目板	柱目	両面を薄く削り出し、板材に加工している。表面右側縁にごく浅く窪んだ痕跡が見られる。	178 69 8	楔痕あり?
図78-5	H134-8 C-1154	3235	クリ	C層	A N57		柱目板	柱目	削り削がしにより、板状に加工する。両側縁は真っ直ぐに加工される。表面から右側縁にかけて工具痕あり。	177 29 14	
図78-6	H80-7 C-1093	3178	カエデ 属	B層	A N54		柱目板	柱目	全体に平滑で、丁寧な二次加工あり。右側縁が厚みのある断面三角形である。右側縁は削り痕が見られる。	256 51 10	
図78-7	H38 C-1419	3133	クリ	C層	A N57		柱目板	柱目	全体に平滑で二次加工あり。両面・左側縁は真っ直ぐに加工される。下部右側縁から下端にかけて斜めに削られ、下端付近では両面とも削りが入る。上部左側縁は削られ、右側が細くなる。	331 40 30	先端炭化
図78-8	H104-2 C-1442	3202	クリ	C層	A N57		柱目板	柱目材	全体に削り取り時の稜線あり。両側縁は真っ直ぐに加工され、全体に平滑である。上端削りあり。	412 70 38	先端炭化
図78-9	H175 C-1018	3025	ニレ属	C層	A N57		柱目板	芯持柱目	上部の表面から左側縁にかけてと下部の表面から右側縁にかけて削りが入る。裏面も同様の割れがある。両側縁は幅3cm前後に真っ直ぐに加工される。	819 144 73	長方形の板材を意図?
図78-10	H172-2 C-271	3505	トネリコ属	B層	A N57		柱目板	柱目	断面形が均一で、全体に平滑で2次加工あり。上端は欠損。裏面下部に削りとツブしの痕跡がある。下端から下部方向に向かって力が加わった痕跡あり。	394 38 11	
図79-1	H103-1	3207	ニレ属	C層	A N54		柱目板	柱目	両面ほぼ平坦、両側縁に削り取り時の稜線残存する。全体に工具痕・削り痕残存。下部は両面・右側縁を削る。右側縁はやや丸みを帯びる。裏面下部は斜めに削られる。	248/161 72/49 31/22	
図79-2	H118-8 C-587	3220	オニグルミ	B層	A N54		柱目板	柱目	表面に削り取り時の稜線残存する。裏面二次加工あり。	276 48 21	
図79-3	H98-8 C-390	3191	キハダ	B層	A N55		柱目板	柱目	両側縁を真っ直ぐに加工され、両面に平坦面を作り出す。全体に平滑で、両端ともほぼ真っ直ぐに削り落とされている。	254 32 27	
図79-4	H129-8	3248	オニグルミ	C層	A N56		柱目板	柱目	全体に平滑で、丁寧な二次加工あり。四面を平坦に加工している。両面の上部に削り取り時の稜線残存する。上端は削りが入る。	235 29 17	
図79-5	H66 C-1384	3403	クリ	C層	A N57		柱目板	柱目	全体に平滑で一部二次加工あり。右側縁から裏面にかけて削り取り時の稜線残存する。左側縁・下端に削り痕あり。	230 27 11	
図79-6	H139-6 C-1779	3253	キハダ	C層	A N56		柱目材	柱目	二次加工痕が一部に見られる。下端は丸味を帯びて削られる。上端は欠損している。	135 38 22	遺存状態悪い
図79-7	H130-9 C-1344	3480	クマシデ属クマシデ節	B層	A N53		柱目材	柱目	両面に二次加工あり。裏面左側縁には浅い削りが入る	66 25 13	
図79-8	H47 C-304	3078	コナラ 属コナラ節	B層	A N56		板目板	板目	上端に削り痕、下端に工具痕あり。両面に削り取り時の稜線残存する。	389 79 38	樹皮付き
図79-9	H123-6 C-422	3559	コナラ 属コナラ節	B層	A N57		板目板	板目	全面平滑で、丁寧な二次加工あり。両側縁は丸味を帯びる。裏面の上部から上端にかけて削りが入る。	110 62 19	樹皮付き
図79-10	H99-3 C-1326	3196	クリ	C層	A N55		板目薄板	板目	全体に平滑で、丁寧な二次加工あり。削り取り時の稜線残存する。断面の中央部分にやや厚みがある。下端は両側から薄く削られている。	88 50 11	
図79-11	H131-1 C-1133	3257	クリ	C層	A N57		板目薄板	板目	両面ほぼ平坦。両側縁は削り取り時の形状で斜めになっている。両端破損。	93 33 8	
図79-12	H150-5 C-1605	3287	クリ	C層	A N53		板目薄板	板目	器面全体が平滑で、左側縁端部は丸味を持つ。全体に反っているようで表面右側を底面とする容器片の可能性もある。	110 37 9	容器片の可能性あり
図79-13	H133-7 C-1466-2	3472	キリ	B層	A N53		板目薄板	板目	表裏面全体に浅い凹凸があり、削り出しによる器面の加工痕と思われる。表面左側縁は破損している。右側縁は丸味を帯びて削られている。	135 53 7	先端炭化
図79-14	H110-9 沢Vバルト	3460	タラノキ	C層	A N57		板目板	板目	両面に削り取り時の稜線残存する。両面とも平滑で、下端は丸味を帯びている。	208 47 14	
図79-15	H77-5 C-1312	3174	オニグルミ	B層	A N53		板目板	板目	裏面に削り取り時の稜線残存する。表面はやや平滑で二次加工あり。	180 45 11	



岩渡小谷(4)遺跡

	遺物番号	No	樹種	層位	グリッド	遺構構成部位	製品の種類、木取り等		形態・技法	全長(mm)幅厚さ	備考
図80-1	H121-4 C-1171	3226	クリ	B層	A O53		板目板	板目	両面を削って平坦面を作り出す。表面下部に削りの痕跡あり。	184 62 17	炭化あり
図80-2	H134-11 C-1304	3237	クリ	C層	A N57		板目板	板目	全面二次加工あり。両端破損。	225 20 16	
図80-3	H150-1 C-1689	3282	クリ	C層	A N57		板目板	板目	表面は平滑で、丸味を帯び、丁寧に二次加工されている。裏面は削り取り時の稜線残存する。	459 43 26	両端に炭化あり
図80-4	H190 C-224-3	3031	クリ	B層	A N56		板目板	板目	上端は弧状に削る。中央に部分に穿孔あり、表面部分では周辺も削っている。裏面に削り取り時の稜線残存する。下部は敲打によるヒビが入る。裏面右側縁には斜めに削りが入る。	594 75 34	
図80-5	H190 C-224-2	3030	クリ	B層	A N56		板目板	板目	上端に敲打によるツブレあり。両面・両側縁を削り取り、裏面中央付近に長軸に直交する溝を削り出す。	672 78 62	
図80-6	H147-5 C-1538	3182	クリ	C層	A N53		板目板	板目	板状に加工される。上端は破損している。両側縁を真っ直ぐに加工され、両面は削って平坦にしている。	176 40 19	
図81-1	H223-2 50、C-967	3513 ・ 3411	キハダ	C層	A N55		板目板	板目	下部右側縁に幅2cm、長さ15cmに渡って長方形の抉りが入る。全体的に表面左側縁とその裏面右側縁は薄く削られている。表面上部も浅く窪んでいる。表面には工具をあてた痕跡が見られる。	574/140 105/69 21/13	
図81-2	H18 C-1181	3306	ウルシ	C層	A O52		板目板	板目	右側縁が薄く、左側縁がやや厚みを持つ形状。左側縁は真っ直ぐに加工される。	331 216 40	端部炭化
図81-3	H17 C-1657	3106	クリ	C層	A O52		板目板	板目	残存状態悪い。二次加工なし。中央付近で破損している。	282/169 73/39 19/15	
図81-4	H121-2 C-816	3224	ケンボ ナシ属	B層	A N56		板目板	板目	全体に平滑で丁寧な二次加工あり。右側縁には削り痕あり。表面上部は破損している。	470 57 28	
図81-5	H17 C-1578	3107	クリ	C層	A O52		板目板	板目	表裏面に平坦面を作り出し、右側縁下部を削り尖らせる。左側縁は削りの痕跡が見られない。	366 58 15	
図81-6	H51 C-285	3408	クリ	B層	A N57		板目板	板目	板目材を削り剥がす際に使用されたと思われる模痕あり。両面・両側縁とも削りの痕跡がほとんど見られない。一部、表面の左側縁は斜めに削られている。下端はやや丸味を帯び、上端付近は薄く削られている。	802 139 40	模痕
図82-1	H221-2 C-1527	3064	オニグルミ	B層	A N53		板目板	板目	板状に削り取り、両面上部を薄く削り出している。下半は両側縁を削り取り上部より細い幅に加工する。裏面下部は削り取り時の稜線残存する。	233 84 37	
図82-2	H144-7 C-1823	3275	クリ	C層	A N56		板目板	板目	両面は平坦で、両側縁は真っ直ぐに加工される途中の段階である。全体に平滑で、丁寧な二次加工あり。両端は破損。	155 47 17	
図82-3	H3 C-1292	3354	コナラ 属コナラ節	C層	A N56		板目板	板目	削り取り痕あり。上端は丸味を帯びて削られている。表面上部に削り剥がし痕?	463 130 42	
図82-4	H4 C-150	3355	クリ	B層	A N55		板目板	板目	両面平坦に加工。両面とも上部・下部全体に削りあり。右側縁はやや斜めだが、左側縁はほぼ真っ直ぐに加工される。右側縁上部に工具痕あり。	509 181 65	
図82-5	H164-5 C-213	3522	オニグルミ	B層	A N56		板目板	板目	裏面に削り取り時の稜線残存する。右側縁下部には斜めに削り落とした痕跡あり。上面にも削りの痕跡が見られる。表面はやや平滑で二次加工した痕跡あり。	82 39 17	
図82-6	H129-4 C-766	3246	キハダ	B層	A N56		板目板	板目	下部の両側縁を斜めに削り、下端を尖らす。裏面は上部に削り残り部分あり。	124 71 32	
図82-7	H137-7 C-854	3551	カエデ 属	A層	A N53		板目板	板目	表面に二次加工の痕跡あり、工具痕残存。上端を斜めに削り、両側縁は丸味を帯びて削られる。裏面は二次加工があったか不明。	141 68 18	
図82-8	H134-9 C-1142	3236	クリ	C層	A N54		板目板	板目	全体に平滑で、丁寧な二次加工あり。両面平坦で、両側縁は真っ直ぐに加工される。裏面下部は削り痕が残る。全体に曲線的であるが、木の歪みをそのまま利用している。	187 61 26	
図82-9	H135-5 C-1737	3264	キリ	C層	A N53		板目板	板目	裏面の下部全体を削って薄くしている。表面上部も全体に削りが入る。	156 121 37	槽片か
図83-1	H127 C-1645	3342	ウルシ	C層	A N57		板目板	板目	板材を薄く削り取る。表面上下端部は剥落している。上部左右側縁は残存しており、厚さ5mm程度で真っ直ぐに加工される。	297 162 20	模痕?
図83-2	H187 C-1802	3307	樹皮	C層	A N56		板目材	板目	樹皮を剥いだもので下端を切り落としたもの。	297 117 43	樹皮付き
図83-3	H208 C-724	3098	コナラ 属コナラ節	A層	A N53		板目材	板目	表面を削り、平坦面を作り出す。下端には削り痕あり。裏面は芯が残存する。	692 280 168	
図83-4	H141-2	3269	コナラ 属コナラ節	C層	A N56		板目材	板目	表面に削り取り時の稜線残存する。全体に二次加工あり。右側縁下部が斜めに削られる。	219 69 28	樹皮付き
図83-5	H153-4 C-154	3288	クリ	B層	A N55		板目材	板目	分割材の木表・木裏を平坦に削り取り板状にする。両側縁は削り取り時のままで、断面形が台形状である。両端は欠損している。二次加工なし。	211 125 50	
図83-6	H115-9 C-980	3216	サクラ 属	C層	A N57		板目材	板目	表面は全面樹皮付き、裏面は平滑である。下端には削り痕が見られる。伐採時のものかは不明。	168 46 16	樹皮付き
図84-1	H110-1 沢Vベル ト-2	3454	クリ	C層	A N56		板目材	板目	全体に二次加工あり、断面長方形になるよう削り出している。下部は両面から斜めに削る。	76 46 22	未製品か
図84-2	H162-4 沢VIベル ト	3545	クリ	C層	A N54		板目材	板目	削り取り時の稜線残存する。両面の高まりを削り取って平坦面を作り出す。裏面に削りの痕跡あり。	182 54 27	
図84-3	H123-5 C-1485	3558	クリ	C層	A N57		板目材	板目	全体に平滑で、丁寧な二次加工あり。両側縁を真っ直ぐに加工する。裏面に削り取り時の稜線残存する。	141 38 20	
図84-4	H9 C-1764	3366	クリ	C層	A N53		板目材	板目	両面平滑で、二次加工あり、削り取り痕あり。下部から下端にかけて斜めに削り、先端を尖らす。表面上部から上面にかけて工具痕があり、上部左側には上部からの割れが見られる。	220 56 22	
図84-5	H173-6 C-1807	3508	カエデ 属	C層	A N56		板目材	板目	表面と左側縁は真っ直ぐに加工する。右側縁下部はやや丸味を帯びる。上部はやや斜めに削り落とされている。表面に中央付近が浅くくぼみ使用時の木のあたりと思われる。裏面は削り取り時の稜線残存する。	270 42 30	
図84-6	H130-7 C-1085	3479	オニグルミ	C層	A N55		板目材	板目	二次加工なし。裏面に削り取り時の稜線残存する。	218 59 18	
図84-7	H93-2 C-267	3446	クリ	B層	A N56		板目材	板目	両面に削り取り痕あり。裏面は二次加工あり?	203 45 26	

	遺物番号	No	樹種	層位	グリッド	遺構構成部位	製品の種類、木取り等		形態・技法	全長(mm) 幅 厚さ	備考
図84-8	H176 C-1253	3006	クリ	C層	A N57		板目材	板目	丸木の両端を切断。斜めに削り痕はいる。	185 16 11	
図84-9	H95-2 C-1247	3190	クリ	C層	A N54		板目材	板目	全体に平滑で、二次加工あり。両側縁は真っ直ぐに加工される。上部が大きく削られている。	315 44 27	
図84-10	H98-11 C-1297	3194	クリ	C層	A N56		板目材	板目	表面は平坦で、裏面中央付近には大きく稜線が残存する。下部は削りにより細身になっており、削り痕が残る。	409 48 36	炭化あり
図84-11	H64 C-466-6	3400	クリ	B層	A N56		板目材	板目	二次加工あり、左側縁を真っ直ぐに加工される。右側縁は下部を斜めに薄く削り出している。	425 60 32	
図84-12	H56 C-896	3165	クリ	B層	A O52		板目材	板目	樹皮に近い部分を板状に削り取る。表面は平坦で、下部右側縁はやや斜めに切り取られる。両側縁はやや斜めに傾いている。	595 150 44	先端炭化
図85-1	H132-10 C-1210	3241	×	C層	A N56		板目材	板目	遺存状態悪い。表面は平坦であるが、裏面は大きく破損している。上端は破損しているが、下端は不明である。	144 117 42	
図85-2	H131-11 C-1186	3261	クリ	C層	A O52		板目材	板目	裏面平坦で、両端切断痕あり。表面は削り取りにより、凹凸あり。左側縁は真っ直ぐに加工される。右側縁は斜めになっている。	187 81 27	
図85-3	H187 C-1641	3305	クリ	C層	A N57		板目材	板目	裏面の上下部約10cmを一段削っている。下部右側縁にも抉りを入れている。下端は斜めに削っている。表面下部も約10cmの範囲で一段削っている。表面右側縁は全体的に薄く削り、裏面側も同様である。表面左側縁は平坦面がある。側縁を削り丸みを持たせている。	606 129 52	
図85-4	H143-3 C-1797	3277	キハダ	C層	A N55		板目材	板目	表面から右側縁かけて削り痕あり。	169 52 21	
図85-5	H84-5 C-649	3443	クリ	B層	A N54		板目材	板目	分割材を削り取って板状にしている。削り取り時の稜線残存する。	153 38 18	
図85-6	H141-3 C-1792	3270	クリ	C層	A N55		板目材	板目	両面を薄く削りだしている。裏面右側縁はやや立ち上がる。両端は破損している。	112 36 10	
図86-1	H147-5 C-1563	3180	クリ	C層	A N57		板目材	板目	表面上部に木の繊維方向と異なる線状痕あり。裏面には削り取り時の稜線残存する。両面下部には削り取り痕あり。	253 58 24	先端炭化 痕？
図86-2	H108-4 C-533	3212	クリ	B層	A N56		板目材	板目	二次加工なし。削り取り時の稜線残存する。	150 52 19	
図86-3	H139-1 C-1824	3250	クリ	C層	A N56		板目材	板目	全体に平滑で、丁寧な二次加工あり。断面形はやや不整な方形である。下部は表面を削り先端を尖らせる。	200 29 20	杭状先端加工 材の可能性あり 、炭化あり
図86-4	H133-3 C-477	3469	クリ	B層	A N56		板目材	板目	全体に平滑で、二次加工あり。両面は平坦で、両側縁は真っ直ぐに加工される。	152 31 16	
図86-5	H168-4 C-1785	3530	ミズキ	C層	A N53		板目材	板目	二次加工なし。両面に削り取り時の稜線残存する。表面右側から下部にかけて浅い窪みあり。	132 40 22	
図86-6	H96-4 C-1697	3442	クリ	C層	A N56		板目材	板目	二次加工あり、裏面に削り取り痕あり。	78 26 18	
図86-7	H150-2 C-994	3284	クリ	C層	A N57		板目材	板目	削り取り時の稜線残存する。両側縁は真っ直ぐに加工される。右側縁が薄く、左側縁が厚い断面で、下部右側縁は削り取られている。	245 38 21	
図86-8	H69 C-841	3149	クリ	A層	A N53		板目材	板目	遺存状態やや悪い。分割材の木裏部分を削り取って平坦面を作り出す。裏面の二次加工なし。	380 49 22	
図86-9	H98-9 C-1448	3192	クリ	C層	A N57		板目材	板目	上部は断面形が長方形だが、下部につれて、台形状になり、下端付近で再び長方形になる。下端にかけて両面が薄くなる。	440 40 19	
図86-10	H22 C-595	3113	クリ	B層	A N54		板目材	板目	二次加工なし、両面に削り取り時の稜線残存する。	474 55 21	
図86-11	H47 C-155	3079	クリ	B層	A N55		板目材	板目	表面は中央から下部で平坦に加工される。裏面には削り取り時の稜線残存する。右側縁の上部・下部は斜めになっている。	691 162 49	
図87-1	H128-11 C-366	3231	クリ	B層	A N54		板目材	板目	全体に平滑で、丁寧な二次加工あり。両端に切断痕あり。表面には平坦面が作り出ず。裏面は下半部を薄く削っており、工具痕が見られる。	177 73 33	
図87-2	H139-3 C-1798	3251	クリ	C層	A N56		板目材	板目	両面・右側縁、左側縁の一部に二次加工あり。上端は破損している。	142 38 14	
図87-3	H130-3 C-484	3478	ウルシ	B層	A N57		板目材	板目	二次加工あり、上部右側破損。両面に浅く削りの痕跡あり。	329 60 20	痕？
図87-4	H169-7	3536	クリ	C層	A N56		板目材	板目	断面三角形で全体に平滑で、二次加工あり。	188 35 16	
図87-5	H69 C-702	3152	クリ	A層	A N53		板目材	板目	表面やや平滑でその他の部位は二次加工なし、削り取り時の稜線残存する。	395 60 38	
図87-6	H69 C-706	3148	クリ	A層	A N53		板目材	板目	削り取り時の稜線残存する。二次加工なし。表面は上部左側縁から下部にかけて大きく割れている。裏面も中央を残し左右が割れている。	290 163 63	
図87-7	H131-7 C-1209	3259	クリ	C層	A N55		板目材	板目	分割材の木裏部分を削り取って厚みを小さくしている。下部は断面形が楕円形に近い。削り取り時の稜線残存する。	193 46 20	
図87-8	H185 C-229	3042	カエデ 属	B層	A N56		板目材	板目	上部左側縁を削り落とし、下部は両面を削り、下部に向かって幅広く、薄い形状をつくる。半割(した後)高い部分を落として断面扁平かまぼこ型に整形。表面下部には削り痕が多く見られる。榫のような形状のものを意識していたか。裏面は樹芯部分の稜線あり。	736 77 28	
図88-1	H163-1 C-1521	3540	コナラ 属 コナラ 節	B層	A N53		割材	8分割	残存状態悪い。削り取り後の加工は裏面下部の不整形な浅い窪みのみである。	191 107 72	全体焦痕
図88-2	H128-10 C-160	3230	クリ	B層	A N54		割材	分割	両側縁を真っ直ぐに加工される。両面に平坦面を作り出す。下部は両側縁を斜めに削り下端を尖らす。	102 68 36	表面炭化
図88-3	H128-5 C-1488	3228	クリ	C層	A N57		割材	分割	分割材の木裏部分を削り取り、平坦面を作り出す。全体に二次加工あり。	103 25 20	先端炭化
図88-4	H115-1 C-426	3215	クリ	B層	A N57		割材	分割	削り取りにより断面方形にする。裂痕あり。下部は表面から右側縁にかけて斜めに削られる。	221 36 33	炭化あり

岩渡小谷 4 遺跡

	遺物番号	No	樹種	層位	グリッド	遺構構成部位	製品の種類、木取り等		形態・技法	全長(mm)幅厚さ	備考
図88-5	H125-8 C-1277	3548	クリ	C層	A N53		副材	分割	割り取り時の稜線残存する。二次加工なし。右側縁は真っ直ぐに加工される。	231 38 20	先端炭化
図88-6	H81-2 C-762	3426	クリ	B層	A N56		副材	分割	分割材で、下端を斜めに削る。両面に割り取り時の稜線残存する。	281 56 24	先端炭化 柱目?
図88-7	H124-2 C-515	3554	クリ	B層	A N57		副材	分割	全体に平滑で、丁寧な二次加工あり。左側縁が厚く、右側縁が薄い断面三角形の形状である。右側縁の上下を斜めに削り、両端部付近で細くなる。裏面に工具痕残存。	212 33 11	先端炭化
図88-8	H111-6 C-486	3218	クリ	B層	A N57		副材	分割	分割材の木表部分を斜めに削り、木裏は割り取られている。表面から両側縁にかけて二次加工あり。下部から下端にかけて斜めに削られる。	145 45 32	追柱目?
図88-9	H108-6 C-625	3214	クリ	B層	A N55		副材	分割	分割材で二次加工の痕なし。上部が破損している。	119 38 23	遺存状態悪い 炭化あり
図88-10	H124-8 C-547	3556	クリ	B層	A N56		副材	分割	全体に平滑で、丁寧な二次加工あり。両側縁は真っ直ぐに加工する。裏面は平坦。表面・両端は不明。	80 56 32	
図88-11	H104-3 C-376	3203	アスナロ	B層	A N54		削出副材片	芯去削出	両端は欠損している。表面に削り痕あり。裏面は割り取られている。	313 22 14	棒状
図88-12	H69 C-440	3151	アスナロ	B層	A N55		削出副材片	芯去削出	削りだして表面に丸味をつける。裏面は割り取痕あり。二次加工なし。両端破損?	392 29 20	棒状
図88-13	H50 C-404	3409	アスナロ	B層	A N54		削出副材片	芯去削出	割り取り前に丸く削り出して、両面を割り取る。	439 17 9	棒状
図89-1	H132-5 C-1213	3239	クリ	B層	A N53		副材	分割	上下面破損、断面長方形、二次加工なし。	(64) 16 11	柱目
図89-2	H131-3 C-1340	3258	クリ	C層	A N57		副材	分割	両面平坦で、両側縁は割り取り時の形状で斜めである。上部左側破損。	(86) 40 13	
図89-3	H93-6 沢Vペルト	3447	クリ	C層	A N57		副材	分割	表面には割り取り時の稜線残存する。裏面に二次加工あり。	179 31 12	
図89-4	H141-5 C-1750	3271	ニレ属	C層	A N53		副材	分割	割り取りにより断面がやや不整形だが、上部から下部にかけて断面方形で、下部は削り出して断面長方形である。二次加工全体にあり。	445 30 26	
図89-5	H114-3 C-819	3539	クリ	B層	A N55		副材	分割	全体に二次加工あり。上半部は断面三角形だが、下半部は断面長方形である。	367 50 31	
図89-6	H69 C-738	3150	クリ	A層	A O53		副材	分割	表面上部は割り取りにより平坦で、下部は割り残し部分あり。下端付近では先を尖らす。裏面は割り取り痕あり。	324 53 30	
図89-7	H96-1 C-1323	3439	ミズキ	C層	A N55		副材	分割	全体に平滑で、丁寧な二次加工あり。表面左側が大きく割り取られ、断面形が不整形である。	311 39 29	
図89-8	H166-7 C-1857	3528	クリ	C層	A O53		副材	分割	全面二次加工あり。上端は丸味を帯びて削られる。	230 19 16	
図89-9	H155-1 C-338	3543	ニレ属	B層	A N57		副材	分割	裏面に割り取り痕あり。両側縁は真っ直ぐに加工される。表面上部に削り痕あり。	278 46 33	
図89-10	H141-1 C-1166	3267	クリ	B層	A N53		副材	分割	表面・左側縁に割り取り痕あり。二次加工なし。	233 60 33	
図89-11	H78-2 C-1227	3175	サクラ属	B層	A N54		副材	分割	二次加工痕ほとんどなし。表面に削り痕残る。断面方形に割り落とす。	179 77 71	
図89-12	H163-3 C-1592 下	3541	ニレ属	C層	A N57		副材	6分割	上部破損、表面下部右側に工具痕・削り痕あり。二次加工あり。	161 53 37	
図89-13	H84-6 C-1039	3444	クリ	C層	A N57		副材	分割	遺存状態悪い。両側縁ともに裂痕あり。両端破損。	152 75 51	
図90-1	H189 C-363-2	3350	コナラ 属コナラ節	B層	A N53		副材	16分割	表面下部に約4mmの高さ、幅5cmで段を作り出す。上端に削りの痕跡が二カ所見られる。下端は破損。	236 76 45	
図90-2	H114-1 沢Vペルト	3538	クリ	C層	A N56		副材	分割	割り材片で、下端は丸味を帯びてカーブしている。二次加工なし。	244 85 46	
図90-3	H89-5 C-959	3179	クリ	B層	A N53		副材	板目	両面に割り取り時の稜線残存。表面の上部は端部に向かって削りが入る。裏面は中央部分がほぼ平坦である。下端にも削りが入る。	120 76 35	
図90-4	H68 C-347	3157	コナラ 属コナラ節	B層	A O53		副材	分割	割り取り痕あり。両面二次加工なし。	377 318 115	
図90-5	H59 C-254	3173	クリ	B層	A N56		副材	分割	全体に二次加工あり。表裏面を平坦に削る。	678 278 168	
図91-1	H98-10 C-371	3193	キハダ	B層	A N54		副材	分割	二次加工なし。表面に削りあり。	130 43 2	
図91-2	H143-4	3278	コナラ 属コナラ節	C層	A N56		副材	分割	左側縁に稜痕?あり。芯削り取り、二次加工なし。	145 56 28	稜痕?
図91-3	H121-3 C-951	3225	キハダ	B層	A N54		副材	分割	全体に平滑で、二次加工あり。表面から右側縁にかけて削り痕あり。割り取り時の稜線残存する。	274 24 17	
図91-4	H90-3 C-485	3429	オニグルミ	B層	A N57		副材	分割	両面に割り取り時の稜線残存。全体に二次加工あり。	444 47 18	
図91-5	H176 C-1172	3004	クリ	B層	A O53		副材	8分割	二次加工あり。上端を斜めに削っている。下部は細く削られ、断面形が長方形となる。	1269 77 78	
図91-6	H64 C-621	3394	ミズキ	B層	不明		副材	6分割	割り取り時の稜線残存する。全体に二次加工あり。表面下部を削る。上端に敲打による痕跡あり。	445 46 40	
図91-7	H39 C-448	3143	クリ	B層	A N54		副材	12分割	分割材で、右側縁に削り痕がある。表面・左側縁は平滑であるが、加工があったかは不明。	377 46 29	

	遺物番号	No	樹種	層位	グリッド	遺構構成部位	製品の種類、木取り等		形態・技法	全長(mm) 幅 厚さ	備考
図91-8	H131-12 C-1299	3262	タラノキ	C層	A N56		割材	3分割	木裏を割り取っている。芯部分除去。	304 44 16	
図91-9	H149-5 C-1758	3187	クリ	C層	A N52		割材	4分割	割り取り時の稜線残存する。二次加工なし。	146 41 26	
図91-10	H124-12 C-473	3557	クリ	B層	A N56		割材	16分割	両端とも切り落とされており、割材片と思われる。表面に割り取り時の稜線残存する。	81 38 19	
図91-11	H143-5 C-1739	3279	クリ	C層	A N52		割材	分割	割り取り時の稜線残存する。二次加工の痕跡なし。	104 34 14	
図91-12	H129-2 C-403	3245	キハダ	B層	A N54		割材	4分割	表面に削り痕あり。裏面下部にも削りが見られるがこれ以外の二次加工は見られない。	154 51 34	
図91-13	H92-13 沢Vベル ト	3432	ケンボ ナシ属	C層	A N56		割材	8分割	表面・右側縁に二次加工あり。左側縁は破損。	111 35 29	
図91-14	H93-7 C-655	3448	クリ	B層	A N54		割材	8分割	割り取り時の稜線残存する。二次加工なし。上部右側縁に削り?の痕跡あり。	194 25 22	
図92-1	H17 C-1579	3105	クリ	C層	A O52		割材	12分割	全体に風化している。割り取り以外の痕跡はあまりみられないが、表面左側縁上部に窪みがある。また、表面右側縁は若干曲線を描き、削り出した可能性もある。	695 81 41	
図92-2	H192 C-1697	3327	コナラ 属コナ ラ節	C層	A N56		割材	分割	分割材の割り両面に平坦面を作り出す。表面下部と裏面上部に窪みが見られる。	371/241 51/50 38/26	遺存状態悪い
図92-3	H123-8 C-308	3560	クリ	B層	A N56		割材	6分割	敲打により中央付近で変形している。全体に二次加工あり。表面中央に長方形の窪みが見られている。右側縁には工具による削りの痕跡が多く見られる。	615 58 28	
図93-1	H139-6 C-1769	3252	クリ	C層	A N56		割材	分割	二次加工なし。両面に割り取り時の稜線残存する。表面右側にごく浅い窪みあり。稜痕?	154 32 16	
図93-2	H64 C-466-1	3395	クリ	B層	A N56		割材	分割	二次加工あり。表面に割り取り時の稜線残存する。下部はやや薄く削られる。中央付近にごく浅い窪みあり。裏面平滑。	237 52 25	
図93-3	H176 C-1228	3003	クリ	B層	A N54		割材	分割	二次加工あり。両端丸味を帯びて削り出す。	(351) 43 38	
図93-4	H80-2 C-403	3177	キハダ	B層	A N54		割材	4分割	二次加工なし。表面に割り取り時の稜線残存する。上端は切断痕あり。下部左側縁は斜めに削り入る。	482 50 58	
図93-5	H58 C-248	3171	クリ	B層	A N57		割材	分割	上端に切断痕あり。下端は不明。表面に工具痕あり。裏面・左側縁真っ直ぐに加工される。二次加工なし。	610 190 110	樹皮付き
図93-6	H174 C-1622	3322	キハダ	C層	A N56		割材	8分割	割り取り後、表面に二次加工あり。両端は破損している。	473 71 52	
図93-7	H176 C-1250	3002	クリ	C層	A N57		割材	分割	断面形が凸レンズ状である。両端削り痕あり。両面とも中央が平坦状になる。側面は縁が細くなる。	(440) 70 41	
図93-8	H108-5	3213	ガマズ ミ属	B層	A N55		割材	4分割	割り取り後の二次加工なし。	154/123 16/19 12/13	樹皮付き
図93-9	H102-2 C-1564	3208	タラノキ	C層	A N57		割材	3分割(扇形)	丸木の外側を削り取った割材片。裏面に割り取り時の稜線残存する。	113 38 15	樹皮付き
図94-1	H120-1 C-1481	3552	クリ	C層	A N56		半割材	芯去半割	表面は平坦で、左側縁は真っ直ぐに加工されるが、右側縁から裏面にかけて大きく割り取る。左側縁下部は下端に向かって斜めに削られ、中央付近で削りの痕跡が多数見られる。	302 50 47	
図94-2	H152-9 C-1548	3201	クリ	C層	A O53		半割材	芯持半割	表面は分枝部分を残し、左右両側を削り取る。裏面は芯部分がやや高く残存する。	610 71 52	
図94-3	H185 C-221	3041	クリ	B層	A N56		半割材	芯去半割	半割(した後)木表・接線方向を一面ずつ削り剥がし、面を作り出す。左側面は欠けている。	679 95 64	
図94-4	H178 C-280	3301	クリ	B層	A N57		半割材	芯持半割	半割後、表面の高い部分を削り平滑にし、表面左側縁、裏面右側縁も同じように削っている。裏面は芯部分を除去しているが、下部は残存している。下部は枝部の曲がり部分から斜めに削られ、先を尖らす。上端の尖りは下端ほど大きくない。	1938 166 150	
図95-1	H183 C-1680	3309	クリ	C層	A N53		半割材	芯持半割	両端にツブレあり。表面に削りの痕跡残存。	589 123 70	
図95-2	H188 C-1696	3047	ニレ属	C層	A N56		半割材	芯持半割	半割後、木表を削り剥がしている。裏面では一部樹芯部分を除去している。このほか削りの工程はみられるが、意図的かどうかは不明。	656 95 74	
図96-1	H221 C-1388	3055	クリ	C層	A N57		両端切断材	芯持半割	下端伐採時・斜めに削りが入り樹芯部分残存する。 - 上端切断時の痕跡あり。表裏面二次加工なし。稜痕裏面にあり?	207 100 63	稜痕
図96-2	H114-1 C-846	3537	クリ	A層	A N53		両端切断材	4分割	4分割した材の左側縁を真っ直ぐに加工する。表面は調整あり。両端は削り痕はいる。裏面は二次加工なし。	140 80 60	
図96-3	H39 C-867	3141	クリ	B層	A N54		両端切断材	芯持丸木	丸木の裏面を削り取る。両端は芯を残して斜めに切断する。	307 77 82	
図96-4	H171-6 C-249	3503	ニレ属	B層	A N57		両端切断材	芯持丸木	下端面に切断痕全面にあり。表面上部には大きく削り取られた痕跡あり。表面の器面には削り痕あり。	186 77 68	
図96-5	H171-4 沢	3502	x	C層	A N57		両端切断材	芯持丸木	芯に近い部分が残存する。表面は平坦に削り取る。	145 59 40	樹皮付き
図96-6	H81-2 C-850	3427	クリ	A層	A N53		両端切断材	板目	両面に割り取り時の稜線残存する。全体に二次加工あり。表面上部に稜痕?右側縁には工具痕あり。両端は平滑に切断されている。	228 75 27	
図96-7	H133-7 C-1466-1	3471	アスナ ロ	B層	A N53		両端切断材	芯去削出	断面形を円形に削り出し、下部の先端を削り尖らせている。器面は非常に整っている。上端は削りによる切断と思われる。	126 25 25	両端炭化
図97-1	H38 C-1088	3134	カエデ 属	C層	A N55		用途不明加工材(容器状)	芯去丸木	芯部分を削り取る。全体に2次加工があり、側縁はほぼ同じ幅で加工される。木のうる部分の丸味を持った部位は内部が丸底状になっている。	342 154 79	木のうる部分を使用
図97-2	H219 C-1282	3072	クリ	C層	A N53		用途不明加工材(容器状)	芯去半割材	変形した丸木半割材の内側芯部分を取り去り、内側から外側に向かって緩やかに立ち上がる形状である。両端には削りを入れて丸味を帯びた形状にしている。	358 174 156	

岩渡小谷(4)遺跡

	遺物番号	No	樹種	層位	グリッド	遺構構成部位	製品の種類、木取り等		形態・技法	全長(mm) 幅 厚さ	備考
図97-3	H150-2 C-1794	3283	サクラ属	C層	A N55		用途不明加工材(容器状)	芯持丸木	木のこぶの木裏側を削り抜いて加工している。上部は破損。内部は丸味を帯びて削られている。	124 102 32	
図98-1	H157-6 C-1614	3295	クリ	C層	A N56		用途不明加工材(楕状)	板目	全体に器面が平滑で、両面に二次加工あり。表面左側は全体にカーブして立ち上がり、器壁が薄い。	279 106 16	
図98-2	H34 C-1169	3138	クリ	B層	A N53		用途不明加工材(楕状)	半割削出	半割材の芯部分を削り出し、表面に幅約10cmの平坦面を作り出す。上部に接合すると思われる炭化した破片が多数あり。裏面両側縁付近に削り取り痕あり。	464 199 95	内面炭化
図98-3	H205 C-1435-2	3281	サクラ属	C層	A N56		用途不明加工材(楕状)	3分割(扇形)	裏面は大きく削り取りされる。表面は平坦に削り取りされるが、削り取り痕あり。下部右側は丸味を帯びて加工。両側縁は真っ直ぐに加工される。	96 134 38	
図99-1	H23 C-1600	3111	ウルシ	C層	A N57		加工材	芯持丸木	裏面は両側に縁を残すよう内部を加工している。左側縁は真っ直ぐに加工する。表面は右側をやや深く削り出す。	383 140 74	
図99-2	H182 C-1654	3314	コナラ属コナラ節	C層	A N53		加工材	芯持丸木	丸木の外側を削り落とし、断面台形状にする。削り落とされた面はほぼ平坦である。	441 56 41	
図99-3	H180 C-1836	3037	コナラ属コナラ節	C層	A N57		丸木材	芯持丸木	丸木の分枝部分を切断。右側縁下部から下端にかけて大きく削りあり。上端は破損している。	601 109 70	
図99-4	H178 C-386	3302	オニグルミ	B層	A N55		丸木材	芯持丸木	丸木を両側縁を真っ直ぐに加工し、両面にも削りあり。両端は破損している。	730 254 105	
図99-5	H186 C-1536	3023	クリ	C層	A N53		丸木材	芯持丸木	丸木の表面下部右側縁を削る。表面上部から端部にかけて削りあり。	486 82 71	
図100-1	H176 C-358	3005	クリ	B層	A O52		丸木材	芯持丸木	全体に削り入る。下端は伐採時の痕跡。芯部が一部残存。	1195 162 98	
図100-2	H175 C-903	3027	クリ	B層	A O53		丸木材	芯持丸木	丸木を四面を作り出すように全体的に薄く削り、断面形隅丸方形に仕上げている。下部左側縁は斜めに大きく削られ、下端を尖らす。上端斜めに削られ、おそらく、切り離し時の加工痕と思われる。	835 100 88	
図100-3	H9 C-1372	3370	イヌエンジュ	C層	A N55		丸木材	芯持丸木	上端に切断痕あり。下端は不明。枝部に切断痕あり。	421 37 32	
図100-4	H60 C-1863	3344	キハダ	C層	A N56		丸木材	芯持丸木	外面の削りはほとんどなく、下部の一方所に大きく割れが入る。工具による削りの可能性もある。	616 55 35	
図101-1	-	-	オニグルミ外皮	B層	A N57		擦痕のあるクルミ		クルミ頭部は打撃により破損し、縫合線に沿って二分割されている。この外面を磨ったものと考えられ、明瞭な擦痕が残る。	23 22 8	
図101-2	C-237		ヒョウタン果皮	B層	A N57		ヒョウタン果皮片		ヒョウタンの下部に近い部分。	41 56 4	
図101-3	C-502		マタタビ属(ツル)	B層	A N57		ツル植物を枝に巻いたもの		ウルシの枝にツル植物を巻き付けている。枝に巻き付けたツルと別のツルを結び枝に巻いたツルを固定している。	111 58 16	全体を計測
図101-4	土壌サンプル		ツル植物	不明	不明		ツル植物を編んだもの		棚編み?おそらく籠の胴部かと思われる。二本一組のツルを横に、一本のツルを縦にして編む。	38 22	
図101-5	沢Vベルト	3581		C層	A N57		樹皮巻き	幅広、両端巻、折畳み	剥離法による剥ぎ取りか。端部は破損している。	最大幅57 最大厚0.7	推定長300
図101-6	C-754	3576		B層	A N56		樹皮巻き	幅広	剥離法による剥ぎ取りか。端部は破損している。	最大幅91 最大厚0.9	推定長280
図102-1	C-193	3564		不明	不明		樹皮巻き	厚手巻	抜き取り法?	最大幅71 最大厚5	推定長170
図102-2	C-664	3565		B層	A N54		樹皮巻き	普通巻	剥離法による剥ぎ取りか。	最大幅95 最大厚1	推定長560
図102-3	C-319	3595		B層	A N56		樹皮巻き	普通巻	剥離法による剥ぎ取りか。	最大幅70 最大厚0.9	推定長155
図102-4	C-1363	3577		B層	A N53		樹皮巻き	普通巻	剥離法による剥ぎ取りか。	最大幅55 最大厚0.8	推定長90
図102-5	C-882	3568		B層	A N54		樹皮巻き	普通巻	剥離法による剥ぎ取りか。	最大幅48 最大厚1.2	推定長160
図102-6	C-1308	3585		C層	A N57		樹皮巻き	普通巻	剥離法による剥ぎ取りか。	最大幅48 最大厚1.2	推定長175
図102-7	C-399	3573		B層	A N54		樹皮巻き	大巻	剥離法による剥ぎ取りか。表面にコブあり。	最大幅55 最大厚1.2	推定長300
図102-8	C-591	3586		B層	A N54		樹皮巻き	普通巻	剥離法による剥ぎ取りか。表面にコブあり。	最大幅50 最大厚0.8	推定長160
図102-9	C-726	3587		A層	A N53		樹皮巻き	普通巻	剥離法による剥ぎ取りか。	最大幅40 最大厚0.9	推定長160
図102-10	C-726	3587		A層	A N53		樹皮巻き	普通巻	剥離法による剥ぎ取りか。	最大幅40 最大厚0.9	推定長185
図103-1	C-326	3561		B層	A N56		樹皮巻き	折畳み	剥離法による剥ぎ取りか。破損した樹皮片多数あり。	最大幅56 最大厚30	推定長200
図103-2	C-326	3561		B層	A N56		樹皮巻き	折畳み	剥離法による剥ぎ取りか。破損した樹皮片多数あり。	最大幅56 最大厚30	推定長160
図103-3	C-159	3578		B層	A N55		樹皮巻き	楕円形	剥離法による剥ぎ取りか。破損した樹皮片多数あり。	最大幅32 最大厚1.5	推定長470
図103-4	C-1348	3583		B層	A N53		樹皮巻き	両端巻	剥離法による剥ぎ取りか。破損した樹皮片多数あり。	最大幅50 最大厚1.7	推定長180
図103-5	C-734	3562		A層	A O53		樹皮巻き	普通巻	剥離法による剥ぎ取りか。破損した樹皮片多数あり。	最大幅74 最大厚2	推定長230
図103-6	C-1348	3583		B層	A N53		樹皮巻き	両端巻	剥離法による剥ぎ取りか。破損した樹皮片多数あり。	最大幅50 最大厚1.7	推定長180

土器観察表 1

図版番号	出土地点	出土層位	部 位	口 唇 ・ 口 縁	胴 部	口径 (mm)	器高 (mm)	底径 (mm)	分類	備 考
106-1	AM57 P2013・2123	A・B	口-胴	口縁上部に貝殻腹縁を斜めにして施文	貝殻腹縁を直角に施文、沈線	-	-	-		
106-2	AL57		口縁	口縁部断面三角形、縦方向に貝殻腹縁を斜めに施文。	横方向に貝殻腹縁を斜めに施文	-	-	-		
106-3	AN59-2 P665	C	底部付近	-	貝殻腹縁を斜めに施文	-	-	-		
106-4	AP59-4	B3	底部付近	-	貝殻腹縁を直角に浅く施文	-	-	-		
106-5	AN60-1	A	胴部	-	貝殻腹縁を斜めに施文	-	-	-		他の土器と貝の種類違う
106-6	AR50	B4	胴部	-	条痕文 貝殻腹縁を斜めに施文	-	-	-		
106-7	AN62-1 P597	A	胴部	-	貝殻腹縁を斜めに施文(押し引き文)	-	-	-		内面に条痕文あり
106-8	AN62-1	A1	胴部	-	貝殻腹縁を斜めに施文	-	-	-		内面に条痕文あり
106-9	AO60-2	A1	胴部	-	貝殻腹縁を斜めに施文	-	-	-		
106-10	AN61-3	A1	胴部	-	貝殻腹縁を斜めに施文	-	-	-		
106-11	AN59-2	B4	胴部	-	貝殻腹縁を斜めに施文	-	-	-		
106-12	AN59-2 P564	A	胴部	-	貝殻腹縁を直角に施文	-	-	-		
106-13	AN59-2 P568	A	胴部	-	貝殻腹縁を直角に施文	-	-	-		
106-14	AN61-1	A1	胴部	-	貝殻腹縁を斜めに施文	-	-	-		
106-15	AK57		胴部	-	貝殻腹縁を斜めに施文	-	-	-		
106-16	AN59-2 P204	A	胴部	-	貝殻腹縁を斜めに施文(押し引き文)	-	-	-		
106-17	AM56-2	A1	胴部	-	貝殻腹縁を斜めに施文(押し引き文)	-	-	-		
106-18	AN61-4	A1	胴部	-	貝殻腹縁を斜めに施文(押し引き文)	-	-	-		
106-19	AO58-3 P21	A	胴部	-	貝殻腹縁を斜めに施文(押し引き文)	-	-	-		
106-20	AO59-4 P724	A1	胴部	-	貝殻腹縁を斜めに施文	-	-	-		
106-21	AN59-1 P80	A	胴部	-	貝殻腹縁を斜めに施文(押し引き文)	-	-	-		
106-22	AN53 P2720	A	胴部	-	貝殻腹縁を斜めに施文(押し引き文)	-	-	-		
106-23	AK57		胴部	-	貝殻腹縁を斜めに施文(押し引き文)	-	-	-		
106-24	AR50		胴部	-	貝殻腹縁を斜めに施文(押し引き文)	-	-	-		
106-25	AM56 P2222	A	胴部	-	貝殻腹縁を斜めに施文(押し引き文)	-	-	-		
106-26	AM57 P2008	B	胴部	-	貝殻腹縁を斜めに施文	-	-	-		
106-27	AN58-4 P45	A	胴部	-	条痕文 沈線二条	-	-	-		
106-28	AM55 P2124	A	胴部	-	条痕文 沈線	-	-	-		
106-29	AO53-1	B	胴部	-	条痕文 沈線	-	-	-		
106-30	AN57-3	B5	胴部	-	条痕文 沈線	-	-	-		
106-31	AN58-4 P67	A	胴部	-	条痕文	-	-	-		
106-32	AN54 P2305	A	胴部	-	条痕文 沈線	-	-	-		
107-1	AO59-1 P686	C	口-胴下	結節 R 横回、RLR側圧	RLR横回	147	(230)	-	2	
107-2	AN52 P2878、AN53 P2874、AN53-3 沢 ベルト、AN54-1、AO53-2	C	完形	二波状、口唇RLR側圧、結節 R 横回、隆帯 RLR側圧	直前段反燃RRL横回	293	412	162	3	
107-3	AN59-3 P936~938ほか	C	口-胴下	四波状?、単1(R)横回	RLR横回	206	(272)	-	3	
107-4	AN58-3 P998	C	完形	R結節	RLR横回	101	185	70	3	
107-5	AO60-4 P826	C	口-胴下	単(R)横回、隆帯 刺突文	RLR横回	(180)	(311)	-	3	
108-1	AN57 P2871・2877・2856	C	完形	四波状、単1(R)横回 RL側圧	単1(R)縦回	232	575	142	3	
108-2	AO52-1	C	口-胴上	四波状、単1(R)横回 RLR側圧、隆帯 RLR側圧	単1(R)縦回	(144)	(158)	-	3	口唇上平坦
108-3	AO59-1 P668、AO58-4 P1033、AO59-1	C	完形	委託、RL側圧、単(R)横回、隆帯 単(R)横回	単(R)縦回	191	410	(126)	3	補修孔あり
108-4	AO60-1 P688	C	完形	単1(R)横回 RL側圧	単1(R)縦回	(178)	289	(108)	3	口唇上部平坦
109-1	AO59-1 P686	C	完形	二波状、単5(R)横回、LR側圧、隆帯 LR側圧	単5(R)縦回	205	384	106	3	
109-2	AN55 P2851・2847	C	口-胴上	単5(R)横回	単5(R)縦回	(252)	(142)	-	3	
109-3	AO58-1 P899	C	口-胴下	単5(R)横回 RLR側圧、隆帯 RLR側圧	RLR斜・横回	(150)	(272)	-	3	
109-4	AN57-4 沢 ベルト	C	口-胴下	四波状、単6(A)R・単4?、隆帯 RLR側圧	RLR斜回	171	(235)	-	3	
109-5	AO58-1	C	口-胴上	波状、単6(A)R横回 RLR側圧、隆帯 RLR側圧	RLR斜回	(218)	(143)	-	3	
110-1	AN59-3 P955	C	口-胴上	波状、口唇上RLR回、単6(A)R横回 RLR側圧、隆帯 RLR側圧	単1(R)縦回	(380)	(204)	-	3	
110-2	AO60-1 P683	C	完形	波状、単6(A)R横回、隆帯 刺突	単1(LR)縦回	102	210	76	3	

土器観察表 2

図版番号	出土地点	出土層位	部 位	口 唇 ・ 口 縁	胴 部	口径 (mm)	器高 (mm)	底径 (mm)	分類	備 考
110-3	AN58-3 P1029-1030	C	完形	単6A(R)横回 RL側圧、隆帯 RL側圧	RL斜回	156	348	98	3	補修孔あり
110-4	AO60-1 P687	C	略完形	一部波状、単6A(L)横回 RLR側圧、隆帯 RLR側圧	単1(L)縦回	(171)	(350)	113	3	
110-5	AO59-1 P685	C	完形	波状、単6A(L)横回、隆帯 単1(L)横回か単6A(L)横回	単1(R)縦回	(126)	(237)	87	3	
110-6	AN57 P2870	C	口-胴上	四波状、口端単縁(R)回、単6A(R)横回、隆帯 単1(R)横回	単1(R)縦回	(162)	(161)	-	3	口縁丸み
111-1	AO58-1	C	口-胴下	結1(LR・LR)横回 LR側圧、隆帯 LR側圧	RLR斜回	(162)	(197)	-	3	口唇上平坦
111-2	A59-1 P1003	C	口-胴上	-	結1?	(140)	(105)	-	3	
111-3	AO60-1 P689	C	略完形	緩い波状、単縁(R)横回 RLR側圧	単1(R)縦回	(153)	(257)	86	3	隆帯?の剥がれた痕跡あり
111-4	AO58-1, AO59-1, AN58-2 P618	C	略完形	隆帯 RLR側圧	単1(R)縦回	-	(326)	(116)	3	底...単1(R)回転文あり
111-5	AO58-1	C	口-胴上	単1(R)横回 LR側圧	単1(R)縦回	(244)	(151)	-	3	
111-6	AO59-1 P636, AN58-3	C	口-胴	単1(R)横回、RL側圧・LR側圧	単1(L)縦回	-	(163)	-	3	
112-1	AO59-4 P987 (887)?	B3	完形	委託、結1(LR・RL)・LR側圧	単1(L)・(R)	218	320	106	4	補修孔あり
112-2	AO60-1 P695・687	B3・5、C	口-胴下	緩い四波状、単1(R)側圧	RL斜回、結1(LR・RL)横回	173	311	-	4	方形基調
112-3	AO59-1 P609	C	完形	緩い波状、単1(R)側圧	RL斜回 結1(RL・LR)横回	(140)	(291)	(73)	4	胴部上中央に最大径、上げ底、口縁外反
112-4	AO59-1 P609	C	完形	緩い波状、単1(R)側圧	RL斜回 結1(LR・RL)横回	138	226	66	4	
113-1	AN59-2 P648	C	完形	単1(R)側圧	RLR斜回	(223)	359	(115)	4	口縁外反
113-2	AN59-2 P648	C	口-胴下	緩い波状、単1(R)側圧	結1(LR・RL)横回、RL斜回	(184)	(257)	-	4	
113-3	AO59-4 P615	C	口-胴上	波状、単1(R)側圧	LR横回?	(172)	(120)	-	4	摩擦激しい
113-4	AO59-4 P644	C	完形	単1(R)側圧、微隆帯 単1(R)側圧	RL斜回 結1(RL・LR)横回	(220)	(295)	(126)	5	胴部中央に最大径・自縄自巻き
113-5	AN59-3 P966	C	口-胴	RLR側圧、単6A(R)横回?、隆帯 RLR側圧	RLR斜回	-	-	-	3	
113-6	AN59-3 P924	C	口縁	RLR斜回	-	-	-	-	6	
113-7	AO58-4	C	口縁	RLR側圧・単1(R)横回	-	-	-	-	5	
113-8	AO59-4 P918	C	口縁	RL側圧・単1(R)横回	-	-	-	-	5	
113-9	AN59-3 P965	C	口縁	単6A(R)横回	-	-	-	-	3	
113-10	AN58-2 P926	C	口縁	結節(R)横回	-	-	-	-	3	
114-1	AO58-1 P829	C	胴-底	-	RLR斜回	-	-	126	7	底...RLR回転文あり
114-2	AO59-1 P60	C	胴-底	-	単1(R)斜回	-	-	129	7	底...RLR回転文あり
114-3	AN53-2	C	胴-底	-	RLR斜回	-	-	(102)	7	底...RLR回転文あり
114-4	AO59-4	C	底部	-	-	-	-	(99)	7	底...RLR回転文あり
114-5	AO58-4 P1033	C	底部	-	-	-	-	-	7	底...RLR回転文あり
114-6	AO53PN3SW P2885	C	胴-底	-	RLR斜回	-	-	81	7	底...RLR回転文あり
114-7	AN59-2	C	底部	-	RLR回転	-	-	(108)	7	底...RLR回転文あり
114-8	AO58-4 P1021	C	胴-底	-	直前段反燃??	-	(60)	71	7	底...直前段反燃??
114-9	AO58-1	C	底部	-	-	-	-	-	7	底...RLR回転文あり
114-10	AO58-1	C	胴-底	-	直前段反燃??	-	-	(87)	7	底...直前段反燃??
114-11	AO59-4 P579	C	底部	-	-	-	-	(72)	7	底...RLR回転文?
114-12	AO59-2	C	口縁	単6A(R)・結節(R)隆帯 結節(R)	-	-	-	-	2	
114-13	AN56 P2887	C	略完形	単1(R)横回・縦回 隆帯 単1(R)横回	-	-	(103)	(60)	9	小型土器
114-14	AN57 P2868	C	略完形	単1(R)横回	RLR回転紋	(75)	(72)	42	9	小型土器
114-15	AN58-2 P828	C	口-胴上	RLR斜回	RLR斜回	(45)	(63)	-	9	小型土器
114-16	AN59-2 P1022	C	完形	単1(R)横・縦回	単1(R)横・縦回	82・136	71	74・105	9	器種 鉢
114-17	AN57-2	C	口-胴下	結節(R)横回	RLR回転紋	(104)	(102)	(50)	9	小型土器
114-18	AO59-4 P957	C	略完形	結節(R)横回	RL横回?	(52)	(58)	32	9	小型土器
114-19	AN57	C	完形	-	-	(32)	(67)	4	9	小型土器
115-1	AO60-2 P678	B5	完形	波状、R結節、隆帯 刺突	RL横回	153	232	98	3	
115-2	AO60-2 P680・679、AO59-2	B5・C	完形	二波状、単1(R)横回 RLR側圧	RLR斜回	(172)	255	95	3	口端外反
115-3	AN59-3 P862・905、AN60-2	B4・5	略完形	緩い波状、単1(L)横回	単1(L)横回	(146)	(151)	-	3	口縁丸み
115-4	AN55、AN54 P2643・2653	B	口-胴上	結節(LR)横回、隆帯 RLR横回 RLR側圧	RLR斜回	(184)	(108)	-	3	
115-5	AN54 P2655・2680	B	口-胴上	R結回 RLR側圧、隆帯 RLR側圧	単1(R)縦回	(194)	(81)	-	3	
115-6	AN54 P2853・2667、AN56	B・C	略完形	波状、口唇単1(R)回、単1(R)横・縦回	単1(R)縦回	(132)	(187)	96	3	
115-7	AO61-1 P731	B4	口-胴上	単1(L)横回 RLR側圧、隆帯 RLR側圧	RL斜回	(172)	(141)	-	3	補修孔あり
115-8	AN56 P2881、AN54 P2678	B・C	口-胴上	波状、隆帯 単1(L)横回 RL側圧	RL斜回(多条)	(206)	(139)	-	3	
116-1	AN59-2 P800	B3	略完形	単1(R)横回 RLR側圧	単1(R)縦回	(152)	(261)	110	3	

土器観察表3

図版番号	出土地点	出土層位	部位	口唇・口縁	胴部	口径 (mm)	器高 (mm)	底径 (mm)	分類	備考
116-2	AM55 P2199	B	口-胴下	単1(R)横回、LR側圧、隆帯 単1(R)横回、LR側圧	単1(R)縦回	-	(258)	-	3	
116-3	AN57 P2807・2856、AN55 P2677、AN55-4	B・C	口-胴下	四波状、単1(R)側圧、単1(L+結節)横回、隆帯 単1(R)側圧	単1(L)縦回	233	(435)	-	3	
116-4	AN56 P2779 AN57	B・C	口-胴下	四波状、口唇単1(R)回、隆帯、単1(R)横回、RLR側圧	単1(R)縦回	185	(305)	-	3	
116-5	AO59-1、AN59-3、AO59-1 P686	B4、C	口-胴下	口唇上単1(R)回、単1(R)横回 RLR側圧、隆帯 RLR側圧	単1(R)縦回	229	(242)	-	3	口縁・胴部の結条体は異なる
117-1	AN54 P2873	B	完形	波状、単4(R)横回、隆帯 単縦(R)横回	単1(L)縦回	115	188	76	3	
117-2	AN54 P2854、AN55	B・C	口-胴上	波状、単6(A)R)横回、RLR側圧、隆帯 RLR斜回 RLR側圧、沈線	RLR斜回 RL結回	(300)	(176)	-	3	
117-3	AO61-1 P732、AO60-2 P680	B4	口-胴上	四波状、単1(R)縦回 (単5(R)横回 RLR側圧)	単1(R)縦回	(178)	(172)	-	3	方形基調、補修孔あり
117-4	AN53-3	B	口-胴上	単6(A)R)横回、隆帯 単縦(R)側圧回	直前段反燃RRL斜回	(114)	(99)	-	3	外面炭化物付着
117-5	AN57 P2361	B	口-胴上	波状、口唇上単1(R)回、単6(A)R)横回 RLR側圧、隆帯 RLR側圧	単1(R)縦回	(228)	(116)	-	3	
117-6	AO59-3 P810	B5・C	口-胴下	単6(A)R)横回 RLR側圧、隆帯 RLR横回	RLR斜回	(176)	(207)	-	3	
117-7	AN54-1 P2739	B	口-胴上	波状、単6(R)横回 RLR側圧、隆帯 RLR側圧	単1(R)側圧 縦回	(172)	(164)	-	3	外面炭化物付着
117-8	AN55 P2668	B	口-胴上	波状、RL横回 RL側圧、隆帯 RL側圧、沈線	RL斜回	(192)	(113)	-	3	
118-1	AN53-3	B	口-胴下	RLR横回 浅い沈線	RLR斜回	-	(216)	-	6	
118-2	AN57 P2188	B	口(付近)胴上	RLR側圧 沈線	RLR斜回	-	(162)	-	6	
118-3	AN60-1	B5	胴	LR側圧	RLR斜回	-	(112)	-	6	
118-4	AN60-3 P682・696	B4	口-胴下	単1(R)横回 LR側圧	直前段反燃RRL斜回	(270)	(300)	-	3	口縁丸み
118-5	AN61-2 P632	B4	口-胴下	単1(R)横回、LR側圧	直前段反燃RRL斜回	(216)	(274)	-	3	摩耗激しい
119-1	AN61-4、AN61-1	B4	口-胴下	緩い波状、単1(R)横回 LR側圧	直前段反燃RRL斜回	(296)	(307)	-	3	口縁丸み
119-2	AN59-3	B4	口-胴上	緩い波状、LR側圧	RLR横回・斜回	(172)	(99)	-	4	
119-3	AN60-3 P658	B5	口-胴下	単1(R)側圧	RLR斜回、結1(LR・RL)	203	230	-	4	
119-4	AN61-2 P666	B5	口-胴下	単1(R)側圧	RLR斜回	(232)	(278)	-	4	口縁外反
120-1	AO59-4 P805	B3	完形	緩い四波状、単1(R)側圧	RL斜回 結1(LR・RL)横回	191	(385)	(106)	4	口縁外反、頂部下四力所に横槽円形の穿孔、やや方形基調
120-2	AO59-4 P804	B3	完形	緩い四波状、単1(R)側圧	結1(LR・RL)横回、RL斜回	200	295	95	4	補修孔あり
120-3	AO59-4 P893	B3	略完形	緩い波状、単1(R)側圧	RL斜回	(174)	(276)	(92)	4	口縁外反、方形基調か
120-4	AO60-1 P649	B4	口-胴下	緩い波状、単1(R)側圧	RLR斜回	(191)	(273)	-	4	口縁外反
121-1	AO59-4 P817	B3	完形	単1(R)側圧	RL斜回 結1(LR・RL)横回	(218)	(336)	95	4	口縁外反
121-2	AO60-1 P657	B4	完形	緩い四波状、口唇LR回、単1(R)側圧	結1(LR・RL)横回	(156)	(205)	(72)	4	方形基調
121-3	AN59-2	B4	口-胴上	緩い波状、単1(R)側圧、RLR側圧	RLR斜回	(190)	(181)	-	4	
121-4	AO59-4 P805	B3	口-胴下	緩い波状、口唇LR回、単1(R)側圧	RL斜回、結1(LR・RL)横回	(195)	(290)	-	4	口縁外反
121-5	AN59-3 P616・629	B4・5	口-胴下	緩い四波状、単1(R)側圧、口唇RL横回、細隆帯 単1(R)側圧	直前段反燃RRL斜回	(226)	(283)	-	4	
122-1	AN59-3	B4	完形	単1(R)側圧	結1(LR・RL)横回、RL斜回	194	(369)	(108)	4	
122-2	AO59-4 P814・817	B3	完形	単1(R)側圧	RL斜回 結1(LR・RL)横回、RLR斜回	166	346	(82)	4	口縁外反結束・波頂部、口縁中心は一致しない
122-3	AN59-3 P630 AN60-2	B4	略完形	単1(R)側圧	RL斜回	(171)	24	90	4	
122-4	AO59-4 P888	B3	完形	緩い波状、LR側圧	結1(LR・RL)横回	(143)	(225)	66	4	
122-5	AN58-3 P799、AN59-3 P806・807・902	B3	完形	緩い波状、口唇LR回、単1(L)側圧	結1(LR・RL)横回RLR斜回、単1(L)縦回	162	206	68	4	方形基調、胴部検討
123-1	AO59-4 P803	B3	略完形	緩い波状、LR側圧	RL斜回	(184)	(239)	90	4	
123-2	AO59-4 P818、AO59-3	B3・4	口-胴上	緩い波状、単1(R)側圧	RL斜回、結1(LR・RL)横回	(190)	(222)	-	4	
123-3	AN59-3	B4	口-胴上	波状、口唇上LR回、LR側圧	結1(LR・RL)横回、RLR斜回	(230)	(172)	-	4	
123-4	AN59-3 P606	B4	口-胴上	緩い波状、単1(R)側圧	結1(LR・RL)横回、RL斜回	(196)	(142)	-	4	
123-5	AO60-3 P793	B3	口-胴上	波状、LR側圧	RLR斜回	(210)	(90)	-	4	
123-6	AO59-4 P831	B3	完形	緩い四波状、単1(R)側圧	RLR斜回 結1(LR・RL)横回	158	(192)	(68)	4	方形基調
123-7	AO60-3 P663・664	B5	口-胴上	波状、単1(R)側圧	直前段反燃RRL斜回	(156)	(100)	-	4	自縄自巻
124-1	AN59-3 P889	B3	口-胴下	単1(R)側圧	結1(LR・RL)横回	(150)	229	-	4	口縁やや外反
124-2	AO59-4 P814・817	B3	完形	緩い四波状、口唇LR回、LR側圧	RLR斜回 結1(RL・LR)横回	(218)	(287)	(110)	4	口縁外反
124-3	AN60-3 P760	B3	略完形	単1(R)側圧	結1(LR・RL)横回、RL斜回	(173)	(303)	(90)	4	胴部中央に最大径全体に炭化
124-4	AN60-2 P608・614	B4・5	口-胴下	緩い四波状、単1(R)側圧	RLR斜回 結1(LR・RL)横回	(235)	(307)	-	4	
125-1	AN61-1	B4	完形	緩い波状、結1(LR・RL)横回 LR側圧	RLR斜回	(153)	(192)	70	4	断面丸い



土器観察表 4

図版番号	出土地点	出土層位	部位	口 唇 ・ 口 縁	胴 部	口径 (mm)	器高 (mm)	底径 (mm)	分類	備 考
125-2	AO59-4 P895	B 3	完形	LR側圧	RRL斜回	169	233	80	4	口縁外反
125-3	AN61-4	A 1・ B4・B5	口～胴上	緩い波状、結1(LR・RL)横回 LR側圧	RRL斜回	(214)	(92)	-	4	
125-4	AN61-4	B 4	口～胴上	波状、口唇LR回、結1(LR・RL)横回 LR側圧	RRL斜回	(204)	(81)	-	4	
125-5	AO59-4 P804・ 805	B 3	完形	緩い波状、RL横回?、結1(RL・LR)横回 LR側圧	RRL横回	(182)	256	(88)	4	
125-6	AN59-3 P630	B 4	略完形	緩い波状、単結側圧?	結1(LR・RL)横回	144	220	86	4	胴部中央最大径
125-7	AO59-4 P819	B 1	完形	緩い波状、LR側圧	LR横回、RRL斜回	144	64	173	4	
126-1	AO59-4 P813	B 3	完形	結1(LR・RL)横回	RRL斜回、前々段多条RRL斜回	(189)	(361)	(78)	4	口縁外反・結束の方向が変わるのが4カ所、4～5cm単位で緩い波状になり、全体で八波状くらい?一部欠けているため、不明
126-2	AO60-1 P645	B 4	完形	四波状、結1(LR・RL)横回	RL斜回、結1(RL・LR)横回	(134)	(282)	(64)	4	胴部中央に最大径、方形基調
126-3	AN59-3	B 4	口～胴上	波状、結1(LR・RL)横回	RRL斜回	(148)	(136)	-	4	
126-4	AN59-3 P616・ 631	B 4	略完形	結1(LR・RL)横回	RRL斜回	(268)	(286)	(104)	4	
127-1	AN60-2 P642・ 655 P539、AN 59-3 P630	B4・5	完形	単結R側圧、隆帯単結R側圧	多線R縦回	(303)	498	147	5	
127-2	AO60-1 P657	B 4	完形	単1(R)側圧	RL斜回 結1(LR・RL)横回	(174)	(257)	(84)	5	方形基調、頂部に三角形くる
127-3	AN59-3 P617・ 639	B 5・ C	口～胴下	単1(R)側圧、微隆帯 単1(R)側圧	結1(LR・RL)横回、RRL斜回	(190)	(137)	-	5	口縁外反
127-4	AN60-2 P647	B 5	口～胴下	緩い波状、微隆帯、単1(R)側圧	結1(LR・RL)横回、RL斜回、 単1(R)縦回?	(232)	(307)	-	5	口唇やや外側に開く、口縁、自縄自巻?
128-1	AN60-2 P661	B 5	完形	口唇RL回、R側圧	結1(LR・RL)横回、RRL斜回	235	293	(140)	5	
128-2	AN59-3 P801・ 802	B 3	略完形	緩い四波状、単1(R)側圧	結1(LR・RL)横回、RL斜回	(212)	264	(110)	5	胴部中央付近の結束を境に縄文を変えている。
128-3	AO60-1 P651・ 657	B 4	口～胴下	緩い波状、口唇RL横回、LR側圧	RL斜回	(216)	(230)	-	5	
128-4	AO52-4、AO53-1	B・C	口～胴上	単1(R)側圧	直前段反燃RRL斜回、結1(LR・RL)横回	(238)	(216)	-	5	自縄自巻
128-5	AN59-3 P606	B 4	口～胴上	緩い波状、口唇LR横回、単1(R)側圧	結1(LR・RL)横回、RL斜回	(199)	(63)	-	5	
128-6	AN60-3	B 5	口～胴上	単1(R)側圧	結1(LR・RL)横回、RRL斜回	182	(136)	-	5	
128-7	AN61-3 P654	B 5	口～胴上	緩い波状、単1(R)側圧	結1(LR・RL)横回、直前段反燃RRL斜回	(226)	(133)	-	5	
129-1	AN59-3 P628	B	完形	単1(R)側圧	単1(L)縦回	199	390	112	5	
129-2	AO53-1、AO52-4	B	略完形	R・L側圧、R結回	単1(R)縦回	(164)	(271)	(100)	5	
129-3	AN59-3 P606	B 4	口～胴下	R側圧	RRL斜回、結1(LR・RL)横回	(180)	(187)	-	5	
129-4	AN60-2 P608・ 336	B 4	完形	LR側圧	結1(LR・RL)横回、RRL斜回	262	327	140	5	
129-5	AN59-3 P640	C	口～胴上	LR側圧、隆帯 LR側圧	結1(LR・RL)横回、RL斜回	192	(168)	-	5	口唇三角形
130-1	AO57- P2380・ 2379	B・C	略完形	直前段反燃?	直前段反燃?	114	124	70	6	底...直前段反燃?
130-2	AO59-4 P816	B 3	口～胴上	緩い波状、単1(R)側圧	R結回、単1(R)縦回	(215)	-	-	5	
130-3	AN60-1・2	A 1、 B4・5	口～胴	LR側圧	結1(LR・RL)横回、RL斜回	-	(184)	-	6	
130-4	AN59-3 P631	B 4	口～胴上	単1(R)側圧?	結1(LR・RL)横回	(222)	(61)	-	6	
130-5	AO59-4 P819	B 3	口～胴上	緩い波状、R側圧 肩部の屈曲点に刺突文	直前段反燃RRL斜回	(160)	(139)	-	5	
130-6	AN58-2 P193、AN 59-3 P628・629	B 4	略完形	波状、L側圧	単1(L)縦回	(160)	50	134	5	胴部下半で屈曲
130-7	AO62-2	B 3	完形	RL側圧	RRL斜回	(199)	(348)	(97)	5	断面三角
131-1	AN59-3 P852	B 3	口縁	単6A(R)横回・隆帯 RRL側圧	-	-	-	-	3	
131-2	AN59-3 P1019	B 1	口～胴	単5(R)横回・単1(R)・隆帯 RRL側圧?	RRL斜回?	-	-	-	3	
131-3	AN59-3 P906	B 5	口縁	単5(R)横回・RRL側圧	-	-	-	-	3	
131-4	AO59-4 P856	B 3	口～胴	単5(R)横回	RRL斜回?	-	-	-	3	
131-5	AN59-3 P901	B 5	口縁	単6A横回	-	-	-	-	3	
131-6	AN59-3 P857	B 3	口～胴	単6A横回	RRL斜回	-	-	-	3	
131-7	AO59-4 P912	B 5	口～胴	単6A横回	RRL斜回	-	-	-	3	
131-8	AO59-3 P988	B 3	口～胴	隆帯RRL側圧?	RRL斜回	-	-	-	3	
131-9	AO59-4 P894	B 1	胴	-	RRL斜回?	-	-	-	7	
131-10	AN59-3 P833	B 1	口～胴	単6A(R)横回 隆帯 RRL側圧?	RRL斜回	-	-	-	3	
131-11	AN59-3 P840	B 3	口～胴	単6A(R)横回 隆帯 RRL側圧?	RRL回転紋?	-	-	-	3	
131-12	AN59-3 P862	B 3	口縁	単1(L)縦回?	-	-	-	-	3	
131-13	AO59-3 P797	B 2	口～胴	RRL横回・LR側圧	RRL斜回	-	-	-	4	

土器観察表 5

図版番号	出土地点	出土層位	部位	口唇・口縁	胴部	口径 (mm)	器高 (mm)	底径 (mm)	分類	備考
131-14	AO59-4 P836	B 1	口-胴	結1(LR・RL)横回・単1側圧	RLR斜回?	-	-	-	4	
131-15	AO59-4 P820	B 1	口-胴	LR側圧	結1(LR・RL)横回・RLR斜回	-	-	-	4	
131-16	AN59-3 P851	B 3	口-胴	単1(R)側圧	結1(LR・RL)横回・RLR斜回	-	-	-	4	
131-17	AO59-4 P810	B 1	口-胴	単1側圧?	結1(LR・RL)横回	-	-	-	4	
131-18	AO59-4 P817	B 1	口-胴	単1側圧?	結1(LR・RL)横回・RLR斜回	-	-	-	4	
131-19	AO59-4 P894	B 1	口-胴	RL側圧	結1(LR・RL)横回・RLR斜回	-	-	-	4	
131-20	AO58-3 P795	B 3	胴-底	-	?	-	(75)	67	7	
131-21	AN57 P2583	B	完形			73	82	53	9	小型土器
131-22	AO59-2 P835	B 6	略完形	単1(R)横回	単1(R)縦回	83	102	50	9	小型土器
131-23	AO59-4 P814	B 1	口-胴	LR側圧	結1(LR・RL)横回・RLR斜回	-	-	-	4	
131-24	AO57 P2382	B	完形	LR側圧	RLR横回	86	83	54	9	小型土器
131-25	AN59-3 P606	B 4	口-胴	RL側圧	単1(L)縦回	72	84	-	9	小型土器
132-1	AO61-1, AO59-3 P837	A 2・B 6	口-胴下	結訖LR横回、隆帯 浅い円形のくぼみ	直前段反燃RR斜回・横回	(168)	(214)	-	3	
132-2	AM54 P2499	A	口-胴	単1(R)横回 LR側圧	RLR斜回	216	294	105	3	
132-3	AO60-2	A 1	口-胴下	波状、単6(A)横回 RLR側圧	単1(L)縦回	(106)	(138)	-	3	
132-4	AP59-4 P823	A 2・1	口-胴下	波状、単5(R)横回 LR側圧、隆帯 LR側圧 R側圧	単1(R)縦回	187	(388)	-	3	
132-5	AN58-3 P1031, AO59-4 P855, AP61-1	A 2, B 4・C	口-胴上	四波状? 単1(R)縦回 単5(R)横回 沈線、隆帯 単1(R)縦回 沈線	単1(R)縦回	(218)	(97)	-	3	口端平坦
132-6	AN55P2738	A・B	口-胴上	波状、単5(R)横回 RLR側圧、隆帯 RLR側圧	RLR斜回	(168)	(106)	-	3	口端細い
132-7	AN55 P2482・2623・2441	A・B	口-胴上	単6(R)横回 RLR側圧	単1(L)縦回	(162)	(97)	-	3	
133-1	AN59-3 P763	A 2	略完形	緩い波状、R側圧	RLR斜回	(151)	230	100	3	断面三角形
133-2	AM55 P2450・2541・2576・2479・2613・2764・2766・2837・2840・2842・2844・2879	A・B	口-胴	隆帯 RLR側圧	RLR斜回	-	148	-	3	
133-3	AP60-4 P646, AO61-1	B 3・A 1	口-胴下	単1(R)側圧	RL斜回、直前段反燃RRL? 斜回、結1(LR・RL)横回	(206)	(280)	-	4	口縁外反・自縛自巻
133-4	AN552500・2778・2619	A・B	口-胴上	緩い波状、単1(R)横回 LR側圧	単1(L)縦回	(222)	(194)	-	3	
133-5	AN61-2 P719	A 2	略完形	RLR側圧?	RLR横回	(176)	230	-	3	
133-6	AO59-4 P765	A 2	口-胴上	単1(R)側圧	結1(LR・RL)	(158)	(106)	-	5	
133-7	AO60-1 P670	A	口-胴下	単1(R)側圧	RL斜回、結1(LR・RL)	-	(201)	-	4	口縁外反
134-1	AN61-1 P453・454・457・467・491	A	口-胴下	単1(R)側圧	RLR斜回	(200)	(351)	-	4	口端外反
134-2	AN54 P2811・2813	A	完形	緩い四波状、LR側圧	直前段反燃RRL斜回	268	493	141	4	
134-3	AP60-4 P656	A 1	口-胴下	波状、LR側圧	直前段反燃RRL斜回	196	(355)	-	4	
134-4	AO60-2 P610	A 2	口-胴上	緩い波状、単1(R)側圧	RLR斜回、結1(LR・RL)横回	(200)	(131)	-	4	
135-1	AN60-2 P642, AO60-2	A 1・B 6	略完形	単1(R)側圧、口唇LR横回	結1(LR・RL)横回、RL斜回	(202)	274	85	4	
135-2	AO62-1	A 2	口-胴上	緩い四波状、単1(R)側圧	RL斜回、結1(LR・RL)横回	(190)	(136)	-	4	
135-3	AO59-3 P522・319	A	口-胴上	緩い波状、単1(R)側圧	RLR斜回、結1(LR・RL)横回	(196)	(163)	-	4	方形基調
135-4	AO61-2, AP61-1 P653	A 2	口-胴上	緩い四波状、単1(R)側圧	結1(LR・RL)横回	(150)	(104)	-	4	
135-5	AN59-3 P763	A 2	略完形	緩い波状、口唇LR回、LR側圧	結1(LR・RL)横回、RL斜回	(212)	(263)	(112)	4	
135-6	AP59-4 P393	A	口-胴上	緩い波状、LR側圧	R結回?、RLR斜回	(234)	(80)	-	4	
135-7	AO60-2 P394	A	略完形	単1(R)側圧	RLR斜回	(203)	311	(99)	4	口縁外反
136-1	AO61-4 P667	A	完形	緩い四波状、結1(LR・RL)横回 LR側圧	RLR斜回	179	262	85	4	口縁外反やや方形基調
136-2	AN58-4 P94・95・56	A	口-胴下	緩い波状、結1(LR・RL)横回	直前段反燃RRL斜回	(158)	(159)	-	4	
136-3	AN59-3 P722	A 2	口-胴下	緩い波状、結1(LR・RL)横回	直前段反燃RRL斜回	(150)	179	-	6	摩耗激しい
136-4	AO59-4 P765	A 2	口-胴下	緩い四波状、結1(LR・RL)横回	RLR斜回	206	(226)	-	4	口縁外反
136-5	AN60-3 P710	A 2	口-胴下	結1(LR・RL)横回	RLR斜回	(206)	(230)	-	6	口縁外反
136-6	AO59-4 P764	A 2	口-胴上	LR横回・結1(LR・RL)横回	直前段反燃RRL斜回	(174)	(178)	-	6	
137-1	AM57 P2600・2005 P2163, AN 57 P2004, AM59	A・B	完形	口唇LR回?、RL側圧	結1(LR・RL)横回、RL斜回	244	390	143	5	
137-2	AN59-3 P399	A	口-胴下	R側圧、微隆帯	結1(LR・RL)横回、RLR斜回	230	(313)	-	5	口縁肥厚断面三角
137-3	AP60-4 P656	A 2	口-胴上	緩い波状、単1(R)側圧、微隆帯 単1(R)側圧	R結回、結1(LR・RL)横回、RLR斜回	(214)	(160)	-	5	
137-4	AN59-3 P399・400	A	口-胴下	LR側圧、微隆帯 LR側圧	RL斜回 結訖(R)横回	(240)	(297)	-	5	

土器観察表 6

図版番号	出土地点	出土層位	部 位	口 唇 ・ 口 縁	胴 部	口径 (mm)	器高 (mm)	底径 (mm)	分類	備 考
137-5	AN54 P2815・2798	A	口～胴下	RL側圧	結1(LR・RL)横回、RL斜回	(186)	(183)	-	5	断面細くなる
138-1	AN59-2 P551	A	完形	LR側圧	結1(LR・RL)横回、単1(R)縦回	209	361	123	5	
138-2	AO60-2 P528	A	完形	単1(R)側圧、微隆帯 単1(R)側圧	RL斜回 結1(LR・RL)横回	(221)	362	(128)	5	口縁厚い
138-3	AO60-2	A 1	完形	緩い四波状、単1(R)側圧、細隆帯 単1(R)側圧	RRL斜回 結1(RL・LR)横回	(228)	(335)	(110)	5	
138-4	AO59-4 P736	A 2	口～胴下	緩い波状、LR側圧	RRL斜回、結1(LR・RL)横回	(202)	(275)	-	5	
139-1	AP60-4 P656	A 2	口～胴下	RL横回、R・L側圧	単1(L)縦回と結1(LR・RL)横回が交互に施文	(176)	(190)	-	5	口縁部肥厚、段になる
139-2	AP60-4 P656	A 2	口～胴下	波状、LR側圧	RL斜回、結1(LR・RL)横回	(156)	(212)	-	5	
139-3	AP60-4 P656	A 2	口～胴上	緩い波状、LR側圧、細隆帯 LR側圧	RL斜回	(240)	(235)	-	5	
139-4	AN54 P2532	A	口～胴上	緩い波状、単1(R)側圧	結1(LR・RL)横回	190	(66)	-	5	
139-5	AN59-4 P400	A	略完形	口唇RL横回、LR側圧、隆帯 LR側圧	結筋R横回、RL斜回	(217)	(357)	(128)	5	
139-6	AY 46		口～胴上	LR横回、R・L側圧	R斜回、単1(R)縦回	(200)	(77)	-	5	
139-7	AP60-4 P656	A 2	口～胴上	単1(R)側圧、口唇RL横回	RL斜回、結1(LR・RL)横回	(230)	(235)	-	5	
140-1	AN55 P2431	A	口～胴下	緩い波状、単1側圧、微隆帯 刺突	RL斜回 結1(LR・RL)横回	(306)	(212)	-	5	自縄自巻
140-2	AN53 P2795・2793	A・B	口～胴上	単1(R)側圧、RL側圧・LR側圧	RL斜回	(245)	(148)	-	5	
140-3	AO59-4 P724	A 2	完形	単1(R)側圧	RL斜回、結1(LR・RL)横回	(198)	(210)	(114)	5	
140-4	AP60-4 P646	A 2	口～胴上	緩い波状、単1(R)側圧	RL斜回、結1(LR・RL)横回	(180)	(81)	-	5	
140-5	AN54 P2072	A	口～胴上	緩い波状、口唇R横回、R側圧	結1(LR・RL)横回、RL斜回	(164)	(103)	-	5	
140-6	AN58・59 P125・83・82・126・6・183・190・231・400・121・399ほか	A	口～胴下	口唇RL横回、RL側圧、胴部との境界に段あり	結1(LR・RL)横回、単1(L)縦回	(156)	(284)	-	5	
140-7	AO62-3	A 2	口～胴上	緩い波状、単1(R)側圧、口唇RL横回	RRL斜回、結1(LR・RL)横回	(208)	(209)	-	5	
141-1	AN54 P2074・2471・2075	A	口～胴下	R・L側圧と単5(R)側圧を交互に施文、微隆帯	単1(R)縦回	300	(324)	-	5	胴部左巻き
141-2	AO60-1 P669	A	口～胴上	緩い四波状、単1(R)側圧	結1(LR・RL)横回	(174)	(133)	-	5	
141-3	AO60-2 P610	B 2	口～胴下	結1(LR・LR)横回、RL側圧	LR斜回	(144)	(152)	-	5	
141-4	AO59-1 P541	A	口～胴上	緩い波状、LR側圧	RL斜回・結1(LR・RL)横回	(200)	(116)	-	5	
141-5	AN54 P2788	A	口～胴上	緩い波状、口唇R側圧、LR側圧	単1(R)縦回、結1(LR・RL)横回	(168)	(106)	-	5	
141-6	AN60-3 P660・710	A 2・B 5	完形	結1(LR・RL)横回 RL斜回	結1(LR・RL)横回、直前段反燃RRL斜回	166	220	92	5	補修孔あり。方形基調
141-7	AN59-4 P400 AN59-2 P564	A	完形	結1(LR・LR)横回	RL斜回	138	234	84	5	
142-1	AN54 P2074	A	口～胴	結1(LR・RL)横回	RL斜回	(226)	(164)	-	5	
142-2	AM56 P2340・2351・2350・2348	A	口～胴上	口唇上RL横回、結1(LR・RL)横回	単1(LR)縦回	(172)	(162)	-	5	
142-3	AP60-4	A	底部	-	結1横回?	-	-	-	7	
142-4	AN54 P2798・2814	A	口～胴上	R・L側圧、沈線	単1A R・L縦回、縄の結筋あり	-	60	-	5	
142-4	AN54 P2798	A	胴～底		単1A R・L縦回・縄の結筋あり	-	136	96	5	胴部上半は含めない器高
142-5	AO60-2 P616	A	底部		-	-	-	96	5	底...結1(LR・RL)横回
142-6	AO54PN2SW P2780	A	胴～底	-	単1(L)縦回	-	35	50	9	小型土器
142-7	AO58-4	C	口縁	単6A R横回・RRL側圧	-	-	-	-	4	
142-8	AN59-3 P723	A	口～胴	単1(R)横回	結1(LR・RL)横回?	-	-	-	5	
142-9	AO59-4 P764	A	口～胴	単1(R)側圧	RRL斜回	-	-	-	5	
142-10	AO59-3 P769	A	口～胴	単1(R)側圧	結筋R横回	-	-	-	5	
142-11	AN54PN2SW P2798	A	胴		単5(R)側圧を交互に施文、単1(R)側圧、結筋L横回	-	-	-	5	
142-12			胴	-	?	-	-	-	7	赤色顔料塗布
142-13	AO58-1 P829・AO58-4・AN59-2	C	完形	RRL斜回	RRL斜回	(151・112)	(94)	(74・71)	9	2力所穿孔あり、口縁平坦
143-1	AN62-3 P622		略完形	単1(R)側圧	RRL斜回	(220)	(348)	(108)	4	口唇やや平ら
143-2	AN59-4 P400		口～胴下	単1(R)側圧、微隆帯 単1(R)側圧	単1(L)縦回、結1(LR・RL)横回	(210)	(290)	(110)	5	口縁やや内湾
143-3	AO62-3 P652		口～胴下	緩い波状、口唇RL横回、単1(R)側圧	直前段反燃RRL斜回、結1(LR・RL)横回	(202)	(235)	-	5	口縁肥厚
143-4	AT 55		口～胴下	波状、単1(R)横回 LR側圧、口唇上単1(R)回	RRL多条斜回	(160)	(178)	-	3	
143-5	AR50		底部		RRL斜回	-	-	-	7	
143-6	AN62-1		口～胴上	LR側圧	結1(LR・RL)横回	(204)	(60)	-	5	
143-7	AK55		口縁	RL側圧・結筋R横回・縦回、結1(LR・RL)	-	-	-	-	5	
144-1	AO61-2 P672、AP61-1 P653		口～胴下	粘土紐貼付 L側圧	結1(0段多条LR・RL)横回	267	(240)	-	4	

土器観察表 7

図版番号	出土地点	出土層位	部 位	口 唇 ・ 口 縁	胴 部	口径 (mm)	器高 (mm)	底径 (mm)	分類	備 考
144-2	AN59-2 P398、 AN60-1、AN58-2 P198・179	B 4	口～胴下	粘土紐貼り付け L側圧、刺突列	結1(LR・RL)横回	(284)	250	-	3	
145-1	AM54 P2311・ 2301・2308 AL54 P2360	A	口～胴上	LR側圧?	単1(R)縦回	(168)	(118)	-	1	
145-2	AN54		胴部	-	LR 2条側圧、LR端部縦に押 圧、これらを交互に施文	-	-	-	1	
145-3	AM54 P2306	A	口	把手付き、LR側圧、文様帯の境界・把手 に竹管状刺突	円形粘土貼付け L側圧	-	-	-	1	
145-4	AM54 P2113	A	口～胴	円形粘土貼付け L側圧、RL側圧、文様 帯の境界に円形刺突	単1(A/R/L)縦回	-	-	-	1	
145-5	AN62-2 P517	A	口	波状、粘土紐貼付 L押圧、斜めに刺突	-	-	-	-	3	
145-6	AN54 P2390	A	口	粘土紐貼付 刻み 刺突文	-	-	-	-	3	
145-7	AN54 P2414	A	口	粘土紐貼付 L側圧?、刺突文	-	-	-	-	3	
145-8	AN57 P2202	B	胴部	-	粘土紐貼付 刻み 刺突文	-	-	-	3	
145-9	AN55 P2424	A	口	多条RL横回 粘土紐貼付	-	-	-	-	4	
145-10	AN56	A	口	穿孔部に縄文押圧、口縁に横位沈線一条、 粘土紐貼付	-	-	-	-	4	
145-11	AO58-2 P30	A	口	?	-	-	-	-	5	
145-12	AP59-2、AO58-2 P30	A	口	口縁上部断面三角形、円形刺突あり、LR 横回	-	-	-	-	5	
145-13	AN58-2 P39	A	口	波状、RL横回 ナデ	-	-	-	-	9	
145-14	AO60-2 P363・ 402	A	口	波状、中央穿孔、結束1(多条RL・LR) 横回 粘土紐貼付 L側圧	-	-	-	-	4	
145-15	AL59		口	波状、多条RL横回 ナデ、波頂部くぼみ あり	-	-	-	-	9	
145-16	AN59-1	B 4	口	RLR横回	-	-	-	-	9	
145-17	AN59-2	B 6	口	波状?、多条RLR横回	-	-	-	-	9	
145-18	AL60		口	口縁下部に段あり。無文。口縁はやや外 反する。	-	-	-	-	3	
145-19	AL60		口	口縁下部に段あり。無文。口縁はやや外 反する。	-	-	-	-	3	
145-20	AN62-1 P507	A	胴		無文、ナデ	-	-	-	3	内面に幅15cmのハケ メ
145-21	AN57	A	胴	-	一部LR横回 沈線	-	-	-	3	
145-22	AM56 P2355	A	口	口縁上端先細り、無文	-	-	-	-	3	
145-23	AM60		胴		LR斜回 横位沈線3条	-	-	-	3	
145-24	AO58-4 P11	A	口	口縁上部平坦、口縁外面に粘土紐貼付 LR横位	-	-	-	-	3	焼成堅緻
145-25	AN57	A	胴	-	LR斜回 沈線による幾何学 文	-	-	-	3	
145-26	AN56	A	口～胴		LR斜回 沈線による幾何学 文	-	-	-	3	
145-27	AL61		口	肩部で屈曲、口縁部外側に開く。上部に 横位沈線あり。	LR横回	-	-	-		器種 鉢
145-28	AL61		胴		L斜回	-	-	-		器種 鉢
145-29	AN57	A	胴	外面ケズリあり	内面ナデ?	-	-	-		器種 甕



礫石器観察表 1

図番号	出土地	層位	器種	分類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	備 考	整理 番号
152-2	AO60-1	C	磨製石斧	Ja	(11.1)	(5.3)	(3.6)	(346)	緑細凝	S-75. 刃部欠損。	307
152-3	AP61-1	A1	磨製石斧	Ja	(9.6)	5.2	3.1	(256)	石英安	基部欠損。	311
152-4	AP58-1		磨製石斧	Ja	(8.0)	(4.4)	(2.5)	(139)	緑細凝	S-2. 刃部片。	312
152-5	AO60-1	C	磨製石斧	Ja	(11.2)	(5.0)	2.9	(279)	緑細凝	S-73. 刃部欠損。	309
152-6	AO61-4	B3	敲磨器	Kb2	9.4	4.6	2.2	184	緑細凝	磨製石斧を転用。側面に擦切痕あり。	310
152-7	AN54-4	C	敲磨器	Ka1	14.2	8.4	3.2	434	凝灰岩	磨石 + 凹孔。スリ幅10mm。深い凹孔。	472
152-8	AO58-1		敲磨器	Ka2	6.6	6.5	5.0	172	凝灰岩	球状磨石の類。器面はざらつく。	194
152-9	AO58-2	C	敲磨器	Ka2	7.5	6.1	5.4	348	安山岩	球状磨石の類。	192
152-10	AO58-2		敲磨器	Ka2	7.8	7.4	6.3	438	流紋岩	S-20. 球状磨石の類。	191
152-11	PN4SW	B	敲磨器	Ka1	10.9	5.5	4.1	340	流紋岩	S-384. 磨石 + 凹孔。端部に強いスリ。	466
153-1	AM55	A	敲磨器	Ka2	11.1	6.4	2.4	295	凝灰岩	S-255. 扁平磨石。スリ幅10mm。	434
153-2	AM56-3	A	敲磨器	Ka2	15.4	8.5	3.5	599	流紋岩	平坦面に敲打痕。スリ幅6 ~ 13mm。	548
153-3	AN57-4	C	敲磨器	Ka2	16.4	10.0	3.6	627	凝灰岩	半円状扁平打製石器に似る。スリ幅5 ~ 10mm。	458
153-4	AO58-4		敲磨器	Ka2	8.4	8.1	2.5	276	石英安	S-12. 破損面に強い磨痕。スリ幅14mmと広いことから磨石に分類	202
153-5	AN57	A	敲磨器	Ka2	(7.0)	(5.6)	5.5	(385)	石英安	S-239. 三角柱状磨石の破片。スリ幅12mm。	433
153-6	AN55	A	敲磨器	Ka2	(6.9)	(7.0)	(3.1)	(227)	石英安	扁平磨石。欠損。スリ幅11mm。端部に敲打痕。	494
153-7	AO52		敲磨器	Ka2	14.8	5.1	1.4	162	ヒン岩	ほとんど無加工。側縁部に敲打痕。	525
153-8	AN55	A	敲磨器	Kb1	11.7	5.7	3.5	324	石英安	S-311. 敲石 + 凹孔。器面滑らか。スリ幅20mm。	542
153-9	AO60-1	B5	敲磨器	Kb1	9.2	8.4	3.9	525	輝緑岩	敲石 + 凹孔。周縁に敲打痕が巡る。	249
154-1	AN54	B	敲磨器	Kb1	(10.7)	5.5	2.5	(198)	流紋岩	S-375. 588と接合。敲石 + 凹孔。石斧刃部状。敲打痕あり。	402 + 588
154-2	AN55	C	敲磨器	Kb1	(12.2)	4.9	3.6	(309)	流紋岩	S-382. 棒状礫の端部に敲打痕。他の面に凹孔。器面に擦痕顕著。	545
154-3	AO50		敲磨器	Kb1	12.4	6.5	3.6	280	凝灰岩	敲石 + 凹孔。	489
154-4	AO59-4	B3	敲磨器	Kb1	16.9	5.7	4.1	596	流紋岩	S-101. 敲石 + 凹孔。器面滑らか。	239
154-5	AN57	B	敲磨器	Kb1	13.8	5.4	3.3	356	凝灰岩	S-243. 敲石 + 凹孔。	449
154-6	AN56-3	C	敲磨器	Kb1	13.6	4.7	2.8	223	凝灰岩	敲石 + 凹孔。両端部に敲打痕。器面滑らか。	407
154-7	AN55	B	敲磨器	Kb1	15.8	7.1	5.1	810	流紋岩	S-333. 木組み遺構。敲石 + 凹孔。器面は滑らか。	553
154-8	AM55	B	敲磨器	Kb1	18.6	6.7	5.5	1,030	石英安	S-367. 敲石 + 凹孔 + 磨痕。	408
154-9	AP58-2	A1	敲磨器	Kb2	15.6	7.7	6.4	1,076	石英安	敲石。被熱。下端部に弱い打痕。器面滑らか。	277
155-1	AP60-1	B5	敲磨器	Kb2	13.1	7.3	6.3	818	流紋岩	敲石。両端に敲打痕。器面滑らか。	248
155-2	AO50		敲磨器	Kb2	13.7	4.9	3.0	226	凝灰岩	敲石。棒状礫の端部に敲打痕。器面滑らか。	497
155-3	AN59-2	B3	敲磨器	Kb2	13.3	7.6	2.1	330	安山岩	S-135. 敲石。形状は扁平磨石。	201
155-4	AO58-1	C	敲磨器	Kb2	10.8	8.3	3.2	440	輝緑岩	敲石。S-136. 扁平な楕円礫の一部に敲打痕	252
155-5	AO59-4	B3	敲磨器	Kb2	11.5	8.5	5.6	682	頁岩	敲石。S-125. ハンマー？	246
155-6	AN56	B	敲磨器	Kb2	18.6	7.6	3.0	604	凝灰岩	S-231. 敲石。扁平礫の側縁に敲打痕。平坦面に線状のキズと打痕	444
155-7	AP59-1		敲磨器	Kb2	10.6	7.4	3.5	349	凝灰岩	S-392内。扁平礫の端部と側面に敲打痕。	197
155-8	AM56	A	敲磨器	Kc1	11.4	6.5	3.7	286	凝灰岩	S-354. 凹石。平坦面は滑らか。凹孔はすり鉢状で深い。	499
155-9	AO59-1	C	敲磨器	Kc1	11.5	8.1	3.9	441	緑色凝	凹石。軟質の素材。すり鉢状の凹孔。	241
155-10	AO59-3	B6	敲磨器	Kc1	11.0	5.4	3.9	298	流紋岩	S-118. 凹石。裏面平坦面はとくに滑らか。	235
155-11	AN55	B	敲磨器	Kc1	15.8	7.0	4.2	575	凝灰岩	S-371. 凹石。凹孔は敲打痕の集合。	498
156-1	AO58-1	C	敲磨器	Kc1	17.4	5.2	4.8	669	流紋岩	凹石。2面に凹孔。器体は滑らか。	233
156-2	AO62-1	C	敲磨器	Kc1	13.5	6.1	4.0	436	流紋岩	凹石。裏面平坦面はとくに滑らか。	240
156-3	AN56-4	A	敲磨器	Kc1	8.9	8.7	5.4	550	安山岩	広く浅い凹孔。台石として利用か。	557
156-4	AN53-3	A	敲磨器	Kc2	10.1	6.5	5.0	296	凝灰岩	凹石。石皿片利用か。脆い石材。凹孔はすり鉢状で深い。	424
156-5	AN53	A	半円状	L	(13.0)	9.0	4.5	(585)	ヒン岩	端部欠損。失敗品or未製品の可能性大。	474
156-6	AN59-2	B3	半円状	L	13.3	9.1	2.3	386	輝緑岩	S-131. 失敗品の可能性大。平坦面に凹孔と溝状のキズ。	220
156-7	AO59-1+2	C + B6	半円状	L	14.3	6.7	1.8	239	安山岩	204 (S-116) と接合。機能面に狭いスリ。スリ幅0 ~ 8mm。	203
156-8	AP57 + AM56	+ A	半円状	L	12.0	7.4	1.5	144	凝灰岩	429 (S-258) と接合。破損面に磨痕。挿入扁平磨製石器の可能性あり。	132 + 429
156-9	AO57	C	半円状	L	(11.5)	8.2	1.7	(245)	安山岩	S-201. 器面に軽いスリ整形。スリ幅0 ~ 5mm。	516
157-1	AM56	A	半円状	L	17.2	6.8	2.5	382	ヒン岩	S-352. 完形。器面滑らか。スリ幅0 ~ 7mm。	500
157-2	AO57	C	半円状	L	18.5	7.5	2.6	486	流紋岩	S-248. 完形。器面に軽いスリ整形。スリ幅0 ~ 5mm。	443
157-3	AN55	A	半円状	L	15.7	7.3	1.7	338	ヒン岩	板状礫。完形。器面ざらつく。スリ幅0 ~ 8mm。	485
157-4	AN59-1	B4	半円状	L	12.9	5.3	2.1	187	凝灰岩	板状礫。完形。	215
157-5	AN57	A	半円状	L	11.0	6.1	2.0	201	流紋岩	S-204. 器面にスリ整形。スリ幅0 ~ 7mm。	523
157-6	AO59-4	C	半円状	L	(10.5)	(6.8)	(3.0)	(230)	流紋岩	S-62. 1/2. 板状礫。スリ幅12mm。	206
157-7	AO59-4	B3	半円状	L	13.0	6.5	2.3	328	凝灰岩	S-112. 完形？。板状礫。器面スリ整形。	213
157-8	AN59-3	B4	半円状	L	17.0	8.1	2.5	454	凝灰岩	S-122. 578 (北区AT49) と接合。破損面に磨痕。ほぼ完形に復元。	210 + 578
158-1	AO61-1	B3	挿入扁	M	18.8	9.3	1.6	414	凝灰岩	S-79. ほぼ全面研磨。	224
158-2	AO59-3		挿入扁	M	(11.3)	(6.8)	(2.2)	(247)	凝灰岩	S-37. 先端部破片。全体をスリ整形。	223
158-3	AN59-3	C	挿入扁	M	(8.5)	(7.0)	(2.2)	(132)	安山岩	S-69. 刃部片。片側縁は鋭角。	227
158-4	AN55	A	挿入扁	M	(9.8)	(5.8)	(2.4)	(190)	ヒン岩	S-298. 先端部破片。左側縁は平坦。	490
158-5	AR49		挿入扁	M	(6.7)	(11.0)	(0.9)	(96)	凝灰岩	体部破片	493
158-6	AN57	C	挿入扁	M	(8.2)	(8.2)	(2.3)	(154)	凝灰岩	S-203. 破片。	456
158-7	AO52-4	A	挿入扁	M	(8.5)	(7.6)	(2.8)	(236)	凝灰岩	破片。端部に簡略化された挿入の溝。丁寧なスリ整形。	427
158-8	AN58-4	C	挿入扁	M	(10.2)	7.8	2.1	(269)	凝灰岩	先端部欠損。挿入部は打ち欠き。	226
158-9	AM55	A	挿入扁	M	(8.3)	(8.5)	(2.6)	(296)	流紋岩	S-284. 基部片。挿入部分は敲打による。	486
159-1	AO54	A	挿入扁	M	(12.7)	7.0	1.3	(166)	凝灰岩	S-293. 先端欠。刃部V字状。	513
159-2	AO58-4	C	挿入扁	M	(11.3)	(13.1)	(1.3)	(221)	凝灰岩	S-152. 基部破片。全体をスリ整形。機能面に2 ~ 3mmの平坦面。	313
159-3	AO58-1	C	挿入扁	M	(8.8)	(9.5)	10.4	(193)	凝灰岩	挿入部にスリ。	225
159-4	AN59-2	B5	挿入扁	M	(11.0)	(8.5)	2.1	(250)	安山岩	基部破片と思われるが、挿入部は作出されていない。擦切具？	229
159-5	AN59-3	C	挿入扁	M	(10.6)	10.2	1.6	(296)	凝灰岩	1/2. 基部。	230
159-6	AN56	B?	挿入扁	M	(7.4)	(8.7)	(1.5)	(173)	凝灰岩	S-236. 基部破片。挿入部分はスリ。	457
159-7	AN55	A	挿入扁	M	11.0	7.9	1.6	219	凝灰岩	S-319. やや粗雑なスリ整形。未製品か。	390

礫石器観察表 2

図番号	出土地	層位	器種	分類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	備 考	整理番号
159-8	AM54	A	石冠	N	14.0	9.9	8.6	1,269	凝灰岩	S-305. 全体を敲打整形。広いスリ幅 (80mm)。	393
160-1	AN57 + AM57	B + C	擦切具	S	21.1	12.7	1.5	586	流紋岩	S-313. 4辺が接合。炭化物付着。器面に簡易なスリ整形。	396 + 550
160-2	AQ51		擦切具	S	18.2	12.5	1.2	578	石英安	板状礫。半円形に整形。器面には粗雑なスリ整形。	492
160-3	AO59-2 + AN57-4	C	擦切具	S	18.2	(15.0)	2.5	(835)	安山岩	S-641. 465、534と接合。板状礫。上下側縁に刃部。加工は粗雑。	327 ほか
160-4	AN60-3	B5	擦切具	S	(12.9)	11.2	1.4	(320)	凝灰岩	S-773. 一部欠損。	319
160-5	AN59-2	B3	擦切具	S	(8.2)	(10.4)	1.3	(157)	凝灰岩	S-96. 破片。刃部断面V字状。	209
160-6	AO58-1	C	擦切具	S	10.0	12.0	2.3	(194)	安山岩	破片。板状礫。刃部は丸みを持つ。	297
161-1	AN56	B	石皿	Oa	34.5	30.0	11.8	12,100	石英安	S-341. 木組み遺構。完形。両面利用。溝状の痕跡。	417
161-2	AN53	A	石皿	Oa	23.4	14.6	4.6	(1,884)	凝灰岩	S-378. 木組み遺構。欠損。両面利用	420
161-3			石皿	Oa	32.5	(20.0)	6.8	(4,760)	安山岩	354 (85号埋設土器出土) と接合。両面利用。表面は幾分窪む。354の裏面には浅い溝の痕跡が見られる。	604
161-4	AN57	C	石皿	Oa	(21.0)	(18.2)	2.7	(1,260)	凝灰岩	S-273. 板状礫。裏面は無加工。欠損。	454
161-5	AN55	B	石皿	Oa	20.2	18.6	6.1	2,809	石英安	S-338. 木組み遺構。完形。両面利用	559
161-6	AO59-2 + PN5SW	C	石皿	Oa	20.4	(12.6)	3.6	(1,082)	石英安	609 (P-383) と接合。欠損。被熱。表面やや窪む。表裏面に打痕。	262 + 609
161-7	AN58-3		石皿	Oa	17.0	13.4	4.2	1,338	凝灰岩	S-24. 完形?。片面利用	265
161-8	AO54	A	石皿	Oa	(22.0)	(18.5)	(9.8)	(3,243)	安山岩	S-294. 破片。片面利用	419
162-1	AN57	C	台石	Ob	35.1	9.2	7.2	4,010	石英安	S-401. 2片が接合。大型の砥石の可能性もある。両面使用。	564
162-2	AN56	B	台石	Ob	19.2	16.2	10.1	2,881	凝灰岩	S-368. 木組み遺構。完形。平坦面に溝を形成する擦痕あり。	416
162-3	AN59-3	B5	台石	Ob	21.5	8.0	5.9	1,601	流紋岩	端部近くに敲打痕。器面滑らか。	286
162-4	AN57	A	台石	Ob	15.7	15.4	5.9	1,342	凝灰岩	S-206. 器面滑らか。広い敲打痕。	528
162-5	AO53	C	台石	Ob	13.9	7.1	5.1	936	流紋岩	S-396. 角柱状。表裏面に溝状の小さなキズ。	566
162-6	AO58-1 + AO52-4	C + B	砥石	R	14.5	8.8	6.2	1,268	流紋岩	570と接合。片面に線条痕。	289
162-7	AO60-1 + AN60-4	B5 + B4	砥石	R	28.4	6.1	3.5	(435)	凝灰岩	328と接合。石皿片を再利用か。上部に溝状の研磨痕。	271 + 328
162-8	AN54	A	石錘	Q	8.6	7.3	3.3	262	凝灰岩	S-218. 長軸端部を打ち欠き。	432
163-1	AO53-1	C	石棒	Pa	34.1	11.5	9.8	5,900	石英安	器面全体に軽いスリ。	535
163-2	AN55	B	石棒	Pa	33.3	12.0	8.2	5,100	石英安	S-370. 表裏面は平坦気味で、滑らか。	537
163-3	PN5SW	C	石棒	Pa	31.4	11.3	8.7	5,300	石英安	S-381. 表裏面は特に滑らか。	565
163-4	AO58-1	C	石棒	Pa	26.4	11.5	10.7	4,992	石英安	器面全体が滑らか。	275
163-5	AN60-2	B5	その他	Ta	10.5	7.0	6.0	818	緑細凝	磨製石斧原石。擦切溝あり。	298
163-6	AM56	B	その他	Ta	8.3	5.7	2.5	156	流紋岩	P-2151. 右側縁に擦切溝。半円状抉入扁の可能性もある。	607
163-7	AN54	A	その他	Ta	9.8	3.0	2.7	106	凝灰岩	S-348. 磨石?。片面が特に平滑。	562
163-8	AN56	B	その他	TA	10.0	10.3	4.4	612	凝灰岩	S-238. 扁平な円礫。器面全体にスリ整形。滑らか。磨石の類?。	438
163-9	AN57	A	その他	Ta	12.1	7.3	6.2	746	安山岩	S-229. 破片を再利用?。器面は平滑。	509
163-10	AN59-3	B3	その他	Ta	18.8	6.5	5.9	1,196	流紋岩	S-98. 器面は滑らか。砥石の可能性あり。	281

土製品一覧表

図番号	器種	出土地	層位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備 考	整理番号
164-1	円盤状土製品	沢	AO53	B	(50)	(23)	10 (9.8)	土器片利用の円盤。破片。P-2701。	961
164-2	円盤状土製品	沢			45.0	42.0	12.7 25.1	土器片利用の円盤。完形。貫通孔あり。周縁の大部分スリ。P-229。	5
164-3	円盤状土製品	沢9	AN59-3	C	50.4	42	7.9 19	土器片利用の円盤。完形。周縁スリ。P-639。	7
164-4	円盤状土製品	沢	AO60-1	C	(51)	51.0	8.6 (18.6)	土器片利用の円盤。破損。方形。P-689。	768
164-5	円盤状土製品	沢5ベルト		C	51.3	50.3	8.4 24.1	土器片利用の円盤。	801
164-6	円盤状土製品	沢		C	43.6	44.0	11.0 15.5	土器片利用の円盤。完形。	805
164-7	円盤状土製品	沢	AN61-2	B4	57.7	57.3	8.4 33.1	土器片利用の円盤。完形。P-632。	6
164-8	円盤状土製品	沢	AP61-1		(53)	(52)	15 (35.9)	円盤状土製品。表裏面に縄文施文。破片1/4。	2

石製品一覧表

図番号	器種	出土地	層位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石質	備 考	整理番号	
165-1	岩偶		AN58-3	C	(90.3)	(63)	(41.4)	(203.1)	細粒凝灰岩	脚部。	1
165-2	椀状	沢 ベルト	AN58-2	C	47.0	41.0	11.0 14.2		細粒凝灰岩	一部破損。	12
165-3	不明	沢	AN56-1	B	55.4	54.6	35.0 22.1		軽石	中央に凹み。S-クルミ。	6
165-4	浮き?	沢	AP61-1	A1	81.0	55.0	51.0 49.5		軽石	完形。三角形状。貫通孔あり。	7
165-5	不明	沢		B	60.6	45.5	24.1 30.3		細粒凝灰岩	中央に凹み。S-351。	2
165-6	浮き	沢		C	60.5	52.6	37.0 20.4		軽石	ほぼ完形。十字状の刻み。S-68。	8
165-7	不明	沢	AN58-3		128.6	130.2	58.2 471.5		軽石	四角形。素材?	9
165-8	不明	沢	AO53-1	A1	70.0	52.2	31.4 43.5		軽石	長方形。素材?	10
165-9	長楕円	沢	AO62-1	C	70.0	33.0	25.8 20.4		軽石	棒状	5
165-10	不明	沢	AN59-1	B	105.5	41.8	47.2 80.0		軽石	棒状。	11



# 写真図版



遺跡遠景 南から



遺跡遠景

写真1 遺跡遠景1





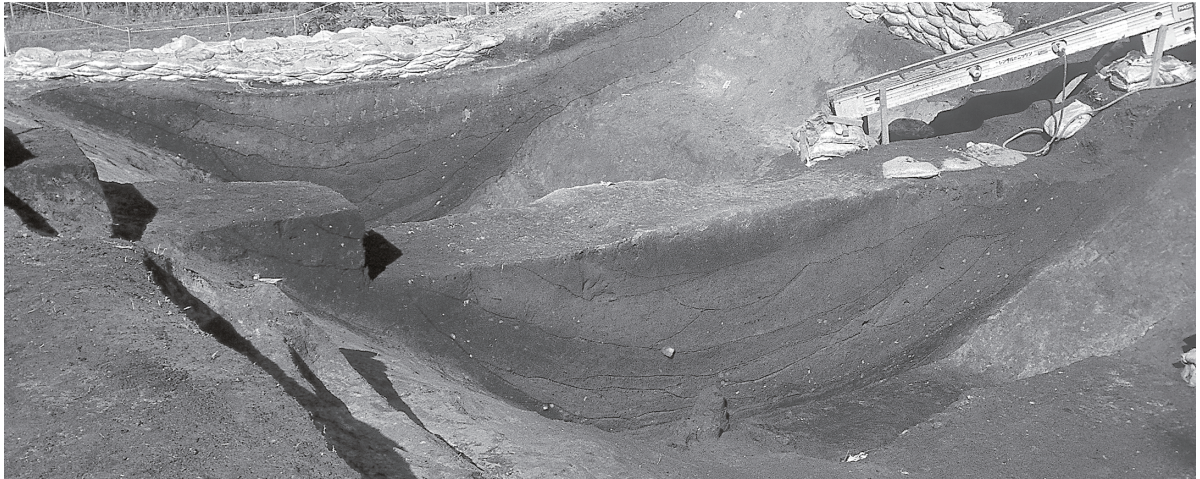
遺跡近景 西から



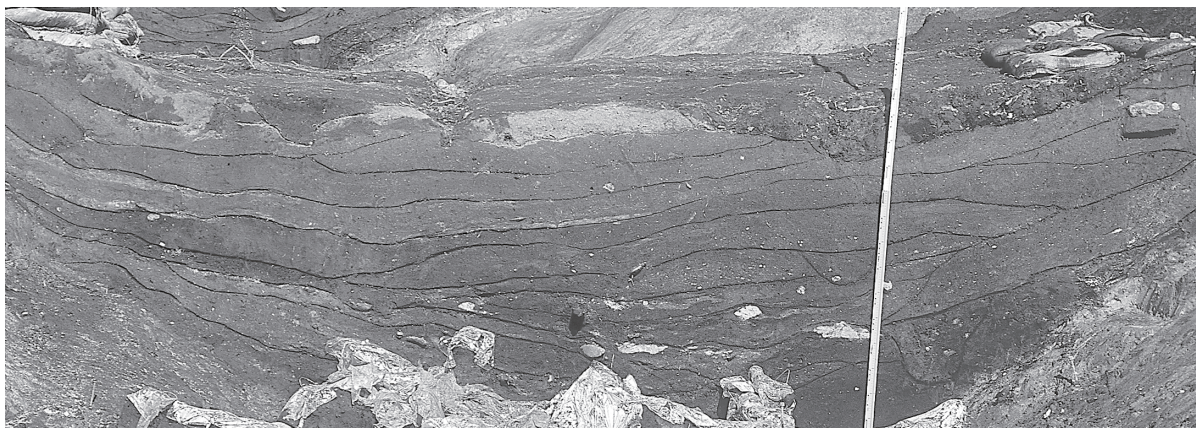
遺跡遠景 西から

写真2 遺跡遠景2





沢 ・ ベルト土層 南東から



沢 ベルト土層(アップ) 西から



沢 ベルト土層 西から



沢 ベルト土層中央 西から

写真3 層序1

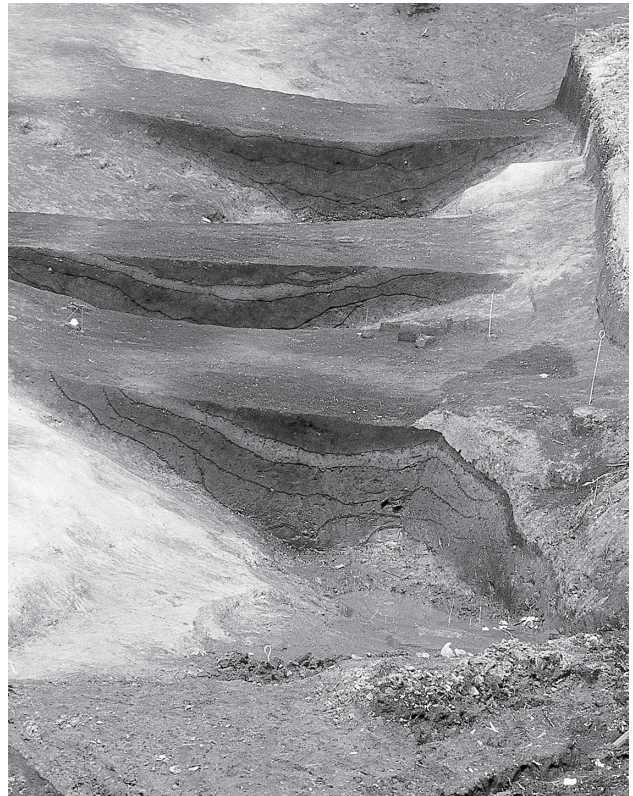




調査区境界土層 西から



調査区境界土層(アップ)



支流 ~ ベルト土層 南から



AN57基盤土層 西から



ベルト土層付けたし 西から



AN55・54付近基盤土層 西から





検出状況1 西から



検出状況2 南東から



東側からの検出状況 東から

写真5 第1号木組遺構（全体1）





全体検出状況 南から



全体検出状況 北から



全体検出状況 南から(アップ)

写真6 第1号木組遺構(全体2)





導水部検出状況 北から



導水部検出状況 西から



導水部検出状況 東から

写真7 第1号木組遺構（導水・貯水部1）





貯水部東側・木柱部分 南西から



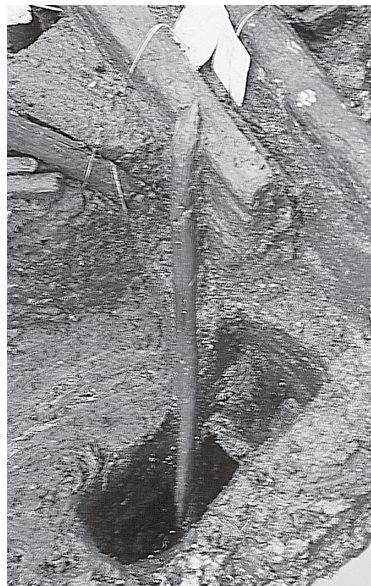
杭検出状況 (30-4)他 東から



杭検出状況(40-3)他 東から



貯水部東側検出状況 北から



杭検出状況 南から



貯水部木組部分 南から

写真8 第1号木組遺構(貯水部2)

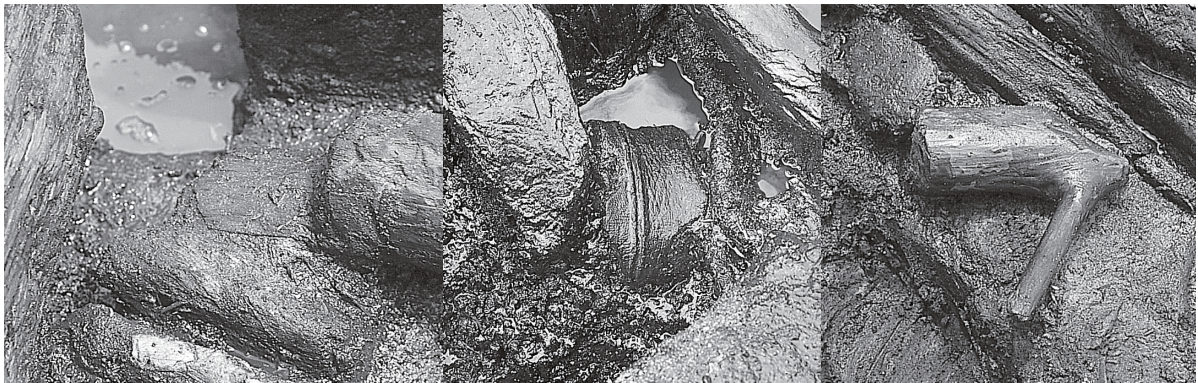




貯水部内 東から



貯水部分検出状況 北から



44-1 先端部(北側) 南から

土器出土状況 南から

石斧柄未製品出土状況 北から



貯水部北枠外側検出状況 北から

写真9 第1号木組遺構(貯水部3)





堰部検出状況 東から



堰部南側(アップ) 南から



堰部側面 南から

写真10 第1号木組遺構(堰部1)





堰部(第3・4列)と底板検出状況 北から



堰部(第4列)と底板検出状況 南から

写真11 第1号木組遺構(堰部2)





堰部(第4列)側面 南から



権転用杭(31-3)検出状況 東から



堰部(第4列)後方杭検出状況 東から

写真12 第1号木組遺構(堰部3)